

(2) 鳥 類

【 掲載種の解説（鳥類）に関する凡例 】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を評価対象個体群毎に各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2019」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形 態】

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。ウェブページ上の情報については、URL 及びアクセス年月日を掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献の内、代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 鳥類 執筆責任者 】

高橋伸夫

今回の記述の中で、初版（レッドデータブックあいち 2002 動物編）の発行後に新しい知見の無い部分の多くについては、初版を執筆された稲田浩三氏の文を引用させていただいた。

県内における野鳥生息状況の資料として、愛知県環境局環境政策部自然環境課「愛知県鳥類生息調査」、東三河野鳥同好会機関紙「このはずく」、西三河野鳥の会機関紙「ケリ」及び「西三河野鳥の会研究年報」を引用させていただいた。

【 鳥類 調査協力者 】

次の方々および団体に情報提供、写真提供、現地調査等で協力していただいた。

愛知県野鳥保護連絡協議会（愛知生物調査会 渥美自然の会 岡崎野鳥の会 尾張野鳥の会 海上の森自然観察会 カラスの弁護士ネットワーク 三ヶ根ハヤブサを守る会 汐川干潟を守る会 扇子山タカの渡り観察グループ 名古屋鳥類調査会 西三河野鳥の会 21世紀の巨大開発を考える会 日本野鳥の会愛知県支部 日本野鳥の会施設運営支援室 パンダクラブ愛知 藤前干潟を守る会 三河湾水鳥調査会） 東三河野鳥同好会

秋山幸之朗	浅井 光	浅井利明	浅沼秀夫	安達直孝	渥美守久	安藤ひろみ
家田 明	五百沢日丸	石井照昭	石川遠見	石川 均	石黒龍二	板倉真也
伊丹英生	市川葉子	伊藤岱二	稲垣建郎	稲垣 順	稲田浩三	井上雅子
井原隆一郎	伊豫田仲次	岩田郁代	梅村昭雄	大内秀之	太田次雄	大竹一郎
大羽康利	大畑孝二	大原満枝	大山茂美	小笠原正博	岡田勇一	緒方清人
小澤尊典	小田敦子	織田重己	小幡竹玄	小柳津弘	柿本 浩	角村建一
加藤蔵人	加藤 定	加藤正人	加藤倫敦	川隅希録	川田 隆	川田奈穂子
木村修司	木村 勝	桑 克彦	倉多利通	香村敏之	小林 学	小嶋良武
駒井恒博	近藤明博	近藤宜嗣	近藤文孝	西郷 清	坂口 実	坂田樹美
佐藤制一	佐藤 豊	澤田喜代	篠田耕児	清水敏弘	清水正義	下村孝嘉
白井直子	神藤寿子	榛葉忠雄	菅沼高吉	杉浦清丸	杉浦史弥	杉山時雄
鈴木 彰	鈴木和幸	鈴木恒則	鈴木敏弘	鈴木真人	角谷純子	瀬戸良二
高木慎介	高田俊洋	高橋 哲	高橋秀則	高森英夫	竹生直行	武田芳男
竹本早苗	竹本 孝	多田 茂	立石次朗	田中芳治	辻 淳夫	戸塚 学
戸松秀仁	仲 重親	名倉佳弘	成田 進	新實 豊	根本宗一郎	野口由美子
野田信裕	橋本美保	畑佐武司	羽田野五規	服部平生	早川久司	林 正直
原田健男	判家卓司	深田昭彦	深見 弘	藤岡エリ子	藤岡純治	藤川真史
本田美佐緒	前田茂雄	牧 則子	牧野伸一	牧野元実	増田 務	柵木宗孝
松井邦郎	松井 弘	松本哲之介	真野 徹	宮永悦治	宮原英明	樺山恵一
森井豊久	矢澤美智子	矢島大造	安井謙介	山形則男	山口薫可	山口恵子
山本 晃	山本光昭	横山則一	吉田 健	吉田正志	吉鶴靖則	吉村信紀
若杉 稔	渡邊範久	渡辺幸男	渡邊幸久			

(敬称略)

マミジロ *Zoothera sibirica* (Pallas)

【選定理由】

県内における繁殖期の主な生息地として段戸裏谷、面の木峠、茶白山が知られていたが、2009年以降は全ての地域から繁殖期の生息記録がなくなっている。これらの地域では環境の変化が感じられるだけでなく、周辺にある長野県の根羽村や売木村からも繁殖期の生息が確認されなくなっていることから、愛知県では繁殖絶滅と評価された。県内で春秋の渡りで見られる通過個体についても、確認できる場所が少なくなり、確認の機会も減少している。

【形態】

全長 23cm。雄は全身が黒色で、白色の太い眉斑がある。雌は全身暗褐色で、細い眉斑と喉は白色、下面には淡色の斑がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

西三河北東部と東三河北部に位置する標高 1,000m 程度以上の山地で局地的に繁殖していた。春秋の渡りの季節には県内全域で確認されていたが、近年はかなり減少している。

【国内の分布】

夏鳥として本州中部以北の山地に飛来する。特に本州中部の標高 700～1,500m の森林に多く飛来して繁殖するが、東北や北海道の平地でも繁殖する。

【世界の分布】

シベリア中南部から中国北東部、サハリン、日本で繁殖し、冬期は中国南部、東南アジアで越冬する。



長野県下伊那郡根羽村, 2008年5月4日, 杉山時雄 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

標高 1,000m 程度以上の広葉樹林や針広混交林に生息し、地上でミミズ、昆虫などを捕食するほか、樹上で木の実を食べる。茂みに覆われた樹枝上に、草の茎、枯れ枝でわん形の巣を作り、キョロンツリー、キョロンツリーと囀る。空が白々と明け始める頃から囀り始め、太陽が昇り切るとあまり囀らなくなる。春の渡りでは平野部でも囀りを聞くことがあり、特に標高 600m 程度の猿投山や 400m 程度の遠望峰山の山頂近くでは確認例が多い。秋の渡りで囀ることはほとんどなく、以前は低山で集合する群れが見られたり、平野部の河川沿いや都市公園で見られることも少なくなかったが、近年こうした姿を観察する機会も少なくなっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

段戸裏谷、面の木峠、茶白山の原生林や二次林が主な繁殖地であったが、2009年以降繁殖期の生息が確認されていない。繁殖期の記録がなくなった後も、段戸裏谷では秋の記録が 2 例ある。減少の要因は不明であるが、地球温暖化の他に観光開発による道路や施設などの整備、立入人口増加の影響は小さくないと思われる。外来種ソウシチョウ *Leiothrix lutea* は段戸裏谷で 2000 年、茶白山では 2007 年に生息が確認されて以降増加して、現在ではこれらの環境に生息する野鳥の最優占種となっている。特に茶白山では繁殖期に本種やアカハラが生息しなくなった時期と、ソウシチョウが生息するようになった時期が一致しているが、現時点でその影響は不明である。

【保全上の留意点】

県内に残る原生林を周辺の環境と共に保全し、原生林内外の沢や道路等の整備等を行う場合は環境に及ぼす影響を十分に考慮しなければならない。また原生林内への入山人口が増えていることから、必要に応じて立入禁止区域を設定するなどの措置を行って、野生生物の生息環境を保全することも必要である。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.244. 文一総合出版, 東京.

（高橋伸夫）

ビンズイ *Anthus hodgsoni* Richmond

【選定理由】

1980年代半ばまでは繁殖期に標高 1,000m 以上の井山や茶臼山などに生息して繁殖行動も観察されていたが、1980年代後半から繁殖期の生息が全く確認されなくなって、愛知県における繁殖個体群は絶滅と評価された。通過や越冬の個体群は減少しておらずリスト外と評価された。

【形態】

全長 15cm。上面は緑褐色で不明瞭な黒褐色の斑がある。眉斑と顎線および喉から下面全体は白および白っぽいバフ色に黒褐色の斑があり、脇は黄褐色味を帯びる。冬羽では下面を含め全体に黄褐色味を帯びる。



愛知県安城市, 2011年2月26日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

繁殖期に生息が確認されていたのは標高 1,000m 以上の井山や茶臼山などで、1980年代半ばまでは確認されている。渡りの季節は県内のほぼ全域で見られ、冬期は県内の山地や平地、沿岸部や島嶼などで局所的に越冬する。

【国内の分布】

四国以北で繁殖し、本州中部以南では標高 1,000m 以上で、東北以北では平地でも繁殖する。東北以北では主に夏鳥あるいは旅鳥で、本州中部以南では主に旅鳥あるいは冬鳥。

【世界の分布】

ロシア中南部および中国東部からヒマラヤまでのユーラシア大陸および千島から日本までの列島で繁殖して、冬期はアジアの中部から南部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内の繁殖地は、標高 1,000m 以上の高原にある牧場などで、周辺に疎林のある環境。越冬地の環境は、作物の生えていない農地。面積の広い社寺や公園で、裸地や草が疎らに生える環境を好む。渡りの季節は昼間だけでなく、曇天の夜間でも上空を移動する。上空を 1羽から数羽で移動するが、「ゾーッ」と鳴きながら通過するので、声の識別ができれば確認は容易である。尾を上下に振り、歩きながら地面で採餌する。松の生えた環境を好み、太い松の横枝の上を歩くのが特徴である。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年は県内で繁殖期の観察記録がなく、茶臼山では長野県側でも同様に繁殖期の生息が確認されなくなった。要因として地球温暖化や観光開発などによる影響が考えられるが、繁殖地の牧畜業が衰退して、放牧される家畜がいなくなると共に、繁殖期の本種も姿を消している。牧場で家畜の排せつ物等に依存する昆虫なども、本種の繁殖には必要であったものと推測される。

【保全上の留意点】

それ程古くない過去に原生林が開墾されて牧畜がはじまり、その環境に適応して繁栄した野鳥は少なくない。欧州型牧場の環境は日本では主に標高の高い山地や東北、北海道で、明治時代から作られた環境であり、僅かながら愛知県にも存在している環境である。本種をはじめ同様の環境で絶滅の危機に瀕している種の復活には、牧畜産業の再振興が不可欠であるのかもしれない。

【特記事項】

同様の環境から繁殖期の生息が消失あるいは減少している種は数多いが、愛知県では、野鳥観察が一般的になった 1970年代以降で、最も早い時期にその環境から姿を消した野鳥が本種である。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.322. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel

【選定理由】

日本でのみ繁殖する種で、本州の一部で局地的に繁殖が知られており、生息数も少ない。愛知県鳥類生息調査では、繁殖期に複数の記録がある場所として新城市にある「県民の森」と豊根村の「茶臼山」では、2000年代半ばまでの生息記録はあるが、それ以降は記録がなくなっている。繁殖環境が本州の標高700~1,200m程度の場所ということから、調査地の最高標高が250mである「県民の森」の個体が繁殖していたかどうかは不明であるが、「茶臼山」では調査記録以外にも普通に観察されており、県境を挟んだ長野県側でも、1980年代までは多くが繁殖していた。同じ山系にある面ノ木峠でも記録があったが、2006年以降は県内で繁殖期の確認記録がなくなっている。

【形態】

全長14cm。頭部は灰緑色で、眼先は黒色で眼の周囲に白色の細い縁取りがある。背は暗灰緑色で暗褐色の縦斑があり、大雨覆と中雨覆の先端は汚白色で2本の翼帯に見える。喉は黄色で胸から腹にかけて汚黄色で、脇に灰緑色の縦斑がある。嘴は灰色で脚は肉色。雌は、眼先は黒色でなく、雄に比べて頭部の緑色味が少なく、下面の黄色も淡い。



長野県, 2011年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

繁殖期に東三河の山地で局地的に生息し、春秋の渡りでは平野部でも記録がある。

【国内の分布】

夏期に、主に本州の青森県から兵庫県までに生息し、局地的に繁殖する。本州西部以南では冬期の記録もある。

【世界の分布】

繁殖地としては日本のみが知られ、本州のごく一部で繁殖する。冬期は台湾、中国南部、フィリピン北部に生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

本州の山地にある疎林で、局地的に繁殖する。林縁の低い樹枝上に、枯草などでわん形の巣を作り通常3~5卵を産卵する。チヨ、チヨ、チヨイピーピリップピなどと囀り、地鳴きはズツ、ズツと聞こえる。春秋の渡りでは、平野部の林や河畔林などでも確認されるが、近年は極めて希になった。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の県内で、繁殖期に生息の可能性があるのは茶臼山周辺のみと思われるが、県境を挟んだ長野県側でも全く記録がなくなっている。茶臼山から繁殖期の生息がなくなった要因として、観光開発による生息環境の変化が挙げられる。なお県境を挟んだ長野県側では、最近本種に代わって、近縁種でより標高の高い場所で繁殖するアオジが繁殖期に確認されている。以前本種が生息していた場所の周辺で観察されており、今後どのような変遷をするのか観察を継続したい。

【保全上の留意点】

県内で稀有な環境である高原の牧場は、観光資源としても重要な環境である。その観光資源を活かすためにも、本来その環境に生息していた生物の生息環境を保存し、さらには再生する努力も必要と思われる。

【特記事項】

1930年代には段戸山西川地区で、本種が「一般に繁殖していた」という記録も残されている(夏目, 1936)。

【引用文献】

夏目五一郎, 1936. 段戸山の鳥(二). 野鳥, 第3巻第7号. pp.20. 日本野鳥の会, 東京.

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.370. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin)

【選定理由】

1980年代までの愛知県では、夏鳥として県内沿岸部のヨシ原に数多く飛来し、干拓地や埋立地のヨシ原で普通に繁殖する小型のサギであった。繁殖期である5～6月の生息数が1990年代に激減しており、その頃を境にそれまで記録の少なかった内陸や丘陵地で若干記録が増えているが、その後も県内の確認記録は減少を続けた。内陸では名古屋市法螺貝池で2000年代半ばに繁殖記録がなくなり、沿岸部でも西尾市一色地区の2009年5月25日の記録を最後に県内全域から繁殖期の生息記録が消失しているだけでなく、県内では渡りの季節の記録も極めて希なものとなっている。

【形態】

全長36cmの小型のサギ類。上面が茶褐色で下面は黄白色。飛翔時に茶褐色の雨覆と黒色の風切のコントラストが鮮明。頭上の色は、雄の成鳥では黒く雌の成鳥では赤褐色。幼鳥は、体全体に縦斑があり、体の下面は淡色。



愛知県名古屋市, 2004年7月7日, 浅井利明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に沿岸部や平野部、丘陵部にある池沼のヨシ原に生息し繁殖するが、現在は通過個体を含め、姿を確認することが極めて希となっている。

【国内の分布】

主に夏鳥として飛来し、九州以北で繁殖する。本州中部以西では越冬例もある。

【世界の分布】

東アジアから東南アジア、ミクロネシア西部およびインドやセーシェル諸島に分布し、東アジアで繁殖するものは冬期南へ移動する。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部の干拓地や埋立地、平野部や丘陵地にある池沼や水路、水溜りなどのヨシ原で繁殖するが、特に広大な水田がある沿岸部などの水辺を好む。ヨシ原の中で、ヨシやガマなどの茎と葉を用いてお椀のような巣を作る。採餌には繁殖場所の池だけでなく周辺のヨシ原や水田などへ出掛けて魚類、カエル、ザリガニなどを捕食する。ウォツ、ウォツまたはウォーオ、ウォーオと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代に本種が数多く生息していた伊勢湾北部の鍋田地区や三河湾東南部にある汐川干潟周辺では、2000年までにはほとんど姿を消しており、僅かに残っていた西尾市一色地区の沿岸部からも、2009年の記録を最後に繁殖期の記録がなくなっている。減少の要因は県内全域でのヨシ原面積の減少と、水田の転作による乾燥化などで餌となる生物が減少していることなどがあげられる。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分に、池沼を復元することが理想である。都市公園の池や住宅団地、工業団地の遊水池でも、繁殖期にある程度の水量と餌生物の確保ができれば生息は可能である。

【特記事項】

本種と捕食者であるチュウヒ、およびヨシ原面積の関係をみると、チュウヒが多く繁殖していた1980年代は、県内沿岸部に存在するヨシ原面積も広大で、本種の減少傾向はみられなかった。ヨシ原面積が減少した2000年頃から本種も激減しており、繁殖期の本種の記録が消滅した2009年には沿岸部からヨシ原の大半が消滅して、繁殖期のチュウヒの記録も減少している。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.47. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

オオジシギ *Gallinago hardwickii* (Gray)

【選定理由】

県内では新城市の作手地区で1981年に繁殖が確認され、その後豊田市の稲武地区でも繁殖していることが確認されていたが、近年これらの地域から繁殖期の生息が確認されておらず、繁殖種として絶滅の危機に瀕している。春秋の渡りの季節には伊勢・三河湾沿岸の農地や平野部の河川などに飛来するが、数が少なく近年その確認数はさらに減少している。夜間の調査が不足していることから、愛知県では、繁殖個体群は絶滅危惧ⅠA類、通過個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 28～33cm、翼開長 48～54cm。タンギなど同属他種とよく似るが、一般的には体が大きく嘴や尾羽が長め。眉斑は目先で太く見え、尾羽の枚数は通常16枚～18枚である。タンギ属4種の中では最も大きく、体は横長に見える。最も似ているチュウジシギとは幼鳥羽、成鳥羽共により体色が淡く見える模様などで識別は可能であるが、容易ではない。



愛知県知多郡東浦町, 2004年8月2日, 駒井恒弘 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

近年まで、山地の湿地や草原で少数が繁殖していた。春と秋の渡りでは、沿岸部の農地や草地、平野部の河川敷などでみられる。

【国内の分布】

主に北海道、本州北東部で繁殖するが、本州中西部、四国、九州でも少数が繁殖する。

【世界の分布】

ロシアの沿海州東部、サハリン南部、南千島、日本で繁殖し、オーストラリア東部、タスマニア、ニューギニアなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

タンギ属の中では、最も長い距離を渡る種のひとつ。国内における繁殖地の環境は、北海道や東北地方では主に平野の低湿地、本州中西部から四国・九州にかけては、山地の開けた部分にある湿地や草原で、地上に皿型の巣を作る。繁殖期には、ズビーヤク、ズビヤク、ズビヤクと鳴きながら飛び回り、急降下をしながら尾羽でザザザ…と羽音をたてる独特なディスプレイ飛行を行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

新城市長ノ山湿原では1990年まで、豊田市池之平では2005年まで繁殖期に生息していた。他に豊根村の茶臼山高原や豊田市藤岡地区でも繁殖期の確認記録はあるが、いずれの環境も乾燥化や周囲の開発などの環境悪化がみられ、県内における繁殖絶滅の可能性が高い。

【保全上の留意点】

県内の高原に存在する湿原の環境や、その周辺の環境を保全するべきである。牧歌的な風景の中でしか生息や繁殖ができない野鳥やその他の野生生物がいることも理解されて、酪農業などの振興が図られることを望む。沿岸部では、本種に限らず水田を渡りの中継地としてきた水鳥のために、餌生物を含む生態系の保存を目的として、沿岸部の水田の一部で冬期湛水を行うなど、昔のように年間を通して湿潤な水田環境が保たれるよう、本来の水田環境の復元を図るべきである。

【特記事項】

2000年～2003年の繁殖期に、西尾市一色地区の干拓地に定着してディスプレイ飛行などの繁殖行動が観察されている。繁殖の確認はされていないが、本州中部地方の沿岸部では、特異な環境での記録といえる。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.243. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

シベリアオオハシシギ *Limnodromus semipalmatus* (Blyth)

【選定理由】

日本におけるシギ・チドリ識別の先駆者、高野伸二氏が国内で初めて確認され、識別点が明示されたのを機に県内での記録が始まっている。それ以前は、識別そのものが不可能であった種である。

春と秋に伊勢・三河湾沿岸部の干潟、干拓地や埋立地にある淡水や汽水の湿地に飛来するが、数は極めて少ない。1990年代初めまでは西尾市の一色地区をはじめ、伊勢・三河湾の沿岸部には、秋の渡りで毎年のように幼鳥が飛来しており、春期に成鳥夏羽の飛来記録も数例ある。現在は国内における確認数も極めて少なくなっており、絶滅の危機に瀕している。国は情報不足と評価しているが、愛知県では1975年～1993年の間に20例の飛来記録があり、その大半が秋の幼鳥の記録であることから、愛知県が種本来の中継地であったことに間違いはなく、絶滅危惧 I A 類と評価された。

【形態】

全長 33～36cm、翼開長 59cm。夏羽は、頭部から胸にかけて赤褐色で、上面は褐色、背と肩羽、雨覆の軸斑は黒褐色。冬羽は、頭部から上面は灰褐色で羽縁が白色、下面は白色。幼羽は、頭頂および上面が灰褐色。背、肩、三列風切の羽縁が淡黄褐色で、側胸に黄褐色味がある。嘴は黒く、真っ直ぐで長い。



愛知県西尾市, 2013年7月26日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾沿岸の干潟や干拓地、埋立地の水たまりなどで年により少数が記録されるが、近年の記録はごく希となっている。

【国内の分布】

春と秋の渡り時期にごく少数が渡来し、北海道、本州、九州の沿岸部で記録がある。

【世界の分布】

ロシアのオビ川流域やバイカル湖周辺、中国東北部などで繁殖し、冬期はインド、インドシナ、オーストラリア北部で生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟、干拓地の水田や水路、埋立地の水溜りなど、塩水や汽水、淡水の湿地に飛来し、1～2羽で記録されることが多い。繁殖地や越冬地などで不明な部分が多いが、県内では特に汽水や淡水の浅い水溜りや湿地に飛来する例が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

西尾市と碧南市の周辺、および汐川干潟周辺などに集中するが、全国で最も飛来頻度の高かった西尾市一色地区の塩田跡が消失するなど、沿岸部の汽水や淡水の湿地環境が激減している。

【保全上の留意点】

東アジアのみに分布する固有種であり、世界的な希少種である。干潟や河口部の湿地を保全するとともに、干拓地や埋立地の遊休部分に汽水や淡水や湿地を復元する努力が必要である。

【特記事項】

1975年以降、県内では少なくとも23例の観察記録があり、愛知県は国内で最も渡来頻度の高い地域であった。最近の記録は2013年7月26日。16年振りに幼鳥1羽が飛来したが、やはり、その場所も過去に国内で最も飛来回数の多かった塩田跡のすぐ隣であった。しかし、その翌年にはこの飛来場所にも太陽光パネルが設置され、塩田跡の周辺からは飛来可能な環境がほとんど消失した。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.249. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

カラフトアオアシシギ *Tringa guttifer* (Nordmann)

【選定理由】

東アジアのみに分布する種であり、生息数の極めて少ない国際的希少種である。生息地全般の環境悪化が進行しており、絶滅の危機に瀕している。県内では西尾市一色地区、矢作川河口周辺、汐川干潟、名古屋港周辺などで年により記録されるが、近年は干潟の環境悪化や後背湿地の消失により、飛来は極めて希となっている。

【形態】

全長 30cm。夏羽は上面が黒褐色に細かい白斑、頸から胸にかけて大きめの黒斑がある。幼羽は上面が褐色で、淡褐色の羽縁があり、胸の黒斑はない。アオアシシギに似るが嘴は太く頭は大きめ、足はやや短く黄色味が強い。外趾内側と内趾内側の両方に蹼がある。



愛知県豊橋市, 2003年9月23日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋に伊勢・三河湾沿岸の干潟や干拓地、埋立地などの塩水から汽水、淡水の水辺や湿地に飛来する。

【国内の分布】

旅鳥として春秋の渡りで飛来し、全国の干潟、沿岸部の湿地などに生息する。

【世界の分布】

サハリン、アムール川河口周辺、カムチャツカなどで繁殖し、マレー半島、スマトラ島、タイ、バングラデシュなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟を好む種ではあるが、満潮時には干拓地や埋立地の湿地などに生息する。単独で飛来することがほとんどで、愛知県に複数で飛来した例は1981年8月の1群6羽のみである。秋季の記録の多くは幼鳥であるが、擦切れた夏羽の成鳥が飛来して冬羽に換羽した例（写真）もある。春の渡りでは新鮮な夏羽の個体が観察されるが、春の記録は2例のみである。

【現在の生息状況／減少の要因】

2002年前後の知見では繁殖地として知られるサハリン周辺で僅か30～40番いが確認されるに過ぎないとされていたが、その後カムチャツカなどでも少数の繁殖が確認されている。しかし、渡りの中継地や越冬地での確認状況から、生息数が減少していることは否定できず、現在の生息数はヘラシギと同程度ではないかと推測される。減少の要因として、繁殖地では環境悪化、カラス類などによる捕食圧などが指摘されており、渡りの中継地でも環境が悪化している。県内の記録は西三河沿岸部や汐川干潟などに集中するが、干潟面積の減少や干潟環境の悪化と共に、後背に位置する汽水や淡水湿地の消失により、近年の飛来はごく希となっている。最近では、2016年9月に名古屋市庄内川河口で幼鳥1羽が観察されている。

【保全上の留意点】

県内に残された干潟の周辺に汽水や淡水の後背湿地を復元し、安定した渡り中継地の確保に努める必要がある。

【特記事項】

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.262. 平凡社, 東京.
N.N.Gerasimov, 2004. 極東の鳥類 21, pp.77-79. 極東鳥類研究会, 美唄.

(高橋伸夫)

ヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus)

【選定理由】

世界で最も絶滅の危機に瀕しているシギの 1 種である。1980 年代まで県内には毎年、あるいは数年に一度の頻度で飛来していた。主に秋の渡りで 1～数羽の幼鳥が飛来していたが、その後飛来頻度が大きく低下して、2013 年以降の記録がなくなっている。

【形態】

全長約 15cm。特徴的なへら状の嘴を持つ。新鮮な夏羽の肩羽は赤褐色で、黒い軸斑があり、白い羽縁がある。顔から胸も赤褐色で、頭と胸の羽にも黒い軸斑がある。冬羽は上面が一般的な灰色で、下面は白い。幼羽は、頭上から上面に黒斑があり、頸、胸、下面は白色で目先から頬にかけて褐色の斑がある。



愛知県西尾市, 2004 年 9 月 28 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りの季節に伊勢・三河湾の沿岸にある干潟や、干拓地や埋立地にある汽水や淡水の湿地に飛来する。

【国内の分布】

春秋の渡りの季節に国内全域の沿岸部に飛来するが、越冬の記録もある。

【世界の分布】

シベリアの東端からカムチャツカ半島北端の狭い範囲で繁殖し、冬期は中国南東部の一部や、ベトナム北部、タイ、ミャンマー、バングラデッシュなどの沿岸部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟や干拓地、埋立地など、塩水から汽水、淡水の湿地に飛来する。他のシギ類の群と行動を共にすることが多く、へら状の嘴を左右に振る独特な採餌方法をとる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の記録は三河地方の沿岸部に集中しており、秋の渡りで幼鳥の記録が大半であるが、春に成鳥の記録も少数ある。以前は県内で毎年のように記録され、4 羽の群れが観察された例もあるが、1988 年以降は飛来記録が激減しており、2012 年 9 月に海部郡飛島村で幼鳥 1 羽が観察されたものが最新の記録である。減少の要因として、世界的な生息数減少の他に、県内では干潟面積の減少と、後背地である干拓地や埋立地から汽水や淡水の湿地が消失していることがあげられる。

【保全上の留意点】

本種のみならずシギ・チドリ類全般の保全をするためには、現在残されている干潟の環境問題を改善し、干拓地や埋立地等に残されている汽水や淡水の湿地環境を保全すると共に、干拓地や埋立地の遊休部分に汽水や淡水の湿地環境を復元する努力が必要である。

【特記事項】

国際湿地連合の 2002 年までの見解では、本種の推定最小個体数は 4,000～6,000 羽と見積もられていたが、2003 年には 3,000 羽以下と修正されており、バードライフインターナショナルによると、2019 年の時点で世界中の繁殖数は 200 ペア程度と推測している。渡りの中継地や越冬地である干潟や湿地の環境破壊、中国を含む東南アジアでのカスミ網による密漁が激減の要因とされており、絶滅への加速が危惧されている。

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.289. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

ツバメチドリ *Glareola maldivarum* Forster

【選定理由】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の干拓地や埋立地などに飛来し、少数が繁殖する。かつての愛知県は国内唯一の継続的な繁殖地であり、豊橋市では何十羽ものコロニーで繁殖していたが、1990年代後半以降激減して繁殖が確認されなくなった。近年は主に三河湾沿岸で、春秋の渡りの季節や夏季にごく少数が確認されるが、繁殖は確認されていない。

【形態】

全長 23～24cm、翼開長 59～64cm。夏羽は、上面が灰褐色で胸と腹に橙色味を帯び、喉は黄白色で黒色の縁取りがあり、目先が黒く下嘴の基部が赤い。冬羽は、全体的に暗色味が強く、喉や顔のコントラストは夏羽に比べてかなり不明瞭。尾は燕尾型で黒く、翼は長く先端が尖り下雨覆は赤褐色。飛行時は上尾筒の白色がよく目立つ。



愛知県西尾市, 2007年5月31日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾の沿岸で繁殖していたが、近年は繁殖記録がなく、春から秋にかけてごく少数が飛来するのみである。

【国内の分布】

主に春と秋の渡りの時期に飛来するが、本州、九州、沖縄で局地的に繁殖記録がある。

【世界の分布】

中国東部、東南アジア、インドで繁殖し、東南アジア、インド、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

春期は4月から5月、秋期は7月から10月にかけて、沿岸部の干拓地や埋立地などに渡来し、単独から数羽の群で生息する。乾燥した耕地や埋立地の荒地などを好み、営巣する場合は単独または小規模のコロニーを作って繁殖する。主にツバメのように上空を飛び廻りながら昆虫を捕食するが、地上で昆虫を捕食することもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

鍋田周辺と汐川干潟周辺、矢作川河口周辺での記録が多い。繁殖は1976年に汐川干潟周辺（豊橋市）の埋立地で初めて確認され、以降は鍋田周辺、矢作川河口周辺、旧田原町から旧御津町にかけての干拓地及び埋立地でも記録がある。埋立地は環境の変化が大きく、干拓地の耕地は耕作による攪乱を受けやすいが、最大の脅威はカラスによる卵やヒナの捕食である。県内での繁殖がなくなった最大の要因として、繁殖期に沿岸部に生息するカラス類の増加が挙げられる。

【保全上の留意点】

沿岸部の干拓地や埋立地の遊休部分に空地環境を復元し、繁殖環境の創出に努める必要がある。沿岸部におけるカラス類の増加は、都市化や農業形態の変化による。都市ではゴミの増加とその管理不足、農地では農業機械の大型化等により収穫漏れの作物が多くなって、本来冬期の餌不足で淘汰されていたカラスが生き残ることによる。

【特記事項】

本種に限らず、開けた場所の地上で営巣する種の繁殖を脅かす外敵として、これまではカラス類が最大の脅威であったが、近年県内で繁殖するようになったチョウゲンボウも大きな問題である。

【関連文献】

山形則男, 1996. 汐川干潟周辺のツバメチドリの繁殖について. BIRDER 第10巻 第10号, pp.46-55. 文一総合出版, 東京.
(高橋伸夫)

チュウヒ *Circus spilonotus* Kaup

【選定理由】

主に越冬期、伊勢湾北部および三河湾沿岸部に飛来して越冬し、その一部が繁殖する。ねぐらや繁殖地の環境は沿岸部の干拓地や埋立地および河川下流部などに存在する広いヨシ原であるが、近年県内のヨシ原面積は激減している。2011年の東日本大震災以降、沿岸部ではソーラーパネルや風力発電の設置が急速に広がって、本種が越冬や繁殖のできる環境は激減している。

【形態】

全長 48～58cm、翼開長 113～137cm の中型のタカ。体色は褐色系が基調だが、全身がほぼ暗褐色のものや頭部から胸にかけてクリーム色のものなど、個体差が大きい。中央尾羽の上面が灰色の個体は雄である。雄は体がやや小さく細身であり、雌は大きめで体や翼が太くみえる場合が多い。飛翔形は、翼を V 字型に保ち低空をゆっくり滑翔することが多い。



愛知県西尾市, 2010年1月29日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期を中心に伊勢湾・三河湾沿岸のヨシ原や農耕地に生息し、少数が繁殖する。

【国内の分布】

本州以北で局地的に少数が繁殖し、冬期には越冬個体に加わり全国で見られる。

【世界の分布】

バイカル湖周辺とモンゴルから東、アムール川流域、ウスリー地方、日本、ニューギニアに分布し、北方のものは冬期に南下する。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部のヨシ原を中心に周辺の農耕地や湿地、河川敷の草地などを含む広い行動圏を持ち、主にネズミ類や鳥類、魚類、両生類、爬虫類などを捕食する。営巣は湿潤なヨシ原の地上で行われ、ヨシを積み重ねて巣を作る。冬期はヨシ原でゆるやかな集団ねぐらを形成し、広いヨシ原の中に点々と散って夜を過ごす。多い時には1箇所のヨシ原で数十羽が生息するねぐらもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

木曾川河口周辺、名古屋港周辺、矢作川から矢作古川の沿岸部周辺、豊川河口周辺、汐川干潟および田原埋立地周辺などに生息する。かつては名古屋港中西部の埋立地で何ペアもの繁殖が確認されていた（吉村信紀、私信）が、現在の尾張地域には繁殖地もねぐらもない。隣県である三重県の本曾岬干拓では1ペアが繁殖しており、冬期のねぐらもここにある。現在県内で繁殖しているのは、矢作川河口から矢作古川河口沿岸部周辺で繁殖するものと、田原市周辺で繁殖するものが各1ペア程度と思われるが、田原市の埋立地は環境が悪化している。近年は越冬期の個体数も減少しており、繁殖・越冬ともに減少の要因は開発によるヨシ原の減少と、餌場環境の悪化である。

【保全上の留意点】

現在県内に残されているヨシ原の環境を保全することが第一である。

【特記事項】

タカの仲間ではダイナミックなディスプレイ飛翔を行う種も少なくないが、その中で本種のものは最も派手である。営巣地の上空をゆっくり旋回しながら上昇し、時には肉眼で探すのが困難になる程上昇する。その後急降下や急上昇を繰り返すが、時には1回転の宙返りをすることもある。

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.60-62. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

コノハズク *Otus sunia* (Hodgson)

【選定理由】

県内の山地に夏鳥として飛来するが、繁殖期の生息場所は局地的で生息数は少ない。現在の県内では、繁殖期に生息が確認できる場所は極めて限られている。近年は繁殖期の生息数だけでなく、渡りの季節の確認例も希になっており、通過個体群も大きく減少していることが推測される。

【形態】

全長 18～21cm。上面は灰褐色で黒褐色の縦斑があり、下面は汚白色で黒褐色の縦斑と細かい虫食い状の横斑がある。赤茶色味の強いタイプ（赤色型）もある。耳のような羽角があり、目の色は黄色で趾に羽毛はない。



愛知県東三河山間部, 2008年7月12日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河地方の山地に飛来して繁殖するが、以前は西三河の低山でも繁殖期の記録があった。春秋の渡りの季節には、平野部を含む県内全域を通過する。

【国内の分布】

夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来して繁殖する。

【世界の分布】

ロシア沿海州から中国北東部、日本では夏鳥で、中国南部とベトナムからインドまででは留鳥。マレー半島やスマトラ島では冬鳥である。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では上部に車が通る道路や、住宅や街路灯などの人工光源がほとんどない山塊の、針広混交林または落葉広葉樹林で生息が確認されており、地形的にはかなり急峻な環境が多い。県内で確認されている営巣例は杉の大木にある樹洞で、ムカデ類や昆虫類などの小動物を捕食していた。キョッ、キョッ、キョーと聞こえる声は「仏法僧」と聞きなされ、「声のブッポウソウ」と呼ばれている。

【現在の生息状況／減少の要因】

2008年に実施した愛知県の調査で、繁殖期の生息が確認された場所は豊根村、東栄町、新城市など6地点7個体程度であった。旧鳳来町では昭和30年以前に17地点で鳴き声が聞かれたとされるが、2008年には2地点で確認されたのみである。過去には西三河の山地や豊田市の丘陵部などでも繁殖期の記録があったが、現在は東三河山間部以外での確認記録はなくなった。減少の要因として山地に敷設される交通量の多い道路、それに伴う人工光と騒音の増加が考えられる。

【保全上の留意点】

山地に車の走行が可能な道路が建設されると、走行する車と夜間の人工光によって生息する昆虫などの小動物が減少し続ける。それらを餌とし、音を頼りに狩りを行う夜行性の種は生息環境を失ってしまう。県内周辺に生息する本種の分布減少は、この構図を見事に表している。

【特記事項】

1935年（昭和10年）に、NHKが鳳来寺山からその声をラジオで実況中継したことにより、愛知県と鳳来寺山がブッポウソウの棲む場所として有名になったが、この放送をきっかけに「ブッポウソウ」と鳴く声の主が、ブッポウソウではなく本種であることが判明することになった。現在も、本種が愛知県の県鳥とされている由縁である。

本種は、県条例に基づく指定希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.90. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ヤマセミ *Megaceryle lugubris* (Temminck)

【選定理由】

主に山間部の河川やダム湖などに周年生息して繁殖し、冬期には平野部でも見られることがあった。近年は県内での生息数が激減しており、県内の繁殖数は庄内川水系でほぼ0、矢作川水系で4～5ペア程度、豊川水系で数ペア、天竜川水系でも数ペア程度であり、県内における推定繁殖数は多くても10ペア程度である。1990年代までは県内山間部に広く分布して繁殖しており、2000年代前半までは、渡りの季節に河川の下流部や沿岸部、海上でも確認記録があった。

【形態】

全長 38cm。頭部から背、尾にかけての上面は白黒のかこの模様で、下面は白い。嘴は黒く、冠羽がある。雄は胸に黒色と橙褐色の斑があり、下雨覆は白い。雌は、胸の斑が黒色だけで下雨覆は橙褐色。



愛知県豊田市, 2004年12月4日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

山間部の河川や湖沼に周年生息し、周辺の崖で繁殖する。冬期には平野部でも記録されることがあり、以前県内の生息数が多かった頃は、渡りの季節に伊勢湾を越える個体も確認されている。

【国内の分布】

九州から北海道まで広く分布する。

【世界の分布】

アフガニスタン北東部からヒマラヤ、タイ北西部、ミャンマー、ベトナム中部、中国南部、日本に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

山間部の河川や溪流、ダム湖や池沼などを餌場とし、広いなわばりを持って生息する。山地の崖に横穴を掘って繁殖するが、餌場である水辺から遠く離れた場所に営巣することも希ではない。水中に飛び込んで主に魚類を捕食するが、魚がほとんどいない沼にも飛来することから、両生類なども捕食しているものと思われる。飛びながら、キャラッ、キャラッ、ケレレレなどと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

大きめの体に白黒の模様が目立つので、比較的確認され易い種である。生息地における行動範囲も広いことから、県内各地で普通に観察できた頃でも、生息数はそれ程多くなかったと思われるが、現在繁殖期に県内で毎年安定して確認できる場所は5箇所程度である。山間部の渓谷や川、湖沼などから餌となる魚が減少しているとともに、特に愛知県では、営巣環境である高い土質の崖は、そのほとんどが消失している。

【保全上の留意点】

山間部の河川や湖沼から餌となる魚類が減少しているため、魚類の自然繁殖や生息数の増加を図る必要がある。山間部の道路管理等では、生物の保護に配慮した工法を考えていくべきである。

【特記事項】

愛知県鳥類生息調査や西三河野鳥の会機関紙の記録等をみると、県内で本種が減少した時期は、大型の魚食性水鳥であるカワウやアオサギが山間部に進出して確認数が増え、繁殖が始まった時期と概ね一致している。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.108. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ヤイロチョウ *Pitta nympha* Temminck et Schlegel

【選定理由】

繁殖期に東三河山間部の数ヶ所で確認されるがその数はごく僅かであり、ほぼ毎年継続して確認される場所はさらに限られる。県内で繁殖期に本種が生息している環境は、深山幽谷の急峻な地形に限られている。条件の揃った環境は県内でもごく僅かであり、僅かな開発でも消失する環境である。

【形態】

全長 18cm。頭が大きく、体形は寸詰まりに見える。額から後頭は褐色で黒い頭中央線がある。眉斑は黄白色で、過眼線は太く黒い。背と肩羽は緑色で、腰と上尾筒は青色。尾は黒く、先端は青色。喉から腹、脇は黄白色。腹の中央と下尾筒は赤色。外翼部は黒く、初列風切基部に白斑がある。内翼部は緑色で、青色の斑がある。



静岡県, 2003年6月21日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

ごく少ない夏鳥として山地に渡来して繁殖するが、繁殖期を通して生息が確認されているのは、東三河の山地のごく一部に限られている。

【国内の分布】

夏鳥として主に本州中南部、四国、九州に渡来するが、近年分布範囲が北へ拡大している傾向がみられ、東北地方でも囀りや姿の確認例が増えている。

【世界の分布】

日本と台湾および中国南部で繁殖し、カリマンタン島で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では繁殖期、深山の急峻な地形にある落葉広葉樹林や針広混交林に生息する。ポポピー、ポポピーとか、ホッピー、ホッピーなどと囀り、ミミズ類、ムカデ類、クサカゲロウ類、サワガニなどを捕食する。陽が当たらず薄暗い地上をホッピングで走り廻って採餌するが、その場合も多彩で美しい体の色が全く目立たないことが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

渡りの季節から繁殖初期である5月下旬から6月初旬に、西三河や東三河の比較的標高の低い場所で囀りが確認されることも希ではない。こうした場所の中には、他県で本種が繁殖している環境に似ている場合もあるが、毎年同じ場所で確認される例はほとんどなく、繁殖の可能性は低いと思われる。いずれにしても現在の県内全域で繁殖期の確認数は極めて少なく、生息する環境は過去の道路整備や開発事業等によって容易に消失してきた環境である。全国的には分布の北上傾向がみられるようであるが、現在の愛知県では繁殖期の生息数に増加傾向はみられない。

【保全上の留意点】

本種が繁殖期に確認されている場所は限られており、こうした環境に手を加える場合は事前に十分な検討が必要である。工事が必要となった場合には本種をはじめ、こうした環境に生息する野生生物に十分配慮した工事が必要となる。

【特記事項】

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.130. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

アカハラ *Turdus chrysolaus* Temminck

【選定理由】

亜種アカハラ *T. c. chrysolaus* は夏鳥として標高 1,000m 程度以上の疎林に生息する。繁殖期に豊田市 (旧稲武町)、設楽町、豊根村の山地で生息していたが、2010 年以降は、県内から繁殖期の生息が途絶えている。その後同じ山系で長野県側の記録はあるが、最近はこうした記録も希となっている。11 月頃から 5 月頃にかけて県内に冬鳥として飛来する亜種オオアカハラ *T. c. orii* は、毎年安定した数が飛来して越冬していることから、越冬個体群として絶滅危惧種のリスト外と評価された。

【形態】

全長 23.5cm。頭部から上面にかけて、一様にオリーブ味のある褐色。下面は腹の中央部が白いほかは橙赤色。雄は頭部の黒味が強く、雌は喉に白色の縦斑がある。亜種オオアカハラは、雄の頭部の黒味がより強く、体がやや大きく嘴が太い。



長野県, 2011 年 5 月 2 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

亜種アカハラが、夏鳥として標高の高い山地へ飛来して繁殖し、亜種オオアカハラが、冬鳥として県内全域に飛来して越冬する。

【国内の分布】

亜種アカハラが、夏鳥として本州中部から北海道までの範囲で繁殖し、亜種オオアカハラが、本州や西南諸島に飛来して越冬する。

【世界の分布】

2 亜種があり、千島やサハリン、日本で繁殖して、日本、台湾、中国南部、フィリピンで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

亜種アカハラが、標高 1,000m 程度以上の高原にある疎林で繁殖する。地上で昆虫やミミズなどを捕食するほか、樹上で木の実を食べることもある。高木の梢でキョロン、キョロン、ツイーッと囀り、地鳴きはツリーッなどと鳴く。春の渡りでは平野部の市街地でもその囀りを聞くこともあるが、越冬していた亜種オオアカハラも囀るので、姿を確認しなければ亜種の特定は困難である。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖期の生息地として、1980 年代までは茶臼山と面の木峠が知られていたが、繁殖期の生息数はごく少なく、2010 年以降は県内から繁殖期の生息記録が無くなっている。かつては標高のより低い場所でも生息していた可能性もあるが、牧畜産業の衰退や観光開発等により、餌生物を含む生態系の環境が悪化している。また、標高が高いため、地球温暖化の影響も否定できない。

【保全上の留意点】

県内の標高 1000m にある高原の牧歌的な環境は、この種や県内で繁殖絶滅の危機にある多くの野鳥にとって不可欠な環境である。県内でも希有な高原の牧場は、観光資源としても重要な環境であり、その観光資源を活かすためにも、牧畜産業を振興し、本来その環境に生息していた生物の生息環境を保全する努力が必要ではないかと思われる。

【特記事項】

春の渡りは 4 月下旬から 5 月、繁殖期は 5 月下旬から 7 月である。春の渡りの季節の夜明けには、平野部の公園や緑地などでも囀りが聞かれる可能性がある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.250-251. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

コマドリ *Luscinia akahige* (Temminck)

【選定理由】

1980年代までの県内には4箇所程度の繁殖地があり、総数で10～15ペア程度が繁殖していたものと推測されるが、2000年代に入ると繁殖地は2箇所になり、近年県内で繁殖期に生息しているのは1箇所1ペア程度となっている。しかし、残された1箇所でも繁殖が成功していない可能性が高く、2013年以降は繁殖期を通して確認することも困難となっている。

【形態】

全長14cm。頭部から上胸及び尾は鮮やかな橙赤褐色。背と翼の上面は暗赤褐色、腹と下尾筒は灰白色。上胸と腹の境は、雄は黒帯があり区分が明瞭だが、雌は黒帯がなく不明瞭で全体的に色が淡い。嘴は黒色で脚は黄褐色。



長野県下伊那郡根羽村, 2008年5月4日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏鳥として標高1,000m程度以上の山地にある原生林や、二次林に飛来して繁殖する。春秋の渡りでは、島嶼や半島、低山や平野部にある市街地の公園などでも確認されることがある。

【国内の分布】

日本には、夏鳥として亜種コマドリ *E. a. akahige* が九州以北に飛来するほか、亜種タネコマドリ *E. a. tenensis* が伊豆諸島南部、屋久島、種子島に周年生息する。

【世界の分布】

サハリン、南千島、日本で繁殖し中国南部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

山間部の広葉樹林や針広混交林で下草にササ類が繁茂する場所に生息し、地上の物陰に広葉樹の枯葉や枯れ草でわん形の巣を作る。藪の中から出て姿を見せることは少なく、ササ藪の中から聞こえてくる囀りを聞くことが多い。ヒン、カララララ・・・と大きな声で囀る。特に春の渡りではよく囀るので、平野部や半島、島嶼、市街地の公園などでもその囀りを聞くことがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、県内での繁殖は1箇所1ペア程度で、近年はその繁殖も成功していない可能性が高い。減少の要因として、過去には野鳥飼育マニアによる密猟が最大の問題であった。生息数が極限まで減少している現在、本種の生息に最も大きな影響を及ぼしているのは野鳥の撮影マニアである。

【保全上の留意点】

野鳥の写真を撮りたい者には、他県へ行けば本種の生息数が多い地域もあるので、愛知県に残る最後の1ペアを撮影の対象としないよう、こうした行為へ監視の目を強化しなければならない。また、立入禁止区域を設定することで、生息環境を保全することも検討する必要がある。

【特記事項】

県内東部にある標高1,000m程度以上の原生林や二次林には、下草としてササ類のスズタケが繁茂しているが、2014年頃から花が咲いて枯れはじめ、2019年現在は県内全域のスズタケが全て枯れている。定期的な更新現象とも推測されるが、生息する鳥類への影響を観察していく必要がある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.262. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ホオアカ *Emberiza fucata* Pallas

【選定理由】

夏期に山地の草原に生息して繁殖するが、県内の繁殖地は局所的で繁殖個体数はごく少ない。県内では 1982 年に旧下山村にある標高 650m 程度の牧場で繁殖期の生息が確認され、その後標高 1,000m 程度にある豊根村や旧稲武町の牧場でも繁殖期の生息が確認された。多い年には県内の合計で 10 ペア程度は繁殖していたものと思われるが、1984 年以降は旧下山村から姿を消し、2006 年以降は旧稲武町からも繁殖期の生息が確認されていない。しかし、2014 年までの繁殖期に豊根村で生息が確認されていることから、今後県内の繁殖が継続される可能性も否定できず、繁殖個体群については絶滅危惧 I A 類と評価された。繁殖期以外は、平野部の水辺に近い草叢や耕地に生息して、安定した数が越冬していることから、越冬個体群についてはリスト外と評価された。

【形態】

全長 16cm。夏羽は、頭部が青灰色で黒色の縦斑があり耳羽は赤褐色で、背は褐色で黒褐色の太い縦斑があり、下面は白色で胸に黒色と茶褐色の 2 本の横帯があり脇に明瞭な縦斑がある。冬羽は、頭部と下面に褐色味を帯びる。



愛知県北設楽郡豊根村, 2014 年 5 月 18 日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に山地の高原で繁殖し、冬期は平野部や沿岸部などにある耕地や河岸、水路、池沼の周辺などに生息する。

【国内の分布】

北海道から九州で繁殖し、関東以西の温暖な地方で越冬する。

【世界の分布】

ヒマラヤ西部、中国北東部および南部、シベリア南東部、モンゴルで繁殖し、北方のものは南下し、冬期に朝鮮半島南部からインドシナ北部に生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期に山地の牧草地など、開けた草地に生息して繁殖する。繁殖期は昆虫類も食べるが、植物の種子を主食とする。冬期は平野部の耕地や河川の土手などに、単独から数羽の小群で生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

1983 年までは繁殖期に標高 650m 程度の旧下山村でも生息しており、標高 1,000m 程度以上の牧場では何ペアもの生息が確認されていた。旧稲武町では 2005 年まで、豊根村では 2014 年まで繁殖期の生息が確認されていたが、その後は記録がない。減少の要因は明確ではないが、どの場所でも牧草地の様子に変化がみられ、牧畜産業の形態変化や産業の衰退などが感じられる。

【保全上の留意点】

県内でも希少な高原の牧場は、牧歌的な観光資源としても貴重な環境である。その観光資源を活かすためにも牧畜産業を振興し、環境の復元を行う努力が必要ではないと思われる。

【特記事項】

1981 年 5 月に、標高 1,000m の位置にある岐阜県ひるがの高原で探鳥会を実施して本種とオオジシギを観察したが、県内にもこれらの繁殖地がないか探したところ、共に標高 600m 前後にある旧作手村の湿原でオオジシギが 6 月に、翌年の 7 月には旧下山村の牧場で本種が確認された。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.361. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ウズラ *Coturnix japonica* Temminck et Schlegel

【選定理由】

春の渡り、および越冬の季節に平野部や沿岸部で記録されているが、数は極めて少ない。1970年代まで、県内には毎年越冬している場所が何か所かあった。2000年頃までは、沿岸部を中心に越冬期や春の渡りで確認されることも希ではなかったが、近年は確認の可能性のある場所もごく限られている。以前は山地や丘陵地での記録もあったが、近年は平野部の記録だけである。

【形態】

全長 20cm。上面は淡赤褐色で黒色と淡黄褐色の横斑と縦斑がある。下面は淡黄褐色で、胸と脇に赤茶色と黒色の縦斑がある。雄は、眉斑が黄白色で頬と喉が赤褐色。雌は、眉斑が淡黄色で頬と喉が白っぽい、上胸に2本の黒帯がある。



愛知県弥富市, 2006年6月6日, 浅井利明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

越冬期は沿岸部の干拓地や平野部の河川敷、丘陵地や山地の耕地など開けた場所で見られ、渡りの季節は沿岸部の干拓地や、平野部の河川敷での記録が多かった。

【国内の分布】

本州中部以北で繁殖し、冬期は本州中部以南に生息する。

【世界の分布】

モンゴル北部、バイカル湖、アムール、ウズリー、中国北部で繁殖し、冬期は朝鮮半島、中国南部、インドシナに生息する。8亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

草原、農耕地、河川敷などに生息する。飛び上がることが少なく、草むらの中に潜伏していることが多いので観察は難しい。秋の渡りや越冬期はひっそりと生活していることが普通であるが、春の渡りでは開けた場所へ出て、足早に歩きながら盛んに採餌する姿を見ることがある。人が近付くと草陰などに隠れて静止するが、さらに近付くとプルルルという羽音を立てて足元から急に飛び立つことが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前は毎年複数羽が飛来する越冬地が何か所か知られていたが、現在ではほぼ毎年のように飛来する越冬地はきわめて限られている。近年ではこうした場所でも、毎年のように環境が変化するために確認できない年も多くなり、1箇所でも複数羽の記録も希になっている。減少の要因として、越冬地である沿岸部の干拓地では道路の整備、商工業施設やグラウンドなどへの転用、終末処理場などの建設がすすみ、河川敷は公園化などにより広い草地環境が消失している。山地や丘陵地では農林業の衰退により、農地や草丈の低い草地の環境が減少している。

【保全上の留意点】

平野部の河川敷や、沿岸部に存在する草丈の低い叢の環境を、保全する努力が必要である。

【特記事項】

愛知県鳥類生息調査の結果で過去に記録のある木曾川玉の井と東大演習林では、全ての記録が秋の渡りにしては少し早い7、8月の記録である。近い場所で繁殖の可能性など、興味深い記録である。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.21. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ビロードキンクロ *Melanitta fusca* (Linnaeus)

【選定理由】

冬鳥として主に渥美半島の太平洋側や三河湾側に飛来し、希に伊勢湾や三河湾の奥でもみられる。1980年代半ばまでは普通に見られ、越夏の群れも確認されていたが、近年は個体数が激減し、多くても20羽以下である。

【形態】

全長 51～58cm、翼開長 90～99cm。雄成鳥は、全身が黒色で背にはビロード光沢、目の下には三日月型の白斑があり、嘴は赤くて上嘴の基部にこぶ状の突起がある。雌は、全身が黒褐色で目の前と頬の2箇所白い斑があり、嘴は黒色。次列風切と大雨覆が白く、飛翔時にはよく目立つ。



島根県, 2013年1月4日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に渥美半島周辺の遠州灘や三河湾内の海域に生息するが、希に伊勢湾の奥や西三河の沿岸でも見られることがある。

【国内の分布】

冬期に北海道から九州までの大きな湾や外洋沿岸に生息する。

【世界の分布】

北ヨーロッパからシベリア中部で繁殖しヨーロッパ沿岸で繁殖する亜種、シベリア東部からカムチャッカで繁殖し日本、朝鮮半島南部、中国沿岸で越冬する亜種、およびアラスカからカナダ中部で繁殖し、北アメリカ沿岸部で越冬する亜種の3つに分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

冬鳥として通常は渥美半島に面する遠州灘や三河湾の沖合に生息し、希に汐川干潟、豊川河口、西三河沿岸、伊勢湾の奥部などでも記録がある。潜水採餌をし、貝類や甲殻類を捕食するとされる。田原市の三河湾沿岸や内湾の河口などで越夏した例がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代には、越冬期に三河湾の田原市（旧田原町）沖で1,000羽以上、同じく三河湾内で50羽程度の群れの記録があり、1950年代には矢作川河口でも336羽の記録がある。1980年代半ばまでは本種の群れが太平洋の沖合い遠くを飛翔する様子がよく見られた。また、1973年7月には白谷海岸で29羽の越夏群の記録がある。かつては本県の海域で普通に見られた種であるが、近年は太平洋の沖で時により多くても20羽以下が、三河湾内では希に1～数羽が見られる程度となっている。

【保全上の留意点】

外海での減少についてその要因は不明であるが、内湾における減少は餌となる生物の減少が最大の要因と考えられ、貧酸素水塊問題など、餌の貝類や甲殻類の生息に関わる環境の改善が求められる。

【特記事項】

愛知県が報告している「伊勢・三河湾貧酸素情報」では、渥美半島の北側に位置する三河湾は慢性的な貧酸素状態が発生しており、海流の状態などによっては溶存酸素飽和度が、貝類・底生魚類の生存が困難な30%や、全ての底生生物が生存困難な10%という状態も発生している。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.78. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* (Boddaert)

【選定理由】

越冬や渡りの季節に、主に三河湾や太平洋沿岸で少数が観察される。以前は渥美半島三河湾側の田原市馬草を中心とする海域で毎年 2~5 羽程度が比較的安定して越冬していたが、近年は毎年安定して飛来する場所がなくなっている。また 1980 年代までの記録では、名古屋港周辺や衣浦湾周辺、木曾川や豊川、知多半島や渥美半島および内陸の丘陵地にある用水池などでも観察されているが、近年は渥美半島沿岸の海上以外ではかなり希になっている。

【形態】

全長 47cm、翼開長 80cm。夏羽は、頭上が黒く頬から喉にかけては灰褐色、頸は赤褐色でよく目立つ。冬羽は、全体的に灰褐色で、頸から脇にかけて汚白色になる。夏羽・冬羽ともに嘴の基部が黄色く、次列風切は白い。冬羽は、距離が遠い場合、ミミカイツブリ等と混同する可能性があるが、頭部から嘴にかけての輪郭が直線的であること、嘴の形状と色により識別することができる。



愛知県田原市, 1987 年 4 月 19 日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

現在の愛知県では、主に渥美半島沿岸の三河湾および太平洋で観察されている。

【国内の分布】

北海道の湖沼で繁殖し、主に九州以北の沿岸部の海上で越冬し、河川や湖沼等に入ることもある。

【世界の分布】

ヨーロッパ、西シベリア、シベリア東部、北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、東アジア、北アメリカなどの沿岸部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

過去に比較的安定して生息していた田原市の馬草海岸を例示すると、冬期でも比較的穏やかな内湾の環境である。当時はハジロカイツブリやカモ類の小群とともに、少数羽が生息していた。水面に浮かんでおり時に採餌のために潜るが、頸が太く体がやや沈んだシルエットは独特で、カモ類や他のカイツブリ類との見分けは肉眼でも容易であった。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に県内で安定した越冬記録があるのは、主に渥美半島の北部にあたる三河湾沿岸部で、1970 年代には 95 羽の群れの記録がある。1980 年代までの記録の中には名古屋港の西三区で 50~60 羽が越冬していたとの報告もあるが、この地域で毎年継続して観察されていたかどうかは不明である。その後も渥美半島の北部沿岸では観察記録は多くあり、1997 年 1 月に 14 羽、2019 年 2 月に 15 羽という記録もあるが、特定の場所で安定して越冬していたのは 1980 年代までである。渥美半島の南部沿岸でも毎年のように少数の観察記録はあるが、特定の場所での継続した記録は確認されていない。近年渥美半島の沿岸以外では、姿を見ることも希になっている。

【保全上の留意点】

本種は小型の魚類や水生無脊椎動物を捕食するため、特に内湾では生物の生息環境を回復する努力が必要である。

【特記事項】

近年渥美半島北側の三河湾中央部は慢性的な貧酸素状態であり、餌となる魚介類が激減している。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.87. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

サンカノゴイ *Botaurus stellaris* (Linnaeus)

【選定理由】

伊勢・三河湾の沿岸部にある干拓地や埋立地のヨシ原、および平野部から丘陵部にある河川や池沼、湿地などのヨシ原で、春と秋の渡り期や越冬期の観察記録がある。繁殖期と思われる 5 月下旬の記録もあるが、その後鳴き声を含め継続した記録はない。越冬期の記録は何例もあるが、いずれも面積が広くヨシのよく繁った環境であるために、継続した観察は困難である。県内ではこれまで繁殖の確認はなく、越冬期の記録も渡来から渡去まで継続したものはない。

【形態】

全長 64~80cm、翼開長 125~135cm。全身が淡黄褐色で、頭頂は褐色。上面には褐色の虫くい状斑があり、顎線と頸から胸にかけての縦斑は褐色で太く明瞭。飛翔時は風切に褐色の横帯が出る。



島根県, 2002 年 12 月 31 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢湾・三河湾沿岸部、平野部や山麓部の河川や池沼、湿地などで記録がある。

【国内の分布】

北海道、茨城、千葉、滋賀で繁殖し繁殖地の周辺では周年生息する。その他の本州以南では冬期に生息し、北海道では主に夏期に生息する。

【世界の分布】

ユーラシア中部、北アフリカ、南アフリカで繁殖し、北方のものは冬期に南下し、アフリカ、南アジア、東南アジアに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

広いヨシ原に生息して、昆虫類、魚類、両生類、爬虫類、小型鳥類、小型哺乳類などを捕食する。大型のサギはみな体が細く、止まっても飛んでもかなり軽く見えるものが多い中で、本種は体がかかなり太く見え、地上でも飛翔中でも重量感が感じられる。繁殖地ではウシガエルの声に似た太く低い声で、ポォーッ、ポォーッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の飛来環境は干拓地や埋立地で、河川敷や山麓の水辺などでも記録がある。1980 年代の半ば以降は、確認記録が西三河地域に集中しており、水辺のヨシ原で確認されているが、近年特に沿岸部の干拓地や埋立地に存在していたヨシ原の大半が、太陽光発電パネルの設置や埋め立て、乾燥化などで消失している。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。過去に最も飛来数が多いのは、西尾市の衣浦 14 号埋立地である。広い水辺とヨシ原は矢作川浄化センターの排水温度を調節する水面となっているが、2000 年を最後に飛来しなくなった理由として、この水辺から生態系を形成する生物が減少していることが推測される。県内でも希有で貴重な環境であり、ここには在来生物で豊かな生態系が再生されるべきである。

【特記事項】

愛知県に最も近い繁殖地として、滋賀県の琵琶湖の南端にあるヨシ原が知られていたが、現在は埋め立てが進んでごく少数が残るのみという。

【関連文献】

吉井 正, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.47. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ミゾゴイ *Gorsachius gosisagi* (Temminck)

【選定理由】

繁殖期の分布が日本固有の夏鳥であり、丘陵地から標高 1,000m の山まで、広範囲に生息して繁殖するが、目につきにくいことから生息状況には不明な部分も多い。主に繁殖前期に確認される鳴き声から、生息数が少ないことに間違いはなく、繁殖期に比較的確認数の多い標高では、道路建設や開発などの問題が多く発生している。

【形態】

全長 49cm。上面は赤褐色、下面は淡黄褐色で黒褐色の縦斑がある。成鳥の頭上は黒褐色で、後頭に短い冠羽がある。嘴はサギ類としてはかなり短く、目の周囲と目先は水色。幼鳥は頭から体にかけて白色と黒色の虫食い斑がある。



愛知県名古屋市長古市, 2002年4月22日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏鳥として飛来して繁殖するが、県内では繁殖期に丘陵地から標高 1,000m の山地まで確認記録がある。渡りの時期には、平野部の都市公園に飛来することも少なくない。

【国内の分布】

主に本州、四国、九州、伊豆諸島で繁殖する。夏鳥であるが北海道では迷鳥であり、少数は国内でも越冬する。

【世界の分布】

日本で繁殖し、冬期は、南西諸島、台湾、中国南部、フィリピン、モルッカ諸島などで越冬するが、サハリンやパラオの記録もある。

【生息地の環境／生態的特性】

主に沢のある比較的暗い広葉樹林や針広混交林に生息し、二又の枝上などに営巣する。餌場としては落ち葉が厚く堆積した沢や湿地を好み、ここに多いミミズやサワガニ、昆虫などを捕食する。警戒時には、正面を向き嘴を上に向けて体を真っすぐ伸ばす独特な擬態を行う。繁殖期の夜間、高い樹上などに止まってポオーツ、ポオーツと低く太い声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では丘陵地から 1,000m の山まで繁殖期の記録があるが、記録の大半は標高 100～500m 程度の範囲にある里山環境である。比較的確認数の多い地域でも毎年確認されることは希で、確認されない年の方が多い。以前は里山の道路を走行中にポツンと立っている姿をみることもあったが、近年はこうした道路にも走行する車の量が多くなって、こうした機会はほとんどなくなった。里山に手が入らなくなり、餌場となる湿地が藪化していることも減少の要因といえる。

【保全上の留意点】

日本の里山環境がこの種の生息環境であり、現在は U ターンや I ターンの人材が日本の農林業を復活しようという動きもある。日本本来の里山環境が再生されるよう、社会構造の変化が望まれる。道路の整備や開発などを行う場合には、これら野生生物の保全に十分配慮されるべきである。

【特記事項】

過去に愛知県における越冬記録はないと思われるが、2015 年度と 2016 年度の冬に名古屋市の公園で 1 羽の越冬が確認されている。広葉樹の林で、地表に落ち葉が厚く積もる環境であった。

【関連文献】

柿澤亮三・小海途銀次郎, 1999. 日本の野鳥 巣と卵図鑑, pp.24-25. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

クロサギ *Egretta sacra* (Gmelin)

【選定理由】

主に非繁殖期、遠州灘や伊勢・三河湾の沿岸や島嶼に生息するが数は少なく、確認場所も安定していない。遠州灘沿岸には繁殖が可能な環境はなく、三河湾の島嶼では過去を含め繁殖の可能性が期待されていたが、近年は島嶼で確認できる頻度が低下している。生態に不明な部分は多いが、県内での比較的安定した確認場所は限られており、その数も少数である。

【形態】

全長 62cm。全身がすすけた黒色で、他のサギ類に比べて嘴は太めで足は短い。嘴と足は黄色。南西諸島以南には、全身が白色のタイプも生息するが、県内では白色のタイプの正式な記録はない。



愛知県西尾市, 2016年8月6日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

非繁殖期に沿岸部や三河湾の島嶼で確認されており、稀に内陸部でも記録がある。県内では非繁殖期に、伊良湖岬周辺で継続して観察されることから、「越冬」個体群と変更した。

【国内の分布】

太平洋側では房総半島以西、日本海側では男鹿半島以南で繁殖し周年生息するが、一部は冬期に移動するとされる。

【世界の分布】

東アジア、東南アジア、オーストラリア、ミクロネシアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

自然の岩礁が発達した海岸に生息し、岩場や砂浜を歩きながら魚類、カニ類、貝類をなど捕食する。島嶼の岩場では警戒心が非常に強く、近くで観察できることは希である。断崖の岩の隙間に小枝等を集めて営巣するとされるが、県内での繁殖は確認されていない。飛ぶ時に、グアッと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の生息地は、主に渥美半島西部の太平洋沿岸部と知多半島南部から三河湾の島嶼部にかけての岩礁が知られているが、生息数はごく少ない。確認記録の大半は非繁殖期のものであるが、三河湾の島嶼部では夏期の記録もあり、県内における繁殖の可能性も否定はできない。警戒心が強いことで釣り人による影響を受け易い種であり、釣り糸による被害例もある。

【保全上の留意点】

特別な保全対策は不要と思われるが、何気ない岩礁にもその環境に依存して生息する生物が存在することを、訪れた人に知ってもらうことは必要と思われる。

【特記事項】

愛知県鳥類生息調査地で最も記録が多いのは、伊良湖岬周辺の古山である。「三重県レッドデータブック 2015」（三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015）には、現況は未確認としながら、鳥羽市の離島で繁殖記録があると記されている。島の名前は記されていないが、遠くの島でも伊良湖岬からは 13km 程度の距離であり、神島であれば 4km 余りの距離になる。三重県で現在も繁殖しているのであれば、古山での記録が多い理由となる。

県内でも、観光地化されている 3 島や、三河湾の奥に位置する島では困難であるが、知多半島先端と渥美半島先端との間にある無人島の中には、本種が繁殖している島があるかもしれない。

【引用文献】

三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015. 三重県レッドデータブック 2015～三重県の絶滅の恐れのある野生生物～, p.71. 三重県, 津市.

(高橋伸夫)

ヨタカ *Caprimulgus indicus* Latham

【選定理由】

早いものは4月上旬に飛来し、遅いものは11月下旬に飛去する夏鳥である。主に山地に生息し、丘陵地や平地にも生息して繁殖していたが、1990年代に激減した。2000年頃には平野部やその周辺から繁殖期の確認記録がほとんど消失し、丘陵地や山地の生息数も大きく減少している。

【形態】

全長 29cm。頭頂および上面は灰褐色で、細かく黒い虫くい状の斑がある。翼は細長く灰白色で、黒色と橙褐色の複雑な斑がある。雄は、喉、頬の下、初列風切に白色部があり、外側尾羽に白斑がある。雌は、喉と翼の白色部は淡褐色で、外側尾羽の白斑はない。嘴は小さいが大きく開き、付け根に剛毛がある。



愛知県西尾市, 2013年9月29日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に平野部から丘陵地および山地に飛来し、現在は丘陵地や山地で繁殖する。

【国内の分布】

九州以北、北海道までの国内に夏鳥として飛来する。

【世界の分布】

インド、ネパール、東南アジア、ロシア極東南部、中国東部、朝鮮半島、マレー半島に分布し、北方のものは冬期に南下する。

【生息地の環境／生態的特性】

4月に渡来し、丘陵地や山地の明るい林に生息する。夜間に、甲虫、トビケラ、ガなどの昆虫類を大きな口を開け空中を飛びながら捕獲する。繁殖期の夜間にはキョキョキョ…とかな高い声で鳴き、複数の場合は、ゴア、ゴア、ゴアなどと鳴くことも多い。松林を好み、昼間は松の横枝上に枝と平行に止まって休息することが多いが、県内の松林の多くは現在も松枯れによって消失し続けている。本来の営巣環境は、禿山のように見える皆伐林や薪炭林、萱場などであるが、現在の県内にこのような環境は皆無である。営巣には巣材を一切用いず、地上に直接1~2卵を産卵して繁殖する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては、平野部から丘陵地および県内全域の山地に普通に生息し1972年には名古屋市緑区でも繁殖が確認されていたが、近年は繁殖期に平野部の繁殖はなくなり、丘陵部での繁殖はごく少数になって、山間部でもかなり減少している。一時は農道や林道をはじめ、丘陵部や山間部の整備された道路での轢死例も少なくなかったが、近年はこうした現象も確認されなくなっている。県内全域では夜間人工光の蔓延により、餌となる夜行性昆虫類の生息環境が攪乱されていること、および農林業の衰退により、繁殖環境である手入れされた草地や薪炭林の消失が減少の要因である。

【保全上の留意点】

車の前照灯や野外の夜間照明を極力LEDに変更して、紫外線に敏感な昆虫類を幻惑させないことが重要である。農林業の振興を図り里山環境を再生することで、豊かであった日本本来の里山生態系が復活できる。

【特記事項】

国内でも減少傾向の強い種ではあるが、県内には平野部や沿岸部にある広い農地や、平野に近い山地などで毎年少数ではあるが、夜間に秋の渡り途中の個体を確認できる場所もある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.43. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

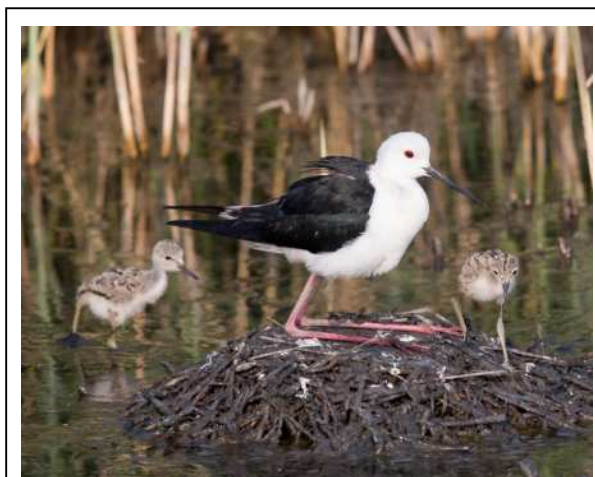
セイタカシギ *Himantopus himantopus* (Linnaeus)

【選定理由】

国内で繁殖が確認されているのは1975年から愛知県、1978年から千葉県、その後東京都や三重県、2009年には鹿児島県沖永良部島で繁殖記録があるが、現在も繁殖が継続しているのは愛知県の数箇所と東京湾の数箇所のみである。国内の繁殖ペア数は20～30ペア程度で、愛知県は本種の最大の繁殖地であるが、本種の繁殖成功率は極めて低く、繁殖は成功しない場合が多い。

【形態】

全長 35～40cm、翼開長 67～83cm。雄の背と翼は光沢のある黒色、雌は背の部分が黒褐色で光沢がない。雌雄とも頭部は白色から頭頂や後頸に黒色があるものがあり、黒色の大きさやの形は多様である。幼羽は、背が褐色で黄褐色の羽縁があり、若鳥の次列風切の先端は白い。脚はピンク色で非常に長く、嘴は細くて長い。飛翔時は、背、腰、尾の白色が目立つ。



愛知県西尾市, 2017年6月11日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾沿岸の干拓地や埋立地などに周年生息するが、繁殖場所は限られている。

【国内の分布】

主に春秋の渡りの季節に渡来するが、越冬するものも少なくない。伊勢・三河湾や東京湾沿岸などに小規模な繁殖群が確認されているが、越冬個体数は沖縄で比較的数字が多い。

【世界の分布】

ユーラシア中部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリア、北アメリカ中部から南アメリカと広く分布し、5～6亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

春は4月から5月、秋は7月から10月頃、沿岸部から平野部の水田や水路、池沼などの淡水湿地に渡来し、単独から数羽の群れで生息する。浅い水中を歩きながら水棲昆虫や貝類、小魚、オタマジャクシなどを捕食する。国内の繁殖数はごく少ないが、干拓地の水田や水路、埋立地にある水たまりの周辺に、ヨシの茎などを集めて営巣し4卵を産む。通常、営巣場所は止水の水辺であるために、豪雨などで急激に水位が上がると一帯の巣は全て水没して繁殖失敗となる。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の県内では西尾市一色地区の干拓地で10ペア以上の他に、境川河口周辺でも数ペアの営巣が確認されているが、尾張地域や東三河地域の営巣場所は、開発による環境変化で消失している。なお、毎年国内で最も多くのセイタカシギが営巣する県内の繁殖地には、産業廃棄物処理場建設計画がある。

【保全上の留意点】

西尾市の旧一色町にある竹生新田の水路は、本種にとって国内最大の繁殖環境である。ここを保全することは、県内のみならず、国内に生息する本種にとって、最も効果的な保護施策といえる。

【特記事項】

4月半ば頃までは、繁殖地に戻っても群れで集まっていることが多い。オオタカやチュウヒなどの天敵が繁殖のために移動して、完全に居なくなるまでは営巣を始めることはない。

【関連文献】

環境庁自然保護局野生生物課, 2000. 平成11年度冬期シギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査速報, p.25. 東京.

(高橋伸夫)

オオハシシギ *Limnodromus scolopaceus* (Say)

【選定理由】

シベリアで繁殖するが、主な越冬地はアメリカ大陸である。国内の生息数はかなり少ないが、以前の愛知県は国内でも本種の飛来数の多い県であった。調査が始まった 1970 年代からほぼ毎年のように 1~数羽の飛来が確認されており、当時の県内では越冬種でもあった。近年は越冬期の記録がほぼなくなっており、本種が安定して越冬できる環境が、県内から消失しているといえる。

【形態】

全長は 24~30cm、翼開長は 46~52cm。夏羽は、顔から頸および下面が赤褐色で暗褐色の斑があり、腹から下尾筒にかけては横斑状で、頭中央と上面は暗褐色。冬羽は、頭部から頸および胸にかけて灰褐色で、上面は濃灰褐色、腹から下尾筒にかけては白色で暗褐色の横斑がある。幼羽は冬羽に似るが、背と肩羽の羽縁は赤褐色で、全体に褐色味が強い。嘴は太くて長く、脚は黄緑色。飛翔時、下背から尾にかけて白く見え、翼後縁に細い白線がでる。



愛知県西尾市, 2016 年 4 月 17 日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾沿岸や木曾川下流部の干拓地にある水の入った水田や水路、および沿岸部の埋立地にある水溜りなどに飛来する。

【国内の分布】

数少ない旅鳥または冬鳥として本州、九州などに飛来する。

【世界の分布】

北東シベリア、アラスカ西海岸で繁殖し、アメリカ西海岸、メキシコ西海岸などで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

春秋の渡りの季節に河口の干潟、干拓地の水田や水路、埋立地の水溜りなどに飛来する。越冬期は水の入った水田や水路など、主に淡水の湿地を好んで生息する。県内には、秋は 8 月下旬頃から飛来し、春は 4~5 月に飛去する。餌は主に巻貝や水棲昆虫などの小動物であるが、植物の種子なども食べるらしい。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前は毎年のように県内で越冬期に確認されており、1990 年代半ばから 2010 年頃までは生息数に増加傾向もみられたが、その後再び減少して越冬も希になっている。近年の主な飛来地は愛西市周辺、庄内川河口、矢作川河口周辺および旧一色町周辺、汐川干潟周辺などであるが、現在は飛来がなくなっている場所も少なくない。減少の要因は、沿岸部の水田が転作により乾燥化したことと、県内全ての埋立地から湿地の環境が消失したことなどがあげられる。

【保全上の留意点】

愛知県では、干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。また、過去にシギ・チドリ類が多く生息していた地域では、水田の一部を借り受けて休耕田にするとか、水田の一部の転作作物を麦・大豆でなく飼料米などにするなどで、毎年水田の環境が継続されるようにすることも必要である。また、水田の一部を冬期湛水することで、水棲生物や土壌生物の生息環境を保全し、水田の生態系を維持することも大切である。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.128. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus)

【選定理由】

本来飛来数の多い種ではなく、年によって飛来数に変動の大きい種ではあるが、愛知県鳥類生息調査では、尾張地域の「鍋田」で 1970 年 10 月に最大値の 147 羽、その後も 1995 年までの秋には「庄内川河口」で 57 羽など、比較的安定して 50 羽程度の記録がある。東三河では 1981 年 9 月に「汐川河口」で最大値 58 羽の記録があり、1993 年までは度々 20 羽以上の記録があったが、その後激減している。近年もほぼ毎年のように飛来しているのは「庄内川河口」だけであるが、秋の県内全体では「庄内川河口」に他の地域の数を加えても、多い年で合計 20 羽程度以下である。

【形態】

全長 36～44cm、翼開長 70～82cm。夏羽は、頭部から胸にかけて橙褐色、上面は赤褐色で黒色の軸斑と白斑があり、胸側と脇には黒色の横斑がある。冬羽は、頭部から上面にかけて灰褐色で、下面は白色。幼羽は、上面の羽縁がバフ色で頭部に黄褐色味を帯びる。嘴はまっすぐで長く、脚は黒色で長い。飛翔時は、風切の白い横帯と腰の白色、尾の先端は黒色。雌の方が雄よりやや大きい。



愛知県西尾市, 2013 年 5 月 14 日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで、主に伊勢・三河湾沿岸の干潟、淡水や汽水の湿地、水田などに飛来する。

【国内の分布】

春秋の渡りで、北海道から沖縄まで全国に飛来する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸中部、北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主に春は 4 月下旬から 5 月に成鳥が、秋は 8 月から 10 月に幼鳥を主とした群れが飛来する。干潟や埋立地の水溜り、干拓地や河川流域の水田や水路、池沼などに飛来する。淡水や汽水の水辺を好むので、干潟に入る場合も比較的上流域の汽水域で採餌することが多い。ゴカイ、カニ、二枚貝、昆虫などを捕食するが、泥に差し込んだ嘴を前方に振り上げて餌を飲み込む独特な採餌をする。数羽から 20 羽程度の群で生息することが多く、秋に比べ春の飛来は頻度が低く飛来数も安定しない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の飛来地は木曾川下流流域、庄内川河口周辺、矢作川流域および河口周辺、一色干潟周辺、豊川河口周辺、汐川干潟周辺などがあげられるが、現在ほぼ毎年秋の飛来があるのは庄内川河口と西尾市沿岸部周辺のみ、春は飛来頻度が低く飛来場所も安定していない。

減少の要因は、県内の沿岸部や平野部から淡水や汽水の湿地環境が減少し、残された湿地環境からも餌生物が減少していることがあげられる。

【保全上の留意点】

沿岸部に残る湿地を保全することは当然であり、環境の回復に努める必要がある。愛知県では、干拓地や埋立地の遊休地に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要な時代になっている。

【特記事項】

春は成鳥の冬羽から夏羽の個体が飛来し、秋は幼鳥の群れに少数の成鳥冬羽が混じることがある。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.134. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

オオソリハシシギ *Limosa lapponica* (Linnaeus)

【選定理由】

干潟に生息する大型シギの代表種であり、愛知県鳥類生息調査では庄内川河口で1993年4月の515羽を最高に、2000年の春まで毎年100羽を超える飛来があり、秋の記録は1978年9月汐川河口の105羽が最高である。2010年以降の春は庄内川河口で2011年4月の39羽が最高で、その後は毎年10～20羽程度の飛来となっている。同じく2010年以降の秋の記録は庄内川河口で2010年10月の17羽が最高で、庄内川河口、汐川河口とも2017年以降は各1～2羽の記録となっている。

【形態】

全長37～41cm、翼開長70～80cm。夏羽の雄は、頭頂や上面は黒褐色で背や肩羽に赤橙色の羽が混じり、顔および下面は一様な赤橙色、雌には全く赤橙色がない。冬羽は、上面が灰褐色で羽縁が白く、下面は灰白色。幼羽は冬羽に似るが、肩羽と三列風切の褐色の軸斑がぎざぎざ模様に見える。嘴は長くてやや上に反り、基部が肉色で先端が黒い。腰は白色で上尾筒と尾羽に黒褐色の横斑がある。



愛知県西尾市, 2008年5月11日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の干潟に飛来するが、秋に飛来するものの大半は幼鳥である。

【国内の分布】

北海道から沖縄にかけて春と秋の渡り時期に飛来する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部とアラスカ西部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカから、ニュージーランドまでの大陸や島嶼の沿岸部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟に強く依存する種で、春は3月下旬から5月、秋期は8月から10月に飛来する。泥の中に嘴を深く差し込んで貝類やゴカイ類などを捕食する。オーストラリア東部で越冬する亜種オオソリハシシギ *L. l. baueri* の成鳥が飛来するのは春だけで、秋は幼鳥のみである。オーストラリア西部で越冬するコシジロオオソリハシシギ *L. l. menzbieri* と思われる亜種も、春秋に少数が飛来している。

【現在の生息状況／減少の要因】

1970年代までは、本種が飛来する干潟は、県内各地に数多く存在していた。現在も県内には8ヶ所程の飛来地が残されているが、いずれも干潟面積は減少し、後背湿地も減少している。海や干潟は貧栄養化で餌生物が減少しており、本種の県内全体への飛来数は減少の一途を辿っている。

【保全上の留意点】

現存する干潟を保全するとともに、干潟に生息する生物の生態系を回復することが重要である。河川から供給される栄養塩類の減少が指摘されており、試験的に終末処理場の管理運転が実施され始めたが、さらに研究が進められることで、豊かな海や干潟が復活することが望まれる。

【特記事項】

米地質調査所（USGS）が衛星を使って行った調査では、ニュージーランドで越冬した個体が春の渡りでは無着陸で7日程かけて朝鮮半島まで渡り、その後同じく5日程かけてアラスカ西部の繁殖地へ到着した。秋の渡りではアラスカからニュージーランドまで11,680kmを8.1日間、同じくノンストップで渡っていることが明らかにされており、この距離は渡り鳥の無着陸飛行最長記録である。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.134-135. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus)

【選定理由】

アジア大陸東部のみで繁殖する種で、2015年に国際自然保護連合のレッドリストでも絶滅危惧ⅠB類に評価されている。愛知県鳥類生息調査では、県内で最も生息数の多い庄内川河口では1990年代半ばまで20羽近い記録もあったが、2011年以降は1～5羽程度にまでに減少している。汐川河口では1991年まで5羽以上の記録もあったが、近年は多くても1羽程度で記録されない年も多い。現在の愛知県で春秋共に県内全域に飛来する本種の数、多い年でも5羽程度と推測される。

【形態】

全長53～66cm、翼開長110cm。上面は、淡褐色で、頭頂から背、肩羽、雨覆に暗褐色の斑がある。顔、頸、胸にかけて黒褐色の縦斑があり、腹と下尾筒は淡褐色。翼下面は淡褐色で、下雨覆に黒褐色の横斑がある。腰は背と同様な褐色で、上尾筒と尾は淡褐色で黒褐色の斑がある。嘴はとても長く、大きく下に湾曲する。雄雌同色であるが、雌の方が雄よりも大きい。



愛知県西尾市, 2018年10月26日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の、主に干潟に生息するが、春は水田にも入る。

【国内の分布】

春秋の渡りで、北海道から沖縄まで全国の沿岸部に飛来する。

【世界の分布】

シベリア東北部・中国東北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、フィリピン、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

近縁で姿や形がよく似ているダイシャクシギが塩水の干潟に強く依存しているのに対し、ホウロクシギは干潟だけでなく、汽水や淡水の湿地にも生息し、春は3月中旬から5月下旬頃まで、秋は8月から10月にかけて単独または数羽で生息する。主に干潟のカニ類を食べるが、特に春は耕作前の水田で、昆虫類などを捕食することもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

1972年の秋に鍋田周辺で22羽、1970年代半ばに愛知県全体で67羽が数えられた。その後も、1981年に飛島干潟で21羽、1987年に庄内川河口で28羽などの記録がある。現在の飛来地は庄内川河口、矢作川河口、一色干潟周辺、汐川干潟周辺、伊川津干潟などであるが、庄内川河口周辺と、一色干潟周辺以外では飛来しない年も多い。干潟では、餌となるカニの生息数が減少している。

【保全上の留意点】

沿岸部に残る湿地を保全することは当然であり、環境の回復に努める必要がある。河川から供給される栄養塩類の減少が問題となっており、試験的に終末処理場の管理運転が実施され始めたが、さらに研究が進められることで、豊かな海や干潟が復活することが望まれる。

【特記事項】

春の渡りでは、3月の半ばから九州や沖縄方面の天候に関係なく姿を見せることから、オーストラリアの方向から真直ぐに太平洋を越えて飛来することが推測されていたが、越冬期の分布が似ているオオソリハシギでは、衛星追跡で推測通りの渡りコースが証明されている。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.136. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas)

【選定理由】

春と秋の渡りに伊勢・三河湾沿岸部にある河口の干潟や水路、水田や湿地などに渡来する。かつては尾張、西三河、東三河の各所で、春期にそれぞれ 100 羽単位、多い時には 1 箇所でも 300～500 羽以上もの群れが見られたこともあるが、1980 年代の半ば頃から個体数が激減して、近年ではごく限られた場所に多くても 5 羽以下程度が飛来するに過ぎない。飛来数が 1/10～1/100 以下に減少している上に、現在もその少数羽がほぼ毎年飛来している場所は、県内の数箇所に過ぎない。

【形態】

全長 29～32cm、翼開長 61～67cm。夏羽は、全身が黒く背に白斑があり、脚は黒色でやや赤味を帯びる。冬羽は、上面が灰色で下面は白く、眉斑が目立ち脚は赤色。嘴はまっすぐで長く、黒色で下嘴の基部だけが赤い。飛翔時は、背と腰が白く見える。幼羽は冬羽に似るが、背は褐色味が強く腹や脇に褐色の横斑がある。



愛知県西尾市, 2004年5月3日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋に伊勢・三河湾沿岸の河口にある干潟や、干拓地の水田や水路などに飛来する。

【国内の分布】

春と秋の渡りで北海道から沖縄まで飛来し、ごく少数であるが、主に沖縄、九州をはじめ国内各所で越冬するものもある。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

伊勢・三河湾の沿岸にある干潟と、その周辺にある干拓地の水田や水路、湿地、埋立地の水たまりなどに飛来する。春に 100 羽単位の大群が生息した場所は、湾の奥にある河川の河口周辺の干潟で、海水より塩分濃度の低い水辺と、周辺に汽水や淡水の後背湿地がある環境であった。春は 3 月上旬から冬羽の飛来がはじまり 5 月末までには飛去するが、4 月末から 5 月には真黒な夏羽になり、その数百羽の群は圧巻であった。秋は幼鳥と冬羽の成鳥が飛来するが数は少なく、多くても 10 羽に満たない。脚が長いので比較的深い水中を歩きながら水棲生物を捕食することが大半であり、さらに深い場所では水に浮いて泳ぐこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は春に木曾川下流部や庄内川河口、境川河口、西尾市一色地区、汐川干潟、伊川津干潟などに数羽が飛来するが、毎年安定して飛来する場所は西尾市一色地区のみと思われる。減少の要因として、生息に適した餌の多い内湾の干潟や、湿地環境の消失が考えられる。

【保全上の留意点】

現在県内で唯一春秋共に少数ながら安定して飛来のある、西尾市一色生田地区の湿地環境を保全することと、他の地域でも干拓地や埋立地の遊休地に良好な湿地環境の復元を行うべきである。

【特記事項】

シギ類の中で、国内で越冬する種を除けば、春の渡りで最も早く飛来するのが本種である。他のシギ類の渡りは通常 4 月下旬からなので、これらに比べ 1 ヶ月以上も早いことになる。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.122. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

タカブシギ *Tringa glareola* Linnaeus

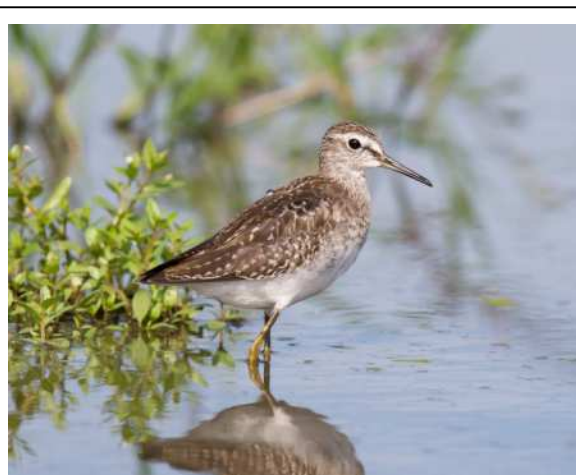
【選定理由】

主に春と秋の渡りで、伊勢・三河湾の沿岸から内陸の平野部にある広い水田や水路、池沼の湿地などに飛来する。干潟に入ることほとんど無く、淡水あるいは汽水の湿地にのみ生息する。

1974年には西三河沿岸部で合計450羽以上、汐川河口の周辺では1979年4月に375羽、鍋田干拓では1977年9月に91羽の記録があるが、1980年代半ば以降に個体数が激減した。近年の沿岸部では1群10羽を超える記録が無く、飛来さえ希になっている場所が大半であるが、現在でも転作のない沿岸部から離れた木曾川や矢作川の下流域では、希に10羽程度の飛来が見られることもある。

【形態】

全長19～21cm、翼開長56～57cm。頭部および上面が暗褐色で白斑が散在する。眉斑は白く明瞭で眼の後方まで伸びる。夏羽は、顔、頸から胸側にかけての縦斑が明瞭だが、冬羽と幼羽では目立たない。脚は黄色く長い。飛翔時に腰と尾が白く見える。



愛知県岡崎市, 2019年9月29日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋に、主に伊勢・三河湾沿岸部や平野部の水田や水路など淡水湿地に飛来する。数は少ないが、越冬することも希ではない。

【国内の分布】

春秋の渡り時期に北海道から沖縄まで飛来し、温暖な地域では越冬するものもいる。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主に春は4月中旬から5月中旬、秋は7月下旬から10月に、県内の平野部にある水田や水路、池沼などの淡水湿地に飛来するが、特に沿岸部の干拓地で数が多い。1～十数羽の小群で生息することが多く、生息数の多い頃はあちらこちらの水田でこうした群れが普通に見られた。

【現在の生息状況／減少の要因】

主な生息地として、木曾川流域、鍋田周辺、矢作川下流流域、一色干潟周辺、豊川下流や汐川干潟周辺などがあげられ、その他、県内平野部の水田や中小河川でも少数が見られる。1980年代半ばまでは減反による休耕田が沿岸部の各地に存在しており、こうした淡水湿地が本種には絶好の生息地となっていたが、現在は休耕ではなく隔年で麦と大豆の畑になり生息環境が消失した。

【保全上の留意点】

愛知県では、干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。また、シギ・チドリ類が多く生息していた地域では、水田の一部を借り受けて休耕田とするか、水田の一部の転作作物を麦・大豆でなく飼料米等にするなどで、毎年水田の環境が継続されるようにすることが必要である。また、水田の一部を冬期湛水することで、水棲生物や土壌生物の生息環境を保全することも大切である。

【特記事項】

シギ・チドリ類の全国調査における愛知県内でカウントされた本種の個体数は1981～1983年の春期が最大947羽～最小697羽、1996～1998年の春期が最大67羽～最小37羽であったが、近年は県内全体でも20羽未満に減少している。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.132. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

メリケンキアシシギ *Heteroscelus incanus* (Gmelin)

【選定理由】

外洋性のシギで国内では極めて数の少ない種であり、県内への飛来数は1～数羽である。春秋の渡りの季節に太平洋（遠州灘）に面した海岸の岩礁に飛来するが、県内では5月の記録が大半を占める。県内に毎年飛来する環境とその地域は限られており、他の場所にある岩礁に飛来することは極めて希であり、三河湾の干潟やその周辺などでの記録も極めて希である。限られた地域の岩礁から生息可能な環境が無くなれば、たちまち県内から姿を消すことになる。

【形態】

体長約 28cm。雌雄同色。夏羽は頭頂から上面は灰褐色で下面全体は白黒の縞模様。冬羽では下面の模様が淡くなる。飛翔中の翼は上下面とも灰黒褐色。嘴は黒色、基部はやや淡色で、まっすぐ。脚は汚黄色。第一回冬羽は成鳥冬羽に似るが、雨覆に白斑がある。キアシシギによく似ているが少し大きく、体の色は全体にやや濃く見える。



愛知県渥美半島, 1988年5月20日, 山本 晃 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

ほぼ毎年飛来する場所は渥美半島の太平洋に面した特定地域の岩礁地帯であるが、三河湾の干潟などでも記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、小笠原諸島、伊豆諸島などで希な旅鳥として記録されるが、一部越冬するものもいる。

【世界の分布】

アラスカ南西部とシベリア東端で繁殖し、南カリフォルニアから中米の太平洋岸、ハワイ諸島から中央・南部太平洋諸島、ニューギニア東部、オーストラリア東岸、ニュージーランドなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

渥美半島の太平洋に面した海岸の岩礁に定期的に飛来し、単独あるいは数羽でみられる。岩礁の上を歩きながら岩の隙間などにいる生物を捕食しているが、図鑑等では「節足動物や貝、ゴカイなどを食べる」と記されている。ピッピッピッと連続して鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

三河湾の干潟や河口の周辺でも数回の観察記録はあるが、近年の記録は全て渥美半島の太平洋岸に面した特定地域の岩礁周辺に限られている。数羽で見られることもあるが、近年はほとんどが1羽である。三河湾での記録が無くなった要因は不明であるが、近年伊勢・三河湾全域でもシギ・チドリの生息数が激減している。

【保全上の留意点】

特別な保全対策は不要と思われるが、何気ない岩礁や消波ブロックにもその環境に依存して生息する生物が存在することを、訪れた人に知ってもらうことは必要と思われる。

【特記事項】

近年、海岸の浸食防止のため、本種の生息地である岩礁周辺の沖に消波ブロックが設置されたが、この消波ブロックも生息場所として利用しているようで、最近では岩礁でなくこの人工物の上で生息を確認することも多くなった。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.133. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield)

【選定理由】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸部の水田や湿地などに飛来するが、1980年代半ば以降に個体数が著しく減少し、近年では限られた場所にごく少数が飛来するに過ぎない。1980年代までは、木曾川周辺や矢作川河口から一色干潟周辺、汐川周辺の干拓地などで、特に春期はそれぞれの地域で50～300羽程度の飛来が確認されていたが、現在では多い年でも県内全域の合計が20羽以下程度である。

【形態】

全長17～22cm、翼開長36～43cmで、雄は雌よりひと回り大きい。夏羽は、頭部および上面が茶褐色で頭尖は赤茶味が強く、脇から胸にかけて明瞭な黒斑が密にある。冬羽と幼羽は、ともに脇や胸の黒斑が明瞭でないが前者は上面が灰褐色で、後者は茶褐色で色あいは夏羽に似る。嘴は黒く基部は黄色味を帯び、脚は黄緑色。



愛知県西尾市, 2017年8月31日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りの季節に、主に伊勢・三河湾沿岸の水田地帯に飛来する。

【国内の分布】

春秋の渡りで飛来し、主に水田や荒地などの淡水湿地に生息する。

【世界の分布】

シベリア東北部で繁殖し、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

春期は4月から5月に、水が張られた水田などの淡水湿地に飛来するが、地域によっては干潟にも入る。かつては1群数羽から20羽程度の群で生息し、こうした群れが同一地域のあちらこちらの水田で見られた。小型の水棲昆虫や貝類、植物の種子などを捕食して、クリックリッと鳴く。雄は雌より大きく、春は雄が体を震わせながら雌に求愛行動を行うこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の主な生息地として、旧立田村、鍋田周辺、矢作川河口周辺から旧一色町沿岸部周辺、汐川干潟周辺などがあげられるが、近年は多い年でも県内の合計は、春が20羽、秋が10羽程度である。減反の方法が、休耕田から隔年の麦・大豆への転作に変更されたことで、水田本来の水棲生物や土壌生物が生息できなくなり、これらを餌とするシギやチドリが生息できなくなっている。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。また、シギ・チドリ類が多く生息していた地域では、水田の一部を借り受けて休耕田とするか、水田の一部の転作作物を麦・大豆でなく飼料米等にするなどで、毎年水田の環境が継続されるようにすることが必要である。また、水田の一部を冬期湛水することで、水棲生物や土壌生物の生息環境を保全することも大切である。

【特記事項】

矢作川流域では、春秋共に沿岸部では飛来数が激減しているが、内陸の岡崎市や豊田市などでは、数はごく少ないものの現在でもシギ・チドリが飛来する水田が存在している。麦・大豆等の転作を行わず、毎年稲作を行って、冬期も湿潤な水田であれば、水鳥は飛来することを示唆している。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.122. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

キリアイ *Limicola falcinellus* (Pontoppidan)

【選定理由】

春秋の渡りの季節に伊勢・三河湾の干潟、干拓地の水田や湿地、埋立地の水溜りなどに飛来するが、春の飛来は単独の場合が多く、飛来頻度もかなり低い。トウネンやハマシギのように数の多い種ではないが、県内で最も飛来数の多かった汐川干潟では、1976年9月15日に154羽の記録がある。1989年にも35羽の記録があるが、その後激減して現在では飛来そのものが希になっている。2004年以降に10羽以上が確認されているのは全て三河湾の埋立地であるが、現在では県内からシギ・チドリが飛来できる水溜まりのある埋立地がほぼ全て消失していることから、今後県内で確認される機会が大きく減少することが危惧される。

【形態】

全長 16～18cm、翼開長 37～39cm。頭部から上面にかけて茶褐色で黒い軸斑があり、幼鳥は背に黄白色のV字の線がある。頭頂には白い頭側線と眉斑があり、嘴は長くて幅があり、先端が少し下方に曲がる。脚は黒色。



愛知県碧南市, 2009年8月15日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りの季節に伊勢・三河湾沿岸の干潟や水田などの湿地、埋立地の水溜りなどに飛来する。また、ごく少数であるが内陸の水田に飛来することもある。飛来数は秋が圧倒的に多く、春の飛来はごく僅かである。

【国内の分布】

春秋の渡りで全国の主に沿岸部に飛来して、干潟や湿地、水田などに生息する。

【世界の分布】

スカンジナビア半島北部、シベリア北部で繁殖し、中東、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。2亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

主に春は4～5月、秋は8～10月頃に飛来し、干潟や干拓地の水田や水路、埋立地の水たまり、少数ではあるが内陸の水田などにも飛来する。過去に県内で最も多くの飛来があったのは干潟であるが、2000年代半ば以降は干潟より埋立地の水溜りでの記録が多くなっている。ビュービュー、あるいはジュルービュルーなどと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の飛来地として、庄内川河口周辺、汐川干潟周辺、矢作川河口周辺、一色干潟周辺などがあげられるが、近年庄内川河口周辺と汐川干潟周辺では確認されない年の方が多い。最も安定していたのは矢作川河口周辺の埋立地と一色干潟周辺の干拓地のみであるが、矢作川河口周辺の埋立地からは生息環境が消失し、一色干潟周辺の干拓地には現在産廃処理場建設計画がある。

【保全上の留意点】

沿岸部に残る湿地を保全することは当然であり、環境の回復に努める必要がある。愛知県では、干拓地や埋立地の遊休地に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要な時代になっている。

【特記事項】

本種はハマシギやトウネンなどに比べて数の少ない種であるが、特に日本に飛来する東シベリア産の亜種 *L. f. sibirica* は数が少ないとされている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.127. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus)

【選定理由】

平野部の淡水湿地、主に水田に生息して繁殖するが、近年は生息数が激減した。繁殖期間が長く、冬期の確認例も少なくない。都市化や道路建設等により生息に適した環境が消失し続けており、繁殖場所としてある程度の面積のある水田地帯で、夜間に人工光や騒音の少ない環境が必要であることから、近年急激に生息数が減少している。

【形態】

全長 23～28cm、翼開長 50～55cm。成鳥雄は、頭部から上面は暗褐色で黄褐色の頭中央線があり、目の周辺にはまが玉型の黄褐色の斑がある。肩から背にかけて黄褐色の線、肩から胸にかけて太い白線がある。成鳥雌は、目の周辺の斑が白色で、顔から上胸が赤褐色、上面は暗緑褐色で下面が白く、雄に比べて鮮やかである。



愛知県安城市, 2017年8月16日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

沿岸部から里山に広がる水田まで、県内平野部の淡水湿地に広く生息して繁殖するが、冬期は生息数が少なくなる。

【国内の分布】

主に本州中部以西に周年生息し繁殖するが、宮城県や山形県でも繁殖が確認されている。北陸地方以北のものは冬期に南下する。

【世界の分布】

インドから東南アジア、中国、アフリカ、オーストラリアに分布し2亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の水田や淡水の湿地を好み、かつての減反政策で存在した休耕田は、本種の繁殖場所としても、餌となる水棲生物や土壌生物の生息場所としても最適な環境であった。

繁殖期は5月から10月頃で、湿田の畦など地上で営巣し、雌は繁殖期の夜間に、コーツ、コーツ、と続けて鳴く。冬期は小群で生息するが、夏期よりも確認される数は少ない。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつての愛知県は本種の生息数の多い県であったが、近年ではその姿を確認することも困難になっている。稲作の減反政策で休耕田が多かった頃までは、愛知県には本種に限らず淡水性の水鳥が数多く生息していたが、休耕していた田に、隔年で麦や大豆への転作が行われるようになると、営巣環境が減少しただけでなく、餌となる水棲生物が消失したことで生息数が激減している。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。水田の一部を借り受けて休耕田、あるいは水田の一部の転作作物を飼料米等に限定し、冬期湛水も実施するなどして湿田の環境が継続されるようにすることが必要である。

【特記事項】

鳥類の中でも、1妻多夫の形で繁殖を行う種は限られており、国内に生息する種では本種とミフウズラだけである。雌は声でテリトリー宣言を行って卵を産むだけで、抱卵や育雛は全て雄が行う。雌のテリトリーの中に、通常は複数の雄の巣がある。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.112. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

コアジサシ *Sterna albifrons* Pallas

【選定理由】

本来は海岸や河川の砂地、干拓地の荒地などで繁殖していた種であるが、戦後伊勢・三河湾沿岸の海面で埋め立て事業が始まると、ここに出来た一時的な裸地と淡水の水溜まりがこの種の繁殖適地となった。近年になって県内から埋め立てができる場所がなくなり、全ての埋立地が乾燥化、草地化すると、本来の繁殖環境を含め、県内から本種の繁殖環境は消失してしまった。

【形態】

全長約 22～28cm、翼開長 47～55cm。上面は青灰色で下面は白色。尾は白色で、外側尾羽が長く飛行時は燕尾状に見える。夏羽は、頭頂から後頭にかけて黒色で、額は白色で過眼線は黒色、嘴は黄色で先端が黒色、脚は橙黄色。冬羽は、額の白色が頭頂まで広がり、嘴と脚は黒色。幼羽は、冬羽に似るが背に褐色の小斑がある。



愛知県碧南市, 2017年6月1日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

4月から7月に伊勢・三河湾沿岸および内陸の河川の砂地や造成地などに飛来して繁殖し、8月以降は干潟などで渡去前の群れが見られることがある。

【国内の分布】

夏期、主に本州以南に飛来して繁殖する。

【世界の分布】

ヨーロッパ、ロシア西部、中東、インド、東南アジア、オーストラリア、アフリカ、北アメリカ中部から南アメリカ北部で繁殖し、北方のものは冬期に南下し越冬する。7～10亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部の埋立地や干拓地、河川の河原や造成地などで繁殖する。繁殖地に集合するのは4月下旬からで、5月には抱卵を始め、順調であれば6月中旬にはヒナが少し飛べるようになる。ただし、繁殖の早い時期に豪雨や天敵などで繁殖が失敗すると、成功している群れの繁殖地に集合して、繁殖を再開するものや、時期を逃して繁殖できない個体も集まり、大きなコロニーを形成して7月末まで繁殖が続く。海や河川、池や水路の上空を飛びながら、水中に飛び込んで主に小魚を捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

2010年までは繁殖後期に、1箇所の繁殖地で5,000羽以上の群れが確認されることもあったが、沿岸部から埋立てをする場所がなくなると激減し、2018年と2019年の繁殖期に県内で最低1羽以上のヒナを巣立ちさせることができたのは、多めにみても数十ペア程度と推測される。減少の要因は繁殖環境の消失と、カラス類やチョウゲンボウなど、天敵の分布が拡大していることがあげられる。

【保全上の留意点】

早急に干拓地や埋立地の遊休部分にコアジサシの繁殖環境を復元する努力と、天敵であるカラス類や猛禽類の被害を減少させるための工夫が必要である。

【特記事項】

最近衣浦湾岸の企業の協力を得て、親鳥の数で500羽近いコロニーの誘致に成功したが、最近県内で繁殖するようになった数ペアのチョウゲンボウによって孵化直後のヒナが捕食され、繁殖は失敗した。今後は本種の繁殖場所を確保すると共に、天敵の影響を軽減する努力も必要である。

【関連文献】

茂田良光, 2000. コアジサシの分布と分類. *Birder*, 第6巻 第7号. pp18-21. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ハイロチュウヒ *Circus cyaneus* (Linnaeus)

【選定理由】

冬期に、主に伊勢・三河湾沿岸のヨシ原やイネ科の草叢でねぐらをとり、農耕地や河川敷などを広く移動しながら狩りを行うが、県内のヨシ原や草叢の面積は激減している。主な餌場である農地は、道路建設や商工業施設などへ転用されることも多く、作物にも多様性がなくなっている。本来生息数はかなり少ないが、近年その数はさらに減少している。

【形態】

全長は雄が 43～47cm、雌が 48.5～53.5cm、翼開長は 98.5～123.5cm の雌雄二型。雄は、上面全体と顔から胸および尾羽が淡灰色で、腹が白く外側初列風切が黒い。雌は、上面が全体的に暗灰褐色で、下面は淡褐色または赤褐色で前頸から腹にかけて暗褐色の縦斑があり、風切と尾は灰褐色で太くて明瞭な横斑があり、腰が白い。雄、雌ともに目と脚が黄色。幼鳥は雌に似るが、目の色が暗褐色。



愛知県西尾市, 2019年3月17日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に伊勢・三河湾沿岸や河川のヨシ原および周辺の農耕地に生息し、時に内陸部の山地でも記録されることがある。

【国内の分布】

冬期に北海道から九州にかけて渡来し、南西諸島でも記録がある。

【世界の分布】

極北を除くユーラシア大陸北部と北アメリカ大陸北部で繁殖し、冬期は南下する。冬期はユーラシアでは、ヨーロッパ中南部、中近東北部、インド北部、インドシナ北部、中国南東部、台湾、朝鮮半島南部などに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部のヨシ原や干拓地の農地だけでなく、標高 1,000m 以上の山地から山麓の里山まで、チュウヒという名のイメージからは意外な環境にも飛来して狩りを行う。隣県ではあるが、渡りの季節に標高 1,300m の山頂で獲物を探している姿や、冬期に県内にある里山の農地で獲物を探し、林の中へ飛び込んで小鳥を捕らえる姿を観察したこともある。獲物は主にネズミなどの小型哺乳類や、小型の鳥類である。夕方チュウヒと共にねぐらに集合し、同じヨシ原や草叢に散在して夜を過ごす。

【現在の生息状況／減少の要因】

チュウヒと共に、県内に生息する個体の主なねぐらは、尾張地区では鍋田干拓の隣にある三重県木曾岬干拓、矢作川・矢作古川河口周辺では一色地区竹生新田、汐川・豊川河口周辺では田原 4 区埋立地であるが、それらの場所では、メガソーラーの設置や開発計画によりヨシ原が刈られている。

【保全上の留意点】

県内に存在するねぐらの環境を保全すると共に、干拓地や埋立地に存在する遊休地に、かつての県内に存在していた、生物多様性に満ちた湿地環境を再生するべきである。

【特記事項】

近縁のチュウヒに比べると少し小型で、狩りの動作はかなり俊敏である。チュウヒと異なり、動きの早い小鳥でも巧みに捕獲する。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.64. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

サシバ *Butastur indicus* (Gmelin)

【選定理由】

以前は夏鳥として半島部や丘陵部、平野部に面した山麓から標高 1,000m の山地まで、県内に広く分布して繁殖していた。渥美半島や知多半島、尾張東部丘陵でも繁殖していたが、2019 年現在尾張地域で繁殖が確認されているのは 1 ペアのみ、西三河南部でも 2 ペアが残るのみで、県内に生息する現在の繁殖個体数は、1970 年代の 1/5 程度と推測される。

【形態】

全長 47～51cm、翼開長 102.5～115cm。翼は長くてやや細い。成鳥は、頭から背にかけて赤みのある褐色で、腹に茶褐色の横斑、喉の中央に明瞭な縦線が 1 本あり、目は黄色。雄成鳥は、頭部に灰色味が強い。幼鳥は、上面に赤味がなく胸から腹にかけて縦斑、汚白色の太い眉斑があり、目は暗褐色。飛翔時の下面は白っぽく、翼がやや細めに見え、尾羽に横帯、風切に横斑がある。



愛知県, 2019 年 6 月 9 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

現在は夏期に山間部で繁殖し、春秋の渡りでは平野部を含む県内のほぼ全域を通過する。

【国内の分布】

北海道を除く全国で繁殖し、南西諸島では少数が越冬する。

【世界の分布】

ロシアのアムール以南、中国東北部、朝鮮半島北部、および日本で繁殖し、南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、マルク諸島、ニューギニアなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

本州には 3 月下旬から飛来して繁殖し、主に 9 月下旬から 10 月上旬に越冬地へ渡去する。アカマツを好んで営巣する種であったが、県内のアカマツは松枯れによりそのほとんどが消滅しており、近年はスギなどで繁殖する例が増えている。水田、畑、湿地、伐採跡地などの開けた土地で狩りを行うことが多く、谷に耕地が入り込んだ里山環境を主な生息地としている。主にカエル、ヘビ、トカゲ、昆虫類を捕食し、時にはヒミズやネズミ、小型の鳥類などを捕食することもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生息に適しているのは、本来の日本に存在していた里山環境である。近年山林や農地が放棄され、本種の採餌環境である手入れされた農耕地が消失している。加えて繁殖期に本種が採餌場として利用できるのは、人や車の往来が少ない里山に限られる。里山を通る道路が整備され通過する人や車が増加すると、繁殖する本種は消滅しており、一旦消滅した場所には、環境が改善されても戻らないのが本種の特徴である。

【保全上の留意点】

農林業の振興は国内の野生生物にも重要であり、環境を変える場合は生物への配慮が必要である。

【特記事項】

県内に生息する本種の中で、本来の里山環境で繁殖しているのは、猿投山系周辺と本宮山系周辺、およびその間にある三河高原一帯に分布しているものが大半である。それ以外の場所で繁殖しているものの多くは「山サシバ」と呼ばれ、山地が主な餌場であるために生息密度はかなり低い。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.76-77. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

クマタカ *Nisaetus nipalensis* Hodgson

【選定理由】

県内の山間部に周年生息し繁殖するが、生息地は限られており数も少ない。定住性が強く、営巣・採餌に広域かつ多様な環境が必要であることから、開発圧の影響を受けやすい。近年の研究では繁殖成功率の低下が指摘されており、絶滅の危機に瀕していると考えられる。

【形態】

全長は雄が 70～74.5cm、雌が 77～83cm、翼開長は 140～165cm。上面は全体的に灰褐色、下面は淡褐色で胸に褐色の縦斑、腹には不明瞭な横斑がある。頭上には短い冠羽があり、成鳥の顔は黒褐色で目の色は黄色。飛行時は、翼が幅広く後縁が膨らんで見える。尾は長めで、太くて明瞭な横帯が 4～5 本ある。幼鳥は、全体的に著しく白っぽく、尾の横帯は細くて数が多い。目の色は黒っぽく見える。



愛知県, 2000年6月15日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

三河の山間部に周年生息して繁殖するが、ごく希に平野部近くに飛来することもある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州の山地に生息し、佐渡、隠岐、対馬でも記録がある。

【世界の分布】

インド南西部、インド東部、スリランカ、ネパールから中国南部、ミャンマー北部、マレー半島北部、タイ、インドシナにいたる地域、台湾、日本に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では標高およそ 400m 程度以上の山地で繁殖し、急峻な谷を中心に生活する。繁殖には営巣と育雛に必要な大径木を含む営巣林が必要であり、行動圏には餌となるヤマドリやノウサギなどが生息する多様な環境が必要である。大型のタカであるが、通常は山の尾根筋や斜面から離れた場所を飛行することが少なく、開けた上空でディスプレイを行う繁殖前期以外は目にする機会が少ない。幼鳥は巣立ち後も長期間にわたり営巣林の周辺に留まることが多く、親鳥も自分のテリトリーから積極的にこの若鳥を追い出す行動はとらないようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では、三河地区の山地で繁殖期を含む生息が確認されている。繁殖は毎年あるいは隔年で、ヒナの数 は 1 羽のみであるため、他の種に比べ個体数の増加率はかなり低いものといえる。

【保全上の留意点】

定住性が強く、開発の影響を受けやすい種である。急峻な谷など本種が生息している可能性のある地域で開発行為を計画する場合には、その生息状況を把握する必要がある。生息地においては十分調査を行って、営巣林や巣立ち後の幼鳥の行動範囲など中心的なエリアを特定し、適切な保全と管理を行う必要がある。

【特記事項】

定住性が強く繁殖環境以外の場所で観察される例は少ない種であるが、非繁殖期には繁殖環境以外の山地で観察されることがあり、ごく希に丘陵地や平地でも観察されることがある。

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.86-87. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles)

【選定理由】

夏期に丘陵地や山間部の里山環境、平野部の集落などに飛来し、通常は社寺林の樹洞で営巣するが、お寺のドバト用巣箱や大規模公園の鉄製構造物、公共施設の建屋内などでも営巣する。県内では2000年頃から平野部での繁殖がほぼなくなっており、丘陵地や山間地の繁殖も激減している。1990年代半ばまでは、フクロウ類の中で本種が最も身近で一般的な種であり、現在でも本種のホッポー、ホッポー、という鳴き声が、フクロウ類の声を代表している。

【形態】

全長29cm、翼開長66～76cm、頭部および顔は一樣な濃灰褐色で、羽角はなく虹彩は黄色。上面は一樣な濃褐色で、下面は白色で濃褐色の太くて粗い縦斑がある。尾は淡褐色で濃褐色の太い横縞がある。幼鳥は色が淡い。



愛知県岡崎市, 2015年7月5日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に平野部から丘陵地および山間部の林に生息し、繁殖する。

【国内の分布】

ほぼ全国に分布し、九州以北では夏期に生息し、南西諸島では周年生息する。南西諸島のものは、亜種リュウキュウアオバズク *N. s. totogo* に区分される。その他に、北海道などで亜種チョウセンアオバズク *N. s. macroptera* の迷行的な記録がある。

【世界の分布】

インド、ヒマラヤ、東南アジア、中国東部、朝鮮半島、ウスリー、日本で繁殖し、北方のものは冬期に南下する。

【生息地の環境／生態的特性】

4月下旬から5月上旬に渡来して、主に社寺林などの樹洞で繁殖する。日没後から夜間に、ホッポー、ホッポー、ホッポーと繰り返して鳴く。主な餌である甲虫、セミ、ガなどの昆虫類を空中や樹上、地上などで捕食する。秋の渡りは遅めで、多くは10月中旬から11月上旬頃に南方へ渡る。

【現在の生息状況／減少の要因】

1990年代半ばまでは、名古屋市内を含む平野部の都市周辺でも繁殖例は少なくなかった。現在も平野部で繁殖している例はあるが、極めて稀になっている。丘陵部や山間部での確認数も大きく減少しており、愛知県鳥類生息調査地点では1999年以降繁殖期の記録は皆無となっている。減少の最大の要因は夜間の人工光の蔓延により、餌となる昆虫類が消失していることがあげられる。現在も繁殖している環境は、夜間照明の少ない場所に限られている。

【保全上の留意点】

紫外線を出さないLEDの光源に昆虫が全く集まらない訳ではないが、白熱灯、水銀灯、蛍光灯、ナトリウム灯、メタルハライドなどと比較すればかなり少なくなる。既存の光源の多くは国内ですでに製造禁止、あるいは近い将来製造や輸出入が禁止となるが、特に野外の代替光源は最も昆虫の集まりにくいLEDを採用するべきである。

【特記事項】

近い将来、野外照明の大半が紫外線を出さなくなった場合、夜の野外は昆虫類をはじめ生息する生物の多くにとって、何十年か前の光環境に近くなることが期待される。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.97. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* (Linnaeus)

【選定理由】

1970年代以前の明確な繁殖記録が残されておらず、正式な繁殖記録は1995～98年、豊田市旭町での1箇所のみであった。その後2014年から松枯れの林でごく少数の繁殖が確認されているが、県内に僅かに残る成熟した松林の大半が枯れてしまえば、再び県内での繁殖が消滅する危機となる。現在県内では巣箱の設置で少しずつ効果は得られているが、安定するまでには至っていない。

【形態】

全長30cm。頭部は黒褐色、体は光沢のある青緑色で嘴と足は赤く、体色は雄の方が雌よりやや鮮やかである。幼鳥は嘴の赤が不鮮明で黒色の部分があり、羽の光沢も少ない。



愛知県豊田市, 2016年7月11日, 小林 学 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

西三河や東三河の山地に飛来するが、繁殖確認数はごく少ない。架設した巣箱による繁殖も、少しであるが成功するようになった。

【国内の分布】

夏鳥として本州、四国、九州などに飛来するが、西南諸島や北海道では希。

【世界の分布】

ロシア沿海地方、サハリン、中国東部および南部、朝鮮半島、日本、東南アジア、ニューギニアで繁殖する。北方で繁殖するものは、冬期南方に渡る。

【生息地の環境／生態的特性】

中部地方における繁殖環境は山間部の広葉樹林や針広混交林であり、営巣は社寺林の老齢木が主であった。1990年頃より河川やダムの橋のトラスで繁殖する例が見られるようになり、2014年からは枯れ松での営巣が確認されている。餌は主に昆虫で、飛びながら捕食する。通常は止まっている枝から飛び出して捕食するが、タ方ツバメのように上空を飛び廻りながら捕食することもある。声に特徴があり、ゲッ、ゲッ、あるいはゲゲーゲーゲー、などと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録が残されている1970年代以降では、新城市や豊田市、旧津具村などで、繁殖期やその前後の生息記録は何例かあるが、営巣が確認されたのは豊田市のダムの記録だけであった。近年松枯れ林にあるアオゲラの古巣で繁殖するようになり、県内では複数のペアが繁殖していると推測されるが、同一場所で継続して営巣している例はほとんど確認されていない。県内のアカマツ林は松枯れによる消滅が続いており、現在では末期的な状態にあることから、このまま何の手も施さなければ、近い将来本種の繁殖環境が消滅することは容易に推測される。

【保全上の留意点】

広島県や岡山県では電柱が木からコンクリートに替わる時に、木の電柱に穿たれたアオアカゲラの古巣で繁殖していたブッポウソウのため、巣箱の設置を実施して大きな効果が得られている。愛知県においては松枯れ木に代わる営巣場所として、2013年より巣箱の設置を実施している。

【特記事項】

小型の野鳥にも装着可能なジオロケータ（小型軽量で毎日の明暗を記憶する装置。再捕獲後の解析で装着された鳥がいつ、地球上のどの位置にいたかを解明することが可能となる）の装着により、広島で繁殖する本種がボルネオ島で越冬していることが解明されている（飯田知彦、私信）。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.109. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

オオセツカ *Locustella pryeri* (Seebohm)

【選定理由】

日本に分布する亜種の繁殖地は関東以北の本州にあり、極めて限られていて国の絶滅危惧 I B 類に指定されている。県内の生息地は沿岸部の干拓地や埋立地、河川敷などに広がるヨシ原で、冬期や渡りの季節に確認されているが、数は極めて少ない。以前の愛知県はこの種の越冬地として、あるいは繁殖地にもなり得る環境を有していたが、県内での繁殖記録はない。現在の県内には越冬が可能な環境もほとんど消失しており、近年越冬や通過をする個体の記録もごく希になっている。

【形態】

全長 13cm。雌雄同色で、上面は茶褐色、背に黒褐色の太い縦斑がある。頭上にも細かい縦斑がある。眉斑は白くて細い。尾は長く、くさび型で褐色。ヨシの茎などに、体を立て、尾を下げて止まる。



青森県, 2016年6月17日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

数少ない冬鳥として渡来しており、沿岸部のヨシ原などに生息する。

【国内の分布】

東北地方及び関東地方で繁殖するが局地的である。冬期には、本州中南部から四国でも記録がある。

【世界の分布】

ウスリー、中国東北部、日本で繁殖し、中国中部や国内で越冬する。ロシア、中国と日本に分布する2亜種が知られる。

【生息地の環境／生態的特性】

冬期に海岸近くの湿地や埋立地のヨシ原などに生息するが、草の中に潜行しているためほとんど目にする機会はない。繁殖地では、ジュークク、キュルルル・・・と囀りながら飛翔する。

【現在の生息状況／減少の要因】

広いヨシ原に生息し地鳴きの声が小さいために、標識調査等で捕獲されなければ野外で確認することはかなり困難な種である。県内の生息状況は必ずしも明らかではないが、本種の繁殖分布から、地理的には県内沿岸部は越冬地として適した位置にあると推測される。1980年代前半までは伊勢湾北部の干拓地や河口で、1990年には田原市東部の埋立地、2000年代までは矢作川河口周辺の埋立地、2018年には田原市4区の埋立地で記録がある。近年確認の機会がかなり希になっている要因は、県内の干拓地や埋立地から面積の広いヨシ原の環境が消失していることによる。

【保全上の留意点】

面積の広い湿地やヨシ原の環境は、愛知県に生息する絶滅危惧種を含む野鳥や、その他多くの生物には不可欠な環境である。これらの生物を絶滅から救うためには、埋立地や干拓地に存在する遊休地に、かつて愛知県に存在していた湿地の環境を復元することが急務である。

【特記事項】

ヨシの仲間には、オギなどよく似た種が多いが、野鳥が最も多く生息するのは、浅い水中や湿地に生えるヨシである。アシ(葦)はヨシの古い呼び名であり、「悪し」を「良し・吉」に変えたものである。

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.217. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

トモエガモ *Anas formosa* Georgi

【選定理由】

東アジア特産の希少種で、河川や内陸の池沼に飛来して越冬する。国内では日本海側に多い傾向があるが、愛知県は太平洋側で最も飛来数の多い県であったと思われる。かつて尾張地域の河川下流域や河口部では、年によって数千羽から数万羽の大群が見られたこともある。その後徐々に減少して、2000年代の半ば以降は県内全域で100羽以上の個体を確認することも困難となっている。

【形態】

全長40cmの小型のカモ。雄は顔に黄白色と光沢のある緑色からなる巴型の模様があり、側胸に白い縦線がある。肩羽は細長く伸び、脇にまで達する。雌は、全身が灰褐色で嘴基部に丸い斑があり、喉から頬にかけて白色部がある。



愛知県岡崎市, 2013年1月6日, 浅井利明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬鳥として主に河川の下流部、平野部や丘陵部の池沼などに生息するが、山間部の川や海上でもみられることもある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬、壱岐、八丈島、小笠原諸島父島などでも記録があるが、日本海側で多く、そのほかの地域では少ない傾向がある。

【世界の分布】

東アジア特産種で、シベリア極東部で繁殖し、中国東部、朝鮮半島、日本で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主に大きな河川の下流部や池沼に生息するが、少数が山間部の河川でオンドリの群れに混じることもある。主に植物食でドングリや草の種子を好むが、水棲の小動物なども食べる。飛来数が多い年は大規模な群れになる傾向があるが、大規模な越冬群の渡来地は局所的である。警戒心が強く捕食者や人による攪乱の影響を受けやすいことから、同一シーズンの中でも個体数は安定していない。

【現在の生息状況／減少の要因】

渡来数の年による変動が大きな種であり、かつて多く飛来した年には木曾川下流域で2~3万羽、愛知池で5千羽という記録もあったが、飛来数の多かった尾張地域でも、近年は100羽の群れを見ることも困難になっている。県内各地の小規模飛来地でも、年による飛来頻度や飛来数にばらつきはあるものの、県内の総飛来数は減少傾向が続いている。減少の要因は明らかでないが、主な繁殖地であるシベリアや国内の主要な越冬地でも、個体数の減少が報告されている。

【保全上の留意点】

本種に限らず警戒心の強いカモ類や、その他の水鳥の生息環境を保全するためには、河川であれば主な生息範囲である左右どちらかの岸边、池沼であれば主な生息部分を中心に池沼の岸边の半分近くを立ち入り禁止にした形の設計をするべきである。水鳥をはじめ野生生物の多くは常に人の視線を警戒しているので、川の両岸や池沼の全周から視線を感じる場合は、安心して生息することができない。近年は河川の管理や公園の池などを整備する場合、市民の利用と共に野生生物との共存を目的とする施策も多くなっているが、より多くの野生生物を誘致するためには、野生生物の視点を考慮した施策を実施することが重要である。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.68-69. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

シノリガモ *Histrionicus histrionicus* (Linnaeus)

【選定理由】

主に渥美半島の太平洋沿岸で越冬し、特に岩礁の多い海域を好んで生息するが、県内における生息数は少ない。外洋に面した岩礁のある環境は限られており、越冬期の生息場所は局地的である。

【形態】

全長 38～45cm、翼開長 63～69cm の小型の海ガモ。雄は、頭から上胸および背が青灰色で、嘴基部から目先・頭頂に至る三日月型の白色斑が目立ち、耳部に円形と縦線形の白色斑、胸と背に明瞭な白色帯があり、肩羽の後側頭と脇は赤栗色がある。雌は、全身が黒褐色で、目先の上下と耳部に白斑がある。尾は長めで先端が尖る。



愛知県田原市, 2012年12月24日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期主に渥美半島の外海側に生息し、希に内湾でも見られる。

【国内の分布】

北海道および東北地方で繁殖し、北海道、本州中部以北および九州北部で越冬する。

【世界の分布】

シベリア東部、カムチャッカ、アラスカから北アメリカ西海岸北部と、北千島、グリーンランド南部、アイスランド、アメリカ東北部沿岸で繁殖し、ほぼ同じかやや南方の地域で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主な生息場所は外海に面した海岸で、岩礁のある環境を好む。通常は数羽から数十羽程度の小群で生息し、休息する場合も群れで岩礁の上にいることが多い。以前は内湾で数羽の小群が見られたこともあるが、通常は内湾で複数が観察されることは希で、内湾ではスズガモなどの群れの中や、群れの周辺に単独で見られることが普通である。また、渡りの季節に単独で内湾の奥へ移動する個体を観察したこともある。外洋では群れで岩礁周辺の水面に浮かびながら盛んに潜って採餌し、甲殻類、貝類、ウニなどを捕食するとされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

田原市の高松一色や越戸、日出が生息地として知られている。国内では太平洋側の越冬地として愛知県がその南限近くにあたるため、本来愛知県ではそれ程個体数の多い種ではない。生息数は渥美半島の外海沿岸全体で 30 羽に満たない場合が多いが、時には 1 箇所でも 50 羽を超える群れが確認されることもある。確認例は少ないが、内湾で見られる場合は岩礁でなく、砂地の海岸で見られることもある。減少の要因として、愛知県は越冬分布の南限近くに位置することで温暖化などの影響が大きいことも考えられるが、渥美半島の外海側では岩礁部への人の立ち入りの影響も考えられる。

【保全上の留意点】

具体的な保全対策はないが、岩礁に依存して生息する生物の存在を周知することは大切である。

【特記事項】

田原市日出で拾得された個体を解剖し調査したところ、主にワレカラ（甲殻類）を数多く摂食していた（武田芳男、私信）。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.79. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

クロツラヘラサギ *Platalea minor* Temminck et Schlegel

【選定理由】

過去の記録では1978年～1986年と1995年～2000年など、飛来が途絶えたと思われる程記録のない期間もあったが、それ以外では毎年あるいは数年に1度の頻度で飛来している。古くは伊勢湾の奥にある鍋田での記録もあるが、その後の記録の大半は田原市、豊橋市、西尾市の三河湾沿岸部に集中している。大型の世界的希少種であるが、県内における生息可能な環境は激減している。

【形態】

全長約77cm。雌雄同色、嘴は黒色で長く先端はヘラ形、眼の周りを含む顔の部分が黒く裸出しており、眼や顔から嘴の先まで全て黒く見える。体は白色で脚は黒色であるが、夏羽は後頭に冠羽があり、冠羽と喉や胸は金色を帯びる。冬羽は白色で、冠羽は短くなる。幼鳥や若鳥は冬羽に似るが嘴に淡い肉色味があり、風切の先端と外側初列風切は黒い。



愛知県西尾市, 2019年4月21日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

伊勢・三河湾沿岸にある干潟と干拓地の水路や池沼などに飛来していたが、近年の飛来は田原市、豊橋市、西尾市にある一部の干潟と水路や池に限られている。

【国内の分布】

北海道から沖縄まで確認記録はあるが、安定して飛来しているのは九州以南である。

【世界の分布】

韓国および中国東部の限られた地域で繁殖し、日本、台湾、中国南部、ベトナム、フィリピンなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

体が大型であるため、餌となる魚や甲殻類などが豊富な環境でなければ生息できない。干潟などの浅い水の中で、ヘラ状の嘴を開け左右に振りながら獲物を捕獲する。この方法でどの程度効率的な漁ができるのかは不明であるが、ある程度の餌密度がなければ長期の生息は困難と思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

毎年から数年に1度、主に単独で飛来する。通過だけでなく、越夏や越冬の季節に長期滞在する例も多い。主な生息環境である干潟は、栄養塩類不足などの要因により、餌資源が減少している。干拓地内の水面は埋め立てや太陽光発電、風力発電施設などの設置により利用できなくなっている。

【保全上の留意点】

本種やその他の水鳥のみならず、貧酸素や貧栄養化などによる海や干潟の環境悪化が、漁業者や消費者である市民の生活にも直接影響を及ぼしていることを認識することが重要である。

【特記事項】

日本野鳥の会から発表された冬期一斉調査結果では、2018年1月19～21日に世界で3,941羽、日本で508羽が確認されている（日本クロツラヘラサギネットワーク・日本野鳥の会, 2018）。この報告には、国内の調査における1990年以降の増加傾向が示されている。

【引用文献】

日本クロツラヘラサギネットワーク・日本野鳥の会, 2018. 世界一斉個体数調査（2018年）. <https://www.wbsj.org/activity/conservation/endangered-species/bfs-pj/bfs-census2018/>（アクセス年月日：2019年9月30日）

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.181. 平凡社, 東京.

（高橋伸夫）

バン *Gallinula chloropus* (Linnaeus)

【選定理由】

以前は沿岸部・平野部・丘陵地の水田や水路・池沼、公園の水辺などにごく普通に生息する水鳥であった。クイナ科の中では最も身近な種であり、多くが夏鳥でありながら冬期は狩猟対象種に指定されている。近年繁殖期の生息数が激減していることから、繁殖個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。越冬個体群についても生息数がかなり減少していることで、準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 32cm。雌雄同色で頭から下面は青紫味を帯びた黒色、上面は緑色を帯びた褐色で嘴の先は黄色。嘴の基部と額は赤色で、脇の上部および下尾筒に白色部がある。脚は黄色で指が長く、脚の基部には赤色部がある。冬羽は額の赤色部分が小さく、鮮明でない。ヒナの産毛は黒色で、頭の皮膚と嘴の半分が赤い。若鳥は嘴全体が橙色味を帯びて、嘴や額に赤色部がなく、体は褐色味を帯びる。



愛知県安城市, 2015年6月6日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

かつては県内平野部と半島部を含む丘陵地の水辺に広く分布しており、沿岸部に近い場所ほど生息数が多い傾向があった。主に夏鳥であるが県の南部では越冬する個体もいる。

【国内の分布】

国内全域に生息して繁殖するが、北部では数が少ない。本州中部以北では主に夏鳥であるがそれより南では留鳥である。関東や中部の太平洋沿岸では、越冬する個体もいる。

【世界の分布】

オセアニアを除く全世界の熱帯から温帯に生息し、緯度の高い場所で繁殖するものは冬期に暖地へ移動する。

【生息地の環境／生態的特性】

主に平地や沿岸部、丘陵地の池沼、水路、河川のヨシ原や水田などに生息して繁殖する。ヨシやガマなどの水草に、茎や葉などを絡めて巣を作る。食性は昆虫や小魚、両生類などの他に、水草などの植物も食べる雑食である。長い足指を使って水草の上を歩いたり、水面を泳いで移動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

沿岸部の水田や水路、ヨシ原などにごく普通に生息して繁殖する水鳥であったが、近年は生息数が激減している。減少の要因として、餌場である水田が隔年で麦と大豆を転作するようになり、餌となる水生生物が減少したことが考えられる。また、同様に水路や池沼で繁殖するカイツブリにも大きな減少傾向が見られることから、アカミミガメやオオクチバスなどの移入動物によるヒナの捕食も重大な要因であると考えられる。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立池の遊休部分に、池沼の環境を復元することが理想である。都市公園の池や都市部の遊水池でも、繁殖期にある程度の水量と餌生物の確保ができれば生息は可能である。

【特記事項】

本種やヒクイナ、ヨシゴイなどの希少な水鳥に見られる現象として、最後に残るのは住宅地等の遊水地や都市公園の池などであるが、水鳥に配慮のない管理により消失することが大半である。

【関連文献】

叶内拓也・安部直哉・上田秀雄, 1998. 山溪ハンディ図鑑 7 日本の野鳥, pp.210-211. 山と溪谷社, 東京.

(高橋伸夫)

ジュウイチ *Hierococyx hyperythrus* (Gould)

【選定理由】

主に東三河の山地に飛来して、コルリやコマドリ、オオルリなどの巣に托卵して繁殖するが、近年は繁殖地でも確認数が少なくなっている。春の渡りでは繁殖地以外でも鳴き声が聞かれるが、その確認機会も減っている。愛知県鳥類生息調査地点である旧鳳来町の「県民の森」では、1977年までは標高が300m程度以下の低地で繁殖期の記録があり、この個体群はオオルリに托卵していたものと推測される。本種の生息する標高は全体に高くなっており、生息数は減少している。

【形態】

全長 32cm。頭部から背は灰黒色で下面は淡い赤褐色、後頸に白斑がある。尾は灰色で先端に淡朱色の斑がありその内側に太く黒い横斑がある。眼の周りに黄色の縁取りがあり、脚は黄色い。幼鳥は下面が白く黒褐色の縦斑がある。



石川県, 2000年5月21日, 石井照昭 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏に三河地方の山間部にごく少数が生息する。春秋の渡りでは、平野部でも観察されることがある。

【国内の分布】

夏期に北海道、本州、四国、九州に飛来するが数は少ない。

【世界の分布】

ウスリー、中国東北部から南部、朝鮮半島、ネパール、東南アジアで繁殖し、東南アジアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

広葉樹林や針広混交林に生息し、コルリ、オオルリ、コマドリなどに託卵して繁殖する夏鳥で、大きな声でジュウイチーッ、ジュウイチーッと繰り返し鳴き、夜間も鳴く。県内における托卵先のコマドリは標高1,000m程度以上、コルリは700m程度以上に生息することで、本種の多くは同じ標高に生息する。標高600mの「闇葎」と300m未満の「県民の森」にはコルリとコマドリは生息しておらず、ここに生息する本種の托卵相手は低地にも分布するオオルリと推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

4月下旬頃から飛来して10月には飛去する夏鳥であるが、現在県内で繁殖するコマドリは激減して1ペア程度と思われるため、県内東部の標高1000m程度以上の山塊と、その裾にある標高700m程度以上の尾根筋に生息する本種の多くは、コルリに托卵しているものと推測される。愛知県鳥類生息調査地点でコマドリやコルリが全く繁殖していない「県民の森」でも本種は繁殖期に生息していたが、2006年以降の記録はない。同じく「闇葎」では1965年にオオルリへの託卵が確認されており、その後一時期生息が途絶えていたが、近年再び繁殖期の生息が観察されている。

【保全上の留意点】

托卵先であるコマドリ、コルリが減少しているので、その生息環境を保全することが重要である。

【特記事項】

県内のコマドリやコルリは、標高700~1,000mの山地にある原生林や二次林の、林床に低い笹が生える環境の地上で営巣する。オオルリは標高が低く、針葉樹の多い谷間の崖でも営巣することが多い。以上のことから、県内に生息する本種には托卵相手が異なる、2系統の個体群が生息していることも考えられるが、近年は繁殖期に標高の低い場所での確認例はかなり希となっている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.38. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ツツドリ *Cuculus optatus* Gould

【選定理由】

托卵相手であるセンダイムシクイの繁殖期から推測すると、本種の繁殖期も5月中旬以降と思われる。センダイムシクイが山麓近くでも繁殖期に多く生息するようになったのは2000年近くになってからであるが、本種は標高の高い場所で2005年頃から生息数が減少しており、それ以前より山地全体から本種の声聞く頻度は減少している。

【形態】

全長 32cm。頭部から上面および顔から胸にかけて濃い灰色で、腹から下尾筒にかけては白色で黒い横縞があり、尾は黒褐色で白斑がある。眼の周りに黄色のアイリングがあり、虹彩は橙色で脚は黄色い。雌では赤色型があり、頭部から上面および顔にかけて赤褐色で黒褐色の斑がある。幼羽は、頭部から上面および顔が黒褐色で、各羽の先端に汚白色の白斑があり、虹彩は暗色。



愛知県名古屋市長古屋市, 2012年9月6日, 鈴木恒則 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に主として三河地方の山地に少数が飛来して繁殖する。春秋の渡りでは、市街地や半島、河川敷、沿岸部などでも見られることがある。

【国内の分布】

夏期に九州以北に飛来して繁殖する。

【世界の分布】

西シベリアからカムチャツカ、サハリン、オホーツク海沿岸から中国東南部、台湾、マレー半島、ジャワ、ボルネオ北部で繁殖し、東南アジア、ニューギニア、ニュージーランド北部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

4月中下旬に飛来して8月から10月にかけて飛去する。繁殖期に生息記録があるのは、主に三河山地の頂上付近から山麓近くまでの範囲である。主にセンダイムシクイに託卵して繁殖しており、雄は竹筒を叩くような低い声でポポッ、ポポッ、ポポッと鳴き、雌は早口でピィピィピィ・・・と鳴く。カッコウの仲間では大きさもカッコウに似るが、カッコウより少し小さく色が濃い。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年は平野部に近い山でも繁殖期に声を聞くようになってはいるが、本来生息数の多い種ではなく、県内全体では繁殖期にその声を聞く頻度は減少している。減少の要因は不明であるが、托卵相手のセンダイムシクイの数には変化がないか、逆に標高の低い部分では増加している。

【保全上の留意点】

落葉樹林や針広混交林を好むので、林業生産に向かない地形や場所にある人工林は、多様性のある本来の植生に復元していくべきである。

【特記事項】

カッコウの仲間4種中、春の渡りは、本種が4月中・下旬で最も早く飛来する。ジュウイチは4月下旬から5月、カッコウが5月上・中旬、最も遅いのがホトトギスの5月中・下旬で、本種よりおよそ1ヶ月遅く飛来する。春の飛来時期の違いは托卵相手の営巣時期の違いが考えられ、センダイムシクイは本種より少し前に渡来し、コマドリやコルリ、オオルリもジュウイチより少し前に飛来する。オオヨシキリもカッコウより早く飛来し、モズは1回目の繁殖中である。ウグイスの場合、ホトトギスが飛来する頃には1回目の繁殖が終わりに近い。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.41. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

カッコウ *Cuculus canorus* Linnaeus

【選定理由】

愛知県では主に 1,000m 程度以上の標高にある開けた環境を好んで生息しているが、平野部では過去に尾張や西三河の一部でも繁殖していた。近年は平野部での生息がほとんどなくなり、高原での生息数もかなり少数であることから、県内の繁殖個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。通過個体群も減少していることから、準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長 35cm。頭から胸及び背から上尾筒は淡い灰青色、翼と尾は灰青色味を帯びた黒褐色。腹は白く黒褐色の細い横斑があり、眼と口元は黄色。幼鳥は全体に褐色味があり、上面の各羽に羽縁がある。近縁のツツドリやホトトギスによく似ているが、体色が淡く腹の横斑が細い。比較的目立つ場所に止まり、翼を下げ尾を上げて轉る。



長野県, 2014年6月21日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

渡りの季節は県内全域で確認されるが、繁殖期に観察されている場所は西三河および東三河の標高 600m 程度より高い場所にある比較的開けた環境と、尾張西部の木曾川河口周辺やみよし市周辺の境川沿い、岡崎市周辺の矢作川沿いなどである。

【国内の分布】

ほぼ全国で繁殖する。本州中部以南では主に 1,000m 程度以上の標高で繁殖しており、それより北では平地でも繁殖している。

【世界の分布】

ユーラシア大陸の北部や南部を除いた部分とアフリカ大陸の北端で繁殖し、冬期はアジア南部やアフリカ南部などで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

カッコウの仲間は自分で抱卵・育雛をせず、他の種の鳥に托卵して繁殖する。県内で標高の高い場所に生息するものは主にモズやホオジロに托卵しているようであるが、平野部で繁殖するものはオオヨシキリに托卵している。生息環境も、標高の高い場所では牧場のように開けた草地と疎林のある環境が多く、平地ではヨシ原と疎林が混在する環境である。食性は主に昆虫食で、カッコウの仲間は特に、蛾の幼虫である毛虫を好むことが知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、繁殖期に平野部で生息する個体が減少し、現在ではほとんど観察されなくなった。要因として、オオヨシキリが繁殖できる広いヨシ原の減少や消滅が考えられる。標高の高い場所でも生息数は減少しており、要因として牧畜産業の衰退や、観光開発などによる生息環境の悪化が考えられる。

【保全上の留意点】

本種のような托卵性の種では、当該種だけの保全対策を考えても無意味である。被托卵種の生息環境が十分保全されていなければ逆効果であり、托卵種が増加することで被托卵種がさらに減少して、結果的に托卵種の絶滅につながってしまう。

【特記事項】

茶臼山の長野県側にある売木村では、モズの巣の中にある卵が全て本種のものであったという観察例がある（大内秀之,私信）。同じ場所で繁殖を始めたチゴモズは1年で姿を消している。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.42. 文一総合出版, 東京.

（高橋伸夫）

イカルチドリ *Charadrius placidus* Gray et Gray

【選定理由】

主に河川の中下流域にある河川敷の砂礫地に生息して繁殖するが、近年繁殖期の個体数は減少傾向にある。県内の河川はダムや堰により土砂の供給が大きく減少している上に、河川敷の公園化や堤防道路の整備、河川敷の樹林化等により、河川の中下流域から環境の良い砂礫地が減少している。

【形態】

全長 19～21cm、翼開長 45cm。頭頂と上面、雨覆は灰褐色で、下面は白く胸に黒帯がある。眼先から頬にかけては黒褐色で、眼の回りは細くて黄色の縁取りがある。嘴は、小型のチドリ類としては細くて長めで、脚は淡黄色。飛翔時は、内側の初列風切基部から次列風切にかけて細い白帯が出る。静止時は、尾羽が初列風切の先端から突出する。冬羽や幼羽は、眼先から頬にかけての黒褐色が淡く、頭頂とのコントラストが不明瞭。



愛知県岡崎市, 2005年6月18日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

河川中下流域の砂礫地に生息し繁殖する。非繁殖期は河川下流域や沿岸部、平野部の水路、水の少ない池沼などでも見られる。

【国内の分布】

全国的に記録があるが、繁殖は本州と四国に限られている。

【世界の分布】

ウスリー地方、中国東部および北部、朝鮮半島で繁殖し、中国南部からインド北部で越冬する。2亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県では、繁殖期は主に河川中下流域の河原や中洲、および丘陵地の池畔などの砂礫地に生息する。砂礫地やまばらに草の生えた地上に浅いくぼみを作り、小石や枯草などを敷いて営巣する。非繁殖期は、河川中下流域、沿岸部や平野部の水路、丘陵地の調整池畔、水の抜かれた池沼などに、単独または小群で生息する。餌は主に動物質で昆虫類を多く捕食し、ピュイ、ピュイと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

非繁殖期を含め場所によっては減少傾向がみられない箇所はあるものの、県内全体では近年繁殖期の確認地域や確認数が減少している。また繁殖期の分布をみると、河川のより上流部や丘陵地の池などで繁殖する個体が激減し、河川のより下流部での記録が目立つようになっている。非繁殖期の記録にも同様の傾向が見られ、愛知県では全体に生息標高が低下していることが伺える。県内の河川ではダムや堰により土砂の供給量が減少しており、河原に生息する種の繁殖に影響を与えていることが考えられる。丘陵地の池については、都市化や開発などの影響が考えられる。

【保全上の留意点】

河川管理では河川敷の砂礫環境保全につとめ、区域を定めて人の干渉を排除するなど、この種を含む生物全体の生息環境を保全するための積極的な河川敷管理が必要である。

【特記事項】

平野部の河川から離れた場所にある、砂利を敷いた広い駐車場で繁殖した例がある。近くには幅数メートル程度の3面張り水路があるのみで、池などが全くない環境であった。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.114. 世界文化社, 東京.

（高橋伸夫）

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* Linnaeus

【選定理由】

愛知県鳥類生息調査の結果を見ると、県内では伊勢湾の鍋田と庄内川河口、西三河の矢作川河口、東三河では汐川河口の調査地点で記録がある。1970年代（当時庄内川河口は調査していないので0羽として）は合計で2,500羽程度以上の記録があるが、現在は最も生息数の多い庄内川河口を加えても200羽に満たない。1990年代までの伊勢・三河湾では埋立てが盛んで、調査地点以外の埋立地にはそれ以上の個体が生息・繁殖していたが、現在埋立地の生息・繁殖環境の大半は消失している。

【形態】

全長約17cm。雄の夏羽は頭頂が茶褐色で、上面、雨覆は灰褐色。前頭には黒帯があり、額と眉斑は白色。過眼線と胸側は黒色。喉から体下面は白色。雌は頭頂、過眼線、胸側が茶褐色。雄の冬羽や幼鳥は雌に似る。嘴は黒色。脚は青灰色。虹彩は暗褐色。



愛知県西尾市, 2008年5月11日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

干潟や沿岸部にはほぼ一年を通して生息しており、平野部にある河川や沿岸部の砂地、干拓地や埋立地の裸地などで繁殖する。

【国内の分布】

北海道から南西諸島で繁殖し、渡りを行うものもいる。

【世界の分布】

13亜種が、全世界の温帯から熱帯地域に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部を流れる河川の河原や河口部の干潟周辺、海岸などにできた砂地が本来の営巣環境である。干拓地や埋立地にある人工的な裸地や、海岸堤防のコンクリート上での営巣例もあるが、それらのいずれもが継続していない。繁殖期以外は餌場である干潟を中心に生息し、満潮になると堤防の上などで休息する。留鳥とされているが季節によって生息数が大きく変動することから、渡りの規模は不明であるものの、季節による移動を行っているものと推測される。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在県内に生息する個体の総数は200羽程度以下であり、1970年代に生息していた数の5%程度にまで減少していることが推測される。減少の要因は開発による河川や海岸の環境破壊で、営巣場所であった河岸の砂地環境は河口堰や高水敷の工事などにより激減、内湾の砂浜は埋め立てや護岸工事でその大半が消失した。干拓地内に存在する裸地は不安定であり、埋立地からも営巣可能な裸地が消失している。

【保全上の留意点】

愛知県では、干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境や砂地環境を復元する努力が必要である。内湾に存在する砂浜や、河川に残る砂地環境の保全につとめ、必要に応じて人の立ち入りを制限するなど、本種を含む生態系を保全するための積極的な管理が必要である。

【特記事項】

「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」。今から300年以上前の1680年頃に、俳聖松尾芭蕉が現在の名古屋市南東部で夜の干潟を詠んだ句である。この時の千鳥とは、夜のアユチ潟（鮎稚潟は現在の名古屋市南部全域にあたる広大な干潟で、愛知県の語源）に群れて鳴く無数のシギやチドリの総称であり、その中には当然何万羽あるいは何十万羽もの本種が含まれていたものと思われる。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.114. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

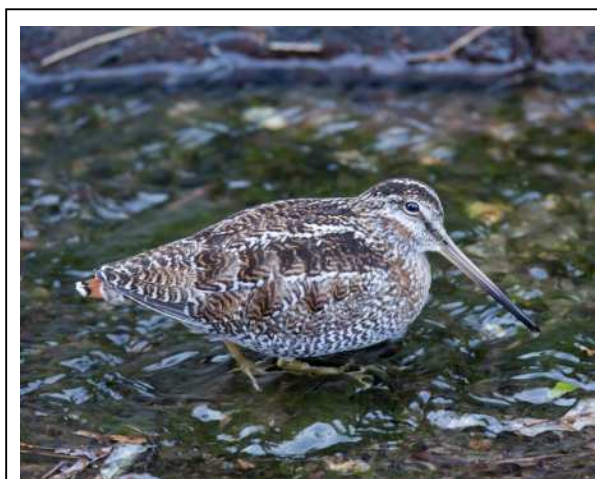
アオシギ *Gallinago solitaria* Hodgson

【選定理由】

10月下旬から11月上旬に飛来して越冬し、4月下旬から5月上旬には繁殖地へ渡去する。かつて県内では標高の高い場所で越冬する冬鳥と思われていたが、1990年頃から山麓に近い山地でも越冬していることが判明して以来、県内の観察記録が増加した。英名 **Solitary Snipe** の通り、渡去直前の番い形成期以外はほとんど単独で行動しており、山間部の広い範囲に1羽程度の生息密度であるために、県内の生息数はかなり少ないものと推測される。人が立ち入らない水路や湿地に生息するため、交通量の多い道路や施設ができるとその周辺から姿を消してしまう。

【形態】

全長 29～31cm、翼開長 51～56cm。タンシギ属の中では体が最も大きい。頭中央線は白色で上面に黒褐色と赤褐色の斑が複雑にあり、肩羽に白斑がある。胸はオリーブ褐色で細かい横斑が密にあり、下面は白色で脇に褐色の太い横斑がある。



愛知県新城市, 2019年2月2日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に山間部の溪流や水路、水田などに生息するが、生息数はごく少ない。

【国内の分布】

冬期に生息し全国的に記録があるが本州中部以南では少ない。

【世界の分布】

シベリア東部および中部、ヒマラヤ北部、サハリンで繁殖し、冬期は中国南部、インドに生息し、2亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では標高1,000mに近い山地から、標高の低い里山までに飛来して越冬する。標高の高い場所では溪流の周辺や草原の水路、低い場所では里山環境の水路や水田などに生息する。警戒心が非常に強く、人の姿があるとすぐに飛び去るため、よほど注意をしていないと見逃すことが多い。コンクリートの三面張りでも、河床に土砂や枯草などが溜まった環境があれば生息する。脚を伸縮して体を上下させながら、カゲロウの幼虫などの水棲昆虫や、巻貝などを捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息密度が低いうえに警戒心が強いので、姿を見ることが極めて困難な種である。猿投山の周辺から本宮山までの範囲にある三河高原やその周辺では比較的記録が多いが、この広い範囲でもひと冬に確認できるのは5羽程度以下である。ほとんど人が立ち入らない場所に生息するので、こうした場所に道路の建設や整備が行われたり、何らかの開発行為が行われると生息できなくなる。

【保全上の留意点】

生態に詳しい者でなければ姿を観察することも困難な種であり、その存在が知られることもなく姿を消している例は少なくないと思われる。山間部で開発行為が行われる場合は、こうした種の生態に詳しい識者の意見を採用して、より環境に優しい工事を行うべきである。

【特記事項】

県内では山地やその山麓で越冬しており、尾張東部丘陵や知多半島、渥美半島周辺の丘陵地で越冬期の確認記録は無いが、一度だけではあるが尾張東部丘陵の岐阜県側で確認記録があることから、県内の丘陵地でも越冬の可能性は否定できない。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.140. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

コシャクシギ *Numenius minutus* Gould

【選定理由】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸部の干拓地にある水田や畑地、草生地などに飛来する。1970年代はほぼ毎年のように、1～数羽の記録があり、鍋田干拓地や汐川干潟周辺での記録も多かった。近年鍋田干拓地ではシギ・チドリの生息環境が消失しており、汐川干潟周辺の干拓地からも淡水系のシギ・チドリが生息できる環境が減少している。現在では矢作川河口周辺への飛来が中心となっているが、西三河の干拓地では作付けを米の他に、隔年で麦・大豆の転作を実施しており、水田の環境が大きく変化している。

【形態】

全長 29～32cm、翼開長 68～71cm。上面は黄褐色または褐色で、暗褐色の軸斑がある。頭中央線は淡黄褐色、両側の頭側線は黒褐色、黄褐色の眉斑がある。過眼線は暗褐色であるが、目先の部分是不明瞭で嘴まで至らない。腰から上尾筒にかけては黒褐色の横斑があり、飛翔時に一様に見える。チュウシヤクシギと比較して、嘴はかなり細く、かなり短い。



愛知県西尾市, 2015年4月23日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで、伊勢・三河湾沿岸の農耕地や草地に飛来する。

【国内の分布】

春秋の渡りで少数が国内各地に飛来するが、九州地方での記録が比較的多い。

【世界の分布】

シベリア東部で繁殖し、東部インドネシア、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

飛来環境は大半が沿岸部の干拓地である。他のシギ類のように湿潤な場所に飛来することもあるが、比較的乾燥した刈田や開けた畑、草地などにも飛来して、地面を移動しながら主に昆虫を捕食する。春は4月から5月、秋は主に8月から10月に1～数羽で飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内においては、鍋田周辺、矢作川河口周辺、汐川干潟周辺の干拓地を中心に飛来記録があるが、近年はいずれの干拓地でも耕地が商工業用地などへ転用され、特に東日本大震災以降は太陽光発電パネルの設置などによる環境の変化が著しい。

【保全上の留意点】

主な生息地である県内沿岸部の干拓地から農耕地が少しずつ消失してきたが、近年は特に環境の変化が著しい。県内沿岸部の農地は、国内の他県や世界各地と比較しても、気象条件や市場の近さなど、農業を行う上でかなり立地条件に優れていることを再認識するべきである。県内の農業を振興することで、ここに生息する野生生物との共存も考えていくべきである。

【特記事項】

本種は干潟や淡水湿地にも飛来するが、シギの仲間の中では比較的乾燥した環境も好む。環境省が実施しているシギ・チドリの全国調査では調査されない場所にも飛来する可能性があり、沿岸部に位置する地方空港の草地なども、この種の好む環境と思われる。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.137. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ダイシャクシギ *Numenius arquata* (Linnaeus)

【選定理由】

広い干潟に依存する大型シギであるが、県内の生息数は少ない。愛知県鳥類生息調査によると1993年までは庄内川河口で10羽以上の越冬記録があるが、2010年以降はその数が半減している。汐川河口では2005年10月に最大8羽の記録があるが、以降は毎年1～数羽が越冬しているに過ぎない。

【形態】

全長50～60cm、翼開長80～100cm。上面は淡褐色で、頭頂から背、肩羽、雨覆に暗褐色の斑があり、雨覆の羽縁に淡黄褐色の小斑がならぶ。顔、頸、胸は淡褐色の地に暗褐色の縦斑があり、腹と下尾筒は白色。腰は白色で背までくいこみ、上尾筒と尾は淡褐色で黒褐色の斑がある。嘴はとても長く、大きく下に湾曲する。雄雌同色だが、雌の方が雄よりも大きい。



愛知県西尾市, 2018年1月11日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

県内には、春と秋の渡りの季節や冬期に伊勢・三河湾沿岸の広い干潟に飛来して生息する。

【国内の分布】

北海道から沖縄にかけて春と秋の渡り時期に飛来し、多くが越冬する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸の中北部で繁殖し、アフリカ、インド、東南アジアなどで越冬する。2亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

広い干潟に生息し、秋は7月の下旬頃から飛来して10～11月頃に最大数になるが、その後若干数を減らして越冬する。春は徐々に数を減らし、通常5月には全て渡去する。秋も春も渡りの季節に通過している個体も少なくないと思われるが、通常はいつも単独から数羽で見られることが多い。県内では特にカニ類を好んで捕食しているが、カニ類以外ではゴカイなども食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の主な生息地は、藤前・庄内川干潟、境川河口、矢作川河口、一色干潟、汐川干潟、伊川津干潟、三河湾の島嶼などに限られている。現在県内で最も生息数が多いのは藤前・庄内川干潟であるが生息数は2～5羽程度であり、他の地域では、多くてもそれぞれ1～数羽が飛来しているに過ぎない。減少の要因として、干潟に生息するカニやゴカイの量が少なくなったことが考えられる。干潟を歩きまわっても獲物の姿を見られる機会が減っていることが推測され、河口や干潟の水に濁りがなくなり、綺麗になったことは良いことと思われるが、透明になった要因が河川や下水処理場から海に供給されるべき栄養塩類等の減少であるとすれば本末転倒である。

【保全上の留意点】

現存する干潟を保全するとともに、満潮時に生息できる後背地の整備を行い、干潟に生息する生物の生態系を回復することが重要である。河川から供給される栄養塩類の減少が指摘されており、試験的に終末処理場の管理運転が実施され始めたが、さらに研究が進められることで、豊かな海や干潟が復活することが望まれる。

【特記事項】

カニが好物で、捕食するときは干潟の穴に長く湾曲した嘴を差し込んで、中のカニを捕らえる。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.134-135. 世界文化社, 東京.

（高橋伸夫）

アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus)

【選定理由】

国内では比較的数の少ないシギであり、県内にも数の少ない旅鳥として飛来し、希に越冬する。比較的秋の渡りで観察例が多く、飛来する環境は伊勢・三河湾に面する河口、その周辺の干拓地や埋立地の水辺であるが、近年は干拓地や埋立地の中から淡水や汽水の湿地環境が消失している。

【形態】

全長 27～29cm、翼開長 59～66cm。夏羽は、顔、頸、胸にかけて暗褐色で明瞭な縦斑が密にあり上面は暗褐色、眉斑は不明瞭で目の周辺に白い縁取りがあり、嘴の基部と脚は鮮赤色。冬羽は、頭から上面および胸が灰褐色で、顔や頸などの縦斑は目立たない。幼羽は、背や雨覆の羽縁が黄褐色、眉斑は長めで目の後でも明瞭、嘴の基部と脚は橙赤色。次列風切と初列風切の一部が白色で、飛翔時は太い白帯に見える。上背と腰が白く、尾は白地に暗褐色の横斑がある。



愛知県刈谷市, 2015年11月1日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の河口や干拓地、埋立地などに飛来し、越冬例もある。

【国内の分布】

北海道東部で少数が繁殖し、春秋の渡りで全国に飛来するが、沖縄では普通に越冬する。

【世界の分布】

ヨーロッパ東部、中央アジア、中国東北部で繁殖し、ヨーロッパ沿岸部、アフリカ、中東、インド、東南アジアで越冬する。6亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟、干拓地の水田や水路、埋立地の水たまりなどに生息する。春の渡りは4～5月頃で、秋の渡りは8～10月である。通常1～数羽で生息し、湿地で昆虫、巻貝、カニ、ゴカイなどを食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

主な飛来地は、庄内川河口、境川河口、矢作川河口周辺、一色干潟周辺、汐川干潟周辺、伊川津干潟周辺などである。春は飛来しない年も多く、近年の飛来は全て単独である。秋は1～5羽の群れでみられるが、ほぼ毎年のように飛来する場所は限られている。減少の要因は生息環境の消失で、県内の埋立地には湿地の環境が全てなくなっており、干拓地の水田は隔年転作による乾燥化、池沼や湿地は太陽光パネルの設置などでシギやチドリが生息できる環境は激減している。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。また、シギ・チドリ類が多く生息していた地域では、水田の一部を借り受けて休耕田とするか、水田の一部の転作作物を麦・大豆でなく飼料米等にするこで、毎年水田の環境継続されるようにすることが必要である。また、水田の一部を冬期湛水することで、水棲生物や土壌生物の生息環境を保全することも大切である。

【特記事項】

国内でアカアシシギの越冬は沖縄と九州に多く、県内でも2013年の冬から2017年の冬まで最大5羽が毎年境川河口周辺で越冬しているが、地球温暖化の影響であるのかどうかは不明である。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.122. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

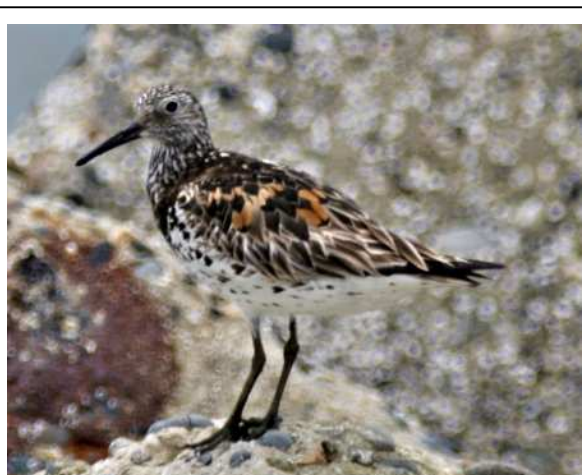
オバシギ *Calidris tenuirostris* (Horsfield)

【選定理由】

シベリアの東北部のみで繁殖し、インドから東南アジアやオーストラリアのみで越冬する極東の固有種である。近縁種のコオバシギに比べれば比較的数の多い種であるが、世界的にみれば個体数の少ない種であり、地球上での分布が狭いことで絶滅の危険が高くなっている。愛知県鳥類生息調査地点の中で現在も本種の観察記録があるのは「汐川河口」「矢作川河口」「庄内川河口」の3地点のみで、全て干潟の環境を含んでいる。県内の干潟では貧酸素の問題や、過去にはなかった窒素・リンの不足による貧栄養問題などが発生しており、餌となる干潟の生物が減少している。

【形態】

全長 26～28cm、翼開長 62～66cm。夏羽は上面が黒褐色で灰色の羽縁があり、肩羽は赤褐色。頭中央から頸にかけて灰色で細かい縦斑があり、下面は白く胸と脇に大きな黒色の斑がある。冬羽は、上面が一様な灰褐色で、頭から胸にかけて細かい縦斑があり、不明瞭な白い眉斑がある。幼羽は、上面が暗褐色で淡褐色の羽縁があり、胸に太くて明瞭な縦斑がある。嘴は黒く基部は太め、脚は暗緑色。飛行時は、腰が白く見える。



愛知県西尾市, 2008年7月13日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の干潟に生息する。飛来数は、春の成鳥に比べ秋の幼鳥の方が多。

【国内の分布】

北海道から沖縄にかけて、春と秋の渡り時期に渡来する。

【世界の分布】

シベリア東北部で繁殖し、インド、東南アジア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

春秋の渡りで伊勢・三河湾の干潟に飛来するが、満潮時には後背地である近隣の干拓地や埋立地で採餌や休息をする。干潟に依存して生息する種であり、海域から離れた場所に飛来することはきわめて希である。県内における内陸での記録は、愛知県鳥類生息調査地点の「鍋田」で1973年の秋まで、「木曾川玉ノ井」では1981年の春までに合計4例4羽だけであり、西三河野鳥の会の記録では1995年9月に、安城台地の水田で1群3羽の記録があるのみである。春は4月上旬から5月、秋は8月から10月干潟に飛来し、数羽から数十羽の群れで主に干潟でゴカイや貝類等を捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の主な飛来地として、藤前・庄内川河口干潟、一色干潟周辺、豊川河口周辺、汐川干潟、福江・伊川津周辺などがあげられる。過去の県内には他にも環境の良い大小の干潟が各所に存在しており、当時の正確な生息数は不明であるが、そうした干潟からは全て姿を消している。秋の渡りは幼鳥が大半を占めるが、現在の飛来数は県内全体で多い年でも30羽程度と推測される。

【特記事項】

標識調査の結果によると、県内に飛来する本種成鳥の越冬地はオーストラリアの東岸である。

【保全上の留意点】

残されている干潟や湿地を保全するとともに、漁業振興の観点からも、海や干潟の貧栄養問題について真剣に取り組むことが求められている。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.136. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

コオバシギ *Calidris canutus* (Linnaeus)

【選定理由】

国内でも生息数の少ない種であるが、過去には県内で春に 50 羽、秋に 20 羽程度の群れが確認されたこともある。しかし、現在の確認数は県内合計でいずれも 1～数羽である。春の渡りは成鳥で滞在期間も短く、気象条件などによりその飛来の頻度や数に変動が大きい、秋の渡りはその年生まれた幼鳥が主体なので、その数の減少は絶滅の危機を表しているといえる。

【形態】

全長 23～25cm、翼開長 57～61cm。夏羽の上面は黒褐色で背や肩羽に赤橙色の羽が混じり、顔および下面は一樣な赤橙色。冬羽は、上面が一樣な灰褐色で羽縁が白く、下面は白色で胸から脇かけて灰褐色の斑がある。幼羽は、冬羽に似るが上面の褐色味がやや強く、白い羽縁の内側に細い黒褐色帯がある。



愛知県西尾市, 2018年5月15日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春と秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の干潟に飛来するが、春期の記録は多くない。

【国内の分布】

北海道から沖縄にかけて、春と秋の渡り時期に渡来する。

【世界の分布】

シベリア北部、北アメリカ北部、グリーンランドで繁殖し、西ヨーロッパ、アフリカ、オーストラリア、中南米で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

シギの中でも特に干潟に依存して生息しており、県内の確認場所は例外なく海域か、その直近にある干拓地と埋立地に限られている。愛知県鳥類生息調査地点の中で記録があるのも「矢作川河口」「汐川河口」「庄内川河口」の3地点に限られており、かつてシギ・チドリの宝庫と呼ばれた「鍋田」でも、1970年の調査開始から全く記録がない。春は4～5月に中間羽や夏羽で飛来するが、記録のない年も多く、滞在期間も短い。秋は8～10月に飛来するが大半が幼鳥で、比較的早い時期には冬羽に換羽した成鳥が見られることもある。県内ではその他にも、越夏期や越冬期の記録が数例ある。干潟や汽水の湿地で、底生生物や昆虫などを食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

国内でも飛来数の少ない種であり、県内では1973年の春に飛鳥村の干潟で50羽の記録があり、1990年前後の秋に矢作川河口と汐川河口で21羽の群れが見られたこともある。近年は春秋共に、県内合計で1～数羽程度が飛来しているに過ぎない。県内における減少の要因は、海域の貧栄養化などによる干潟の生物の減少や、満潮時に採餌や休憩ができる干潟の後背湿地の消失があげられる。

【保全上の留意点】

残されている干潟の環境を保全するとともに、干拓地や埋立地に存在する遊休地に、失われている湿地の環境を再生する努力が必要である。

【特記事項】

本種の繁殖地は北半球の極地近くに広く分布しているが、アジアの繁殖地は局地的である。世界的には数の少ない種ではないが、国内では東シベリアで繁殖するオバシギの方が圧倒的に多い。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.124. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

オジロトウネン *Calidris temminckii* (Leiser)

【選定理由】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸部から平野部の水田や蓮田、池沼や水路などの淡水湿地に飛来するが、数は多くない。以前は毎年のように沿岸部のほぼ同じ場所に飛来して越冬しており、1980年代には13羽の越冬記録もある。近年は越冬しない年が多く、渡りの季節に沿岸部から20km以上も離れた内陸で見られることもある。かつて沿岸部に広く存在していた淡水湿地の環境が、埋め立てや水田の隔年転作等による乾燥化により、餌となる生物が消滅した環境に変化している。

【形態】

全長 13～15cm、翼開長 34～37cm。夏羽は、頭から胸および上面が黄褐色で赤褐色と黒色の斑があり、頸から側胸にかけて細い縦斑がある。冬羽は、頭から胸および上面が一般的な灰褐色。幼羽は、冬羽に似るが上面の肩羽や雨覆に羽縁がある。嘴は、近縁種のトウネンに比べて細めで、脚は黄色。



愛知県愛西市, 2005年4月25日, 本田美佐緒 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に春秋の渡りで伊勢・三河湾の沿岸をはじめ、近年は内陸の淡水湿地にも飛来しており、越冬するものもいる。

【国内の分布】

春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部より南や西では越冬する個体もいる。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部沿岸で繁殖し、アフリカ東部、インド、東南アジアなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内の沿岸部にある干拓地の歴史をみると、その昔には作付けのできない荒地が存在しており、戦後経済成長が進むと減反政策による休耕田が広く存在しており、本種のように淡水の湿地を好む種にとって、冬も乾燥しない水田や休耕田は最適の生息環境であった。水中や地上の小動物を捕食するが、湿地が凍る水辺での越冬は不可能である。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来の生息地は伊勢・三河湾沿岸や木曾川左岸の干拓地であり、特に生息数の多かったのは矢作川河口から一色干潟に至る西尾市沿岸部の干拓地であった。近年は水田の隔年転作による乾燥化で、沿岸部の水田から餌生物が消滅しており、時に転作をしない内陸の水田に飛来することがある。

【保全上の留意点】

1990年代まで、国内でも愛知県はこの種を含む淡水系シギ・チドリの代表的な飛来地であり、生息数も越冬数も多かった。シギ・チドリの越冬が可能な条件は冬期に凍結しない湿地で、餌となる生物が多く生息していることである。以前にシギ・チドリ類が多く生息していた地域では、耕地の一部を休耕田とするか、あるいは転作の作物を飼料米などにするなどで湿地の環境を保全することが必要である。また、それらの水田では冬期も湛水することで、こうした環境に本来生息していた水棲生物や土壌生物の回復を図るべきである。

【特記事項】

以前は冬の気温が低く、湿地や水路が凍ることも少なくなかったが、特に旧幡豆郡一色町では養鰻場からの暖かい排水により、毎年のように越冬個体を見ることができた。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.122. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus)

【選定理由】

本種は干潟を代表する水鳥で、越冬するシギの中では最も数の多い種である。愛知県で越冬するものが北アラスカで繁殖することは分かっているが、正式な亜種名は不明である。飛来数、越冬個体数共に減少傾向が継続していることから、県内の越冬個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 21cm。夏羽は頭から背が赤褐色で各羽根に黒斑があり、顔から下面は白く、黒く細かい縦斑と腹には大きな黒斑がある。冬羽は上面が褐色味のある灰色で下面は白。幼鳥の上面は夏羽に似るが全身がべったりした褐色で、胸から腹に黒褐色の細かい縦斑がある。



愛知県西尾市, 2017年12月29日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に伊勢・三河湾に流れ込む大小河川の河口干潟、外洋に面した海岸、三河湾の島嶼の岩礁などに飛来する。

【国内の分布】

北海道から沖縄まで全国で越冬するが、東北以北や本州の日本海側では越冬数が少ない。

【世界の分布】

ユーラシア大陸・北アメリカ大陸の高緯度地域およびグリーンランドなどの沿岸部で繁殖し、北半球の中緯度以南で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

シギ・チドリ類の中でも本種は、特に塩水の干潟を好んで生息する種のひとつであり、干潟環境を代表する水鳥でもある。しかし、かつては越冬期でも内陸の淡水湿地へ飛来して採餌する例も多く、愛知県鳥類生息調査では木曾川玉ノ井で1990年12月に600羽、木曾川葛木で1995年1月に251羽の記録もあるが、生息数が激減した現在は、殆ど飛来していない。県内の越冬数は年によって変動があり、越冬期に最大になる年や、渡りの季節に最大になる年などもあって、一様ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の県内で百羽程度、あるいはそれ以上の群れが飛来する場所は庄内川河口周辺、境川河口、一色干潟周辺、三河湾の島嶼、汐川河口周辺および伊川津干潟周辺である。1975年5月には矢作川河口で6,500羽、11月には汐川河口で9,986羽、庄内川河口では2000年4月に8,650羽という記録もあるが、現在は矢作川河口で0~10羽、汐川河口と庄内川河口でそれぞれ1,000羽程度である。

減少の最大要因は埋め立てによる干潟の減少であるが、県内全域で下水道が普及したことにより、干潟や海の生物を育む栄養塩類が減少している。加えて、満潮時に採餌や休息のできる淡水や汽水の後背湿地が減少していることで、干潟は残されていても生息する野鳥のためには十分機能していない。

【保全上の留意点】

県内で残されている干潟の周辺に、淡水や汽水の湿地を回復することが必要である。例えば干潟の周辺に位置する水田に、麦や大豆を植える転作でなく毎年水稻の作付けができる農業施策や、冬期湛水なども大きな効果がある。干拓地や埋立地の遊休地に湿地を回復することも重要である。

【特記事項】

2015年度に1年間、三河湾のひとつの島嶼で調査を実施したところ、砂地のほとんどない島で410羽の越冬が確認された。この島では干潟でなく、潮の引いた岩礁での採餌が確認されている。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.287. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

エリマキシギ *Philomachus pygnae* (Linnaeus)

【選定理由】

本来国内の生息数は少ない種であるが、その中でも愛知県は生息数の多い県であり、越冬個体数も多い県であったが、近年は渡りの季節の飛来数が減少しているだけでなく、越冬する個体も希になっている。

【形態】

全長は、雄が 26～32cm、雌が 20～25cm、翼開長は雄が 54～58cm、雌が 48～52cm。雄の完全な夏羽は頸に襟巻状の飾り羽があり、色は白色、橙色、黒色やその混合など、個体により変化が大きい。雌の夏羽は、上面が淡褐色で黒褐色の斑があり頸から胸にかけて褐色の斑がある。冬羽は雌の夏羽に似るが、頸から胸の斑が淡い。幼羽の上面は暗褐色に黄褐色の鱗状で、脚の色は青味を帯びた淡黄色。



愛知県西尾市, 2019年4月1日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の水田や水路などに飛来し、ごく少数が越冬する。

【国内の分布】

北海道から沖縄まで、国内各地に旅鳥として飛来するが数は多くない。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部で繁殖し、アフリカ、中近東、インド、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

主な生息環境は水田や池沼、水路など淡水の湿地で、沿岸部では汽水の湿地環境にも生息する。秋の渡りは7月末頃から始まり10月末までには渡去する。越冬個体は11月頃から姿を見せ始め、1月前後に最大数になって一旦減少する。春の渡りは県内全体で多くても数羽であるが、3月初旬頃から5月末頃に見られ、美しい夏羽に換羽中の雄成鳥が見られることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在は木曾川下流部左岸、庄内川河口、矢作川下流部と河口部周辺、一色干潟周辺、汐川干潟周辺、伊川津干潟周辺などがあげられる。生息数の多い種ではないが、過去の最大数は、秋に20羽程度、越冬期に10羽程度、春は5羽程度であった。減少の要因は、干拓地や埋立地の乾燥化である。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分に、淡水や汽水の湿地環境を復元する努力が必要である。また、過去に淡水系のシギ・チドリ類が多く生息していた地域では、水田の一部を借り受けて休耕田とするか、水田の一部の転作作物を麦・大豆でなく飼料米等にするなどで、毎年水田の環境が継続されるようにすることが重要である。また、水田の一部を冬期湛水することで、水棲生物や土壌生物の生息環境を保全することも大切である。

【特記事項】

越冬する個体について県内の記録をみると、秋の渡りで飛来した個体群が、そのまま同じ地域に留まって越冬していると確認される例は見られない。秋の渡りで国内あるいは県内のどこかに飛来した個体である可能性はあるが、越冬する場所は秋の渡りの時とは異なる場所であることが多く、越冬羽数も秋の羽数とは関係がないようである。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.126. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ズグロカモメ *Larus saundersi* (Swinhoe)

【選定理由】

東アジアだけに分布する数の少ないカモメで、繁殖地・越冬地共に分布の狭い国際的希少種である。県内では伊勢湾・三河湾の干潟で毎年少数が越冬するが、近年、越冬期である12月～2月に生息が確認できる場所は尾張地域の庄内川河口周辺と、東三河地域の汐川河口周辺のみである。西三河地域の境川河口や矢作川河口、矢作古川河口などでは、近年この種の越冬がなくなっている。

【形態】

全長約29～32cm、翼開長87～91cm。夏羽は、頭部が黒く眼の周りに白い縁どりがあり冬羽では頭部が白く頬と頭頂に黒い斑がある。足は黒味を帯びた赤色で、嘴は黒くユリカモメに比べて太く短い。静止時は、成鳥の場合、翼先端が白と黒の斑状に見える。幼鳥は、成鳥冬羽に似るが、三列風切などに茶褐色味があり、翼先端は白と黒の斑状に見えない。飛行時は、翼下面（外側初列風切）の黒斑がよく目立つ。



愛知県西尾市, 2002年1月6日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に伊勢湾北部と三河湾沿岸の干潟に、少数が飛来して越冬する。

【国内の分布】

主要な越冬地は有明海、八代海、周防灘の干潟があげられる。それら以外にも、局地的に関東から以西の干潟で越冬するが、数は少ない。

【世界の分布】

中国の渤海沿岸と黄海沿岸で繁殖し（韓国北西部でも営巣の記録がある。）、冬期は、中国南西部、台湾、韓国、日本の南西部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では冬鳥として干潟に生息し、干潟の上空をフワフワと飛び廻りながら反転や急降下を繰り返して、カニ類を捕食する姿をみる事が多い。群れではなく、単独で採餌を行う。

【現在の生息状況／減少の要因】

全国的には僅かな増加傾向にあり、愛知県では1980年代から定期的に飛来して越冬するようになった。以前は汐川干潟、庄内川河口・藤前干潟、飛島干潟で各々数羽から10羽程が越冬し、矢作川河口、豊川河口、伊川津などの干潟でも年により1羽から数羽が越冬していたが、近年越冬しているのは2箇所のみで、庄内川河口周辺に20羽前後、汐川干潟周辺に5羽前後と思われる。近年県内の河口や干潟の見た目は綺麗になっているが、干潟の生き物は減少傾向がみられる。

【保全上の留意点】

近年、河川から流入する栄養塩類等が減少しており、餌となるカニ類が減少している。試験的に、終末処理場から排出される窒素やリンについて、上限値だけでなく下限値も定めた管理運営が実施され始めたが、さらに研究が進められることで、豊かな海や干潟が復活することが望まれる。

【特記事項】

環境省シギ・チドリ類調査では、国内でシギ・チドリ類と同じ環境に生息する本種のカウントを実施している。各年1月の冬期一斉調査日の記録では2013年1,970羽、2014年2,338羽、2015年2,454羽、2016年1,619羽、2017年2,387羽、2018年2,390羽と、全国では増加傾向がみられるが、近年県内の生息総数に増加傾向はみられない。

（高橋伸夫）

オオアジサシ *Sterna bergii* Lichtenstein

【選定理由】

県内では 2002 年頃から、主に渥美半島の内湾側で確認が多くなっている。多い年は 100 羽程が確認されており、愛知県の南南東 1,000km 程度に位置する、小笠原諸島の西之島で標識されたと思われる個体も確認されている。西之島では 2013 年 11 月から大規模な噴火が始まったことで、その後の飛来が注目されていたが、2016 年以降は噴火前に近い数が確認されるようになっている。繁殖が終わって越冬地へ向かう前に、幼鳥を含む群れが一箇所に集合する種であり、こうした集合場所は幼鳥が独立するための重要な場所であるため、愛知県の通過個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 43～53cm。雌雄同色で夏羽は頭が黒色でボサボサの冠羽、背と翼の上面は一律な暗青灰色で、顔から頸および体の下面は白色。嘴は黄色で、脚は黒色。冬羽では、前頭から頭頂の黒色部分がゴマ塩状になる。幼鳥は上面の色が一律でなく、黒褐色の斑がある。



愛知県田原市, 2002 年 9 月 8 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主な生息地は渥美半島の北側で、中山から白谷にかけての沿岸部である。

【国内の分布】

繁殖は小笠原群島西之島と尖閣諸島北小島の 2 箇所のみとされている。南西諸島で夏季に確認されることが多かったが、近年伊勢・三河湾と瀬戸内海の一部では、数十から百羽程度が観察されている。

【世界の分布】

アフリカ東部および南部沿岸からインド洋、アジア南東部、オーストラリア沿岸、南太平洋に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内の生息環境は、主に内湾の海上である。上空を飛びながら魚を探し、急降下して捕食する。海上を飛ぶ姿を見ることが多いが、海面に立てられた棒杭など、岸から離れた場所にある人工物に止まって休息している姿を見ることが多い。愛知県で生息するのは主に 6 月から 10 月であるが、幼鳥が見られるのは主に 8 月以降である。

【現在の生息状況／減少の要因】

2002 年から西之島の噴火まで、毎年数十から百羽近くが飛来していたが、2014～15 年は多くても 10 羽程度にまで減少した。2016 年以降は噴火前程度の飛来数が確認されており、幼鳥の姿も確認されている。一時減少したのは噴火によるものと思われるが、その後の飛来数回復の要因が西之島での繁殖再開であるのか、他の場所で繁殖を始めたことによるものかは不明である。

【保全上の留意点】

渥美半島の北部沿岸は繁殖後の集合地として重要であるが、三河湾は中央部を中心にその大半が慢性的な貧酸素状態であるため、餌となる小魚の生息は不安定な状態である。三河湾の総合的な環境改善が求められる。

【特記事項】

西之島は 2013 年 11 月から 2017 年 8 月まで噴火しているが、朝日新聞デジタル 2018 年 6 月 7 日では、本種の一部が西之島に戻り、産卵をしていることが確認されている。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.339. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

ハチクマ *Pernis ptilorhynchus* (Temminck)

【選定理由】

夏鳥として丘陵地から標高 1,000m の山地にまで生息するが、繁殖期の行動圏が他のタカ類とは比較にならない程広いことで、繁殖期の詳細な生態については不明な部分が多い。育雛期の餌をハチ類に大きく依存していることや、これまでに知られている県内の営巣地の大半が人里近くの林であることから、開発等の影響を受けやすい種と推測される。

【形態】

全長は 57～60.5cm、翼開長 121～135cm。翼は長くて幅広い。羽色は淡色から暗色までバリエーションがあり、さらに雌雄や年齢で異なる。雄成鳥は尾の黒線が太く、眼の色は暗色。雌成鳥の眼は黄色で、幼鳥の場合は暗褐色であることが多い。幼鳥は、飛行時に初列風切の先端部が広く黒色に、次列風切が暗色に見える。



愛知県, 2002年7月11日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に丘陵地から山間部に生息し繁殖する。春秋の渡りの季節は、県内全域で見られる。

【国内の分布】

夏鳥として北海道、本州、四国、九州に飛来して繁殖する。

【世界の分布】

ヨーロッパから小アジア、バイカル湖を経てロシア東北部、中国東北部、日本、インドから東南アジアにかけて繁殖し、アフリカ、東南アジアで越冬し、6亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期に平地近くから標高 1,000m の山地までの環境に生息し、丘陵地や山地で繁殖する。繁殖期の行動範囲は時に巣から 30km と他のタカ類の 10 倍を大きく超え、営巣地近くへの侵入者を排除する行動も少ない。アカマツやナラ類などの樹上に営巣し、育雛期の餌のほぼ全てがハチ類の幼虫や蛹で、ハチ類の少ない繁殖前期はカエルやカナヘビ、ヘビなどを捕食する。春の内陸では 4 月中旬から、秋の伊良湖では 11 月上旬頃まで観察されることもあるが、通常は 5 月上旬から 10 月上旬まで県内に生息する夏鳥である。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖期の行動範囲が広大で、他のタカ類のように明確なテリトリーの確認が困難であるため、正確な生息密度の把握は困難であるが、現在県内の生息数は多めにみても 50 ペア程度と推測される。県内で繁殖分布が縮小したと思われる箇所では、平野部やその周辺の丘陵地にあった営巣地が、都市化によって消失した場所も少なくないと思われる。

【保全上の留意点】

本種にとって最も重要な餌はハチの仲間である。国内で最も多く食べているのはスズメバチの仲間であるが、クロスズメバチは食用として人間と競合しており、キイロスズメバチは近年危険生物として、野外でも駆除の対象とされている。これからの時代、人間の文化を含め全ての生物が共存できる環境作りや、そのために必要な教育なども大切と思われる。

【特記事項】

近年、人工衛星による追跡で渡りのコースや時期などが明らかにされており、渡りの途中を含めこの種の生活がハチ類に大きく関わっていることが解明されつつある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.50-52. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

オオコノハズク *Otus lempiji* (Horsfield)

【選定理由】

フクロウやコノハズク、アオバズクは、夜間よく通る声で鳴くので生息の確認は比較的容易であるが、本種の声は地味で小声のものが多く、生息の確認が困難な種である。県内の繁殖確認例は僅かであり、繁殖期の生息確認記録も少ない。しかし、越冬期は比較的観察記録が多く、2000年代の初めまではガラスや車との衝突などによる保護や拾得も度々発生していた。また、偶然に夜間活動する姿を確認したり、昼間休息している姿を確認する例も少なくなかった。2010年以降も確認例はあるが、その大半は確認を目的とした夜間調査で得られたものである。

【形態】

全長 24～25cm。全身が灰褐色で上面は黒色や灰色の複雑な斑があり、胸に黒褐色の虫食い状の斑がある。後頸に灰白色の大きな斑があり、羽角は長めで目の色は橙色。趾に羽毛がある。



愛知県安城市, 2011年1月9日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

山地の林で繁殖し、冬期は都市部の緑地や沿岸部のグリーンベルトで越冬する例もある。

【国内の分布】

小笠原諸島を除く全国で繁殖し、北方のものは冬期に南下する。南西諸島に生息するのは亜種リュウキュウオオコノハズク *O. l. pryeri* に区分される。

【世界の分布】

ネパール、中国東北部、朝鮮半島、台湾、マレー半島、大スンダ列島、バリ、カンガエン諸島に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期に尾張および三河の山間部で鳴き声や姿が確認されており、樹洞で営巣した例も数例報告されている。以前には巣箱で営巣したという報告もあるが、確認数が少ないことから県内の繁殖数やその生態等については不明な部分が多い。小型の鳥類や哺乳類、昆虫などを捕食するとされるが、越冬期にムクドリやねぐらの周辺に生息して、これを捕獲した姿を見たこともある。また、冬期に公園の樹洞で観察されることもあり、春の渡りの季節に三河湾の島嶼でも記録がある。主に繁殖期にウオツ、ウオツ、ウオツとか、ポウ、ポウ、ポウあるいはミューウ、ミューウ、などと鳴くが、他のフクロウ類のようによく通る声ではないので、その声で存在を確認することは容易でない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在も東三河や西三河の山間部で繁殖期の報告は数例あるが、県内の繁殖数はかなり少ないものと推測され、平野部での越冬個体も確認例が減少している。減少の要因として、渡りや越冬の季節に車やガラス等との衝突など、人による直接的な影響は小さくないものと思われる。

【保全上の留意点】

フクロウ類の営巣に樹洞は不可欠であるが、現在自然樹洞のある樹木が少なくなっている。代用として巣箱の設置は効果的なので、本種に合った巣箱の考案も必要であろう。

【特記事項】

かつて傷病による保護が多かった頃に、口の中に鳥の天然痘ができて衰弱したものを保護したことがある。猛禽類では、健康な獲物は捕獲が困難である。少し弱った獲物から、こうした病気が伝染して死亡するリスクは少なくないものと推測された。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.89. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

コミミズク *Asio flammeus* (Pontoppidan)

【選定理由】

平野部に飛来する冬鳥であるが、以前はフクロウの仲間の中で夏鳥のアオバズクに次いで姿を観察する機会の多い種であった。現在ではそのアオバズクと共に、観察が困難な種になっている。図鑑には明るい時間にも飛び回って餌を探ることがあると説明されているが、近年昼間に活動する姿を観察する機会は皆無に近い。こうした理由から、県内の越冬個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 35cm、翼開長 95cm。名前の由来は耳の小さなミミズクという意味で、体は小さくない。全身黄褐色の地色に黒褐色の斑点があり、胸から腹は縦斑になっている。虹彩は黄色で眼の周りは黒く、羽角が短いことが名前の由来となっている。飛翔時は翼が長くフワフワと飛ぶ。



愛知県西尾市, 2014年1月2日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬季に平野部や沿岸部にある広く開けた農地や、河川敷などへ飛来して越冬する。

【国内の分布】

全国の広い農地に飛来して越冬するが、海岸や河岸の干拓地などに多い傾向がある。

【世界の分布】

ユーラシア大陸と北アメリカ大陸および南アメリカ大陸に分布しており、北半球の北部で繁殖するものは冬期に南へ移動する。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部の干拓地や河川の下流域、平野部や丘陵部の広大な農地に飛来して越冬する。稲刈り後の水田や作物のある畑、河岸の広い草地などに生息するが、広いだけの環境では生息できる個体数は限られる。昼の間姿を隠すためのよく繁った草叢などが散在していることも必要であり、多様な環境が存在していることが重要である。コミミズクは明るい時間帯でも活動することが知られており、特に夕刻は早い時間から活動することがある。地上近くを飛び回りながら、地上にいるネズミ類や小鳥類などを捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年生息数が激減しており、夜間に調査をしても確認できないことが多くなっている。農地の風景に大きな変化はないように見えるが、農地の環境の多様性が減少している。農業人口の減少による集約化で農地の作物が均一になり、餌となる生物は種類も数も減少している。農地周辺の開発により交通量が増加しており、夜間の人工照明が増えたことによる生息環境への影響も小さくない。

【保全上の留意点】

本種に限らず農地を生息地とする野生生物は多いが、広大な面積の全てを均等に利用しているものでもない。ねぐらや休息地として利用する場所や餌場として頻繁に利用する場所は比較的限られており、こうした場所は他の多くの種にも共通している場合が多い。広い耕地の中でこうした部分の環境を保全するだけでも、大きな効果が得られるものと思われる。

【特記事項】

秋冬に県内平野部の農地で狩りを行う猛禽の中で、ネズミ類等を好んで食べる種として昼間はチュウヒ、ハイイロチュウヒ、チョウゲンボウ、ノスリなどが、夜間はコミミズク、トラフズク、オオコノハズク、フクロウがある。しかし、その大半は愛知県では絶滅危惧種と評価されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.98-99. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

アカショウビン *Halcyon coromanda* (Latham)

【選定理由】

本来愛知県は本種の生息密度が低い県ではあるが、近年観察者人口が増加したことにより、山地部各所での記録は増えている。しかし、県内ではほぼ毎年安定して生息の確認できる場所は限られており、ほとんどの場所では1年だけのことが多い。以前は渡りの季節の夜間、人工物との衝突で拾得や保護される個体の報告例も数多くあったが、現在ではほとんどなくなっている。

【形態】

全長 27cm。赤くて大きな嘴が目立つ。上面は赤褐色で下面は淡褐色、腰の中央に光沢のある水色の縦線がある。脚は赤色。

【分布の概要】

【県内の分布】

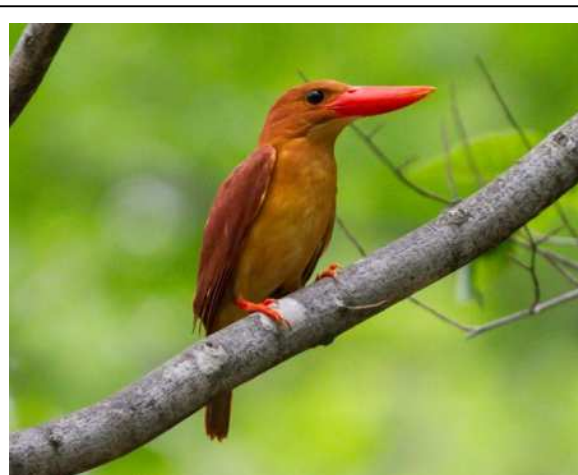
夏鳥として標高およそ 100m 以上の山地に飛来する。春秋の渡りでは、平野部や丘陵地、半島などでも記録されることがある。

【国内の分布】

日本には2亜種が分布し、亜種アカショウビン *H. c. major* は北海道から九州に夏鳥として飛来する。

【世界の分布】

インド東北部、ネパール、バングラデシュ、ミャンマー北部、マレー半島、中国、台湾、朝鮮半島南部に分布し、北方のものはフィリピン、マレー半島、スマトラ、ジャワなどに移動する。8亜種にわけられる。



島根県, 2012年7月21日, 杉山時雄 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

4月下旬から飛来が始まり、10月中には飛去する夏鳥である。繁殖は5月下旬から7月と思われ、落葉広葉樹林から針葉樹林まで幅広い植生で繁殖するが、サワガニやカタツムリ、大型昆虫、小型の魚類や両生類、爬虫類などを捕食するので、繁殖には湿潤で薄暗くこうした生物が生息する環境が必要である。容易に巣穴を空けられる朽ち木やスズメバチの巣、放置された茅葺屋根などに穴を穿って営巣する。キョロロロロ…と次第に小さくなる声で鳴き、飛びながら鳴く時はキョロッ、キョロッ、キョロッとしり間を空けて鳴き、渡りの季節には鳴きながら渡ることもある。通常は姿を見るのが難しいが、繁殖期には希によく目立つ場所に止まって鳴くこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では生息密度がかなり低いので、ほぼ毎年繁殖期に生息が確認できる場所はごく限られている。その他の場所では、同じ場所で連続して観察できるのは長くても5年程度で、ほとんどの場所では1年から数年で確認できなくなっている。2000年代半ばまでは、主に秋の渡りでガラス等への衝突による保護鳥や落鳥として報告される例も多かったが、近年はほとんどなくなっている。ガラスや電線などに衝突し易い性質を持った個体は、全て淘汰されてしまったのかもしれない。

【保全上の留意点】

三重県や静岡県と比較すると、愛知県は生息密度が低い。人工林が多く、朽ちた樹木が少ないことが要因と思われ、管理の困難な場所にある人工林は針広混交林などに変遷させるべきである。

【特記事項】

本種に限らず、生息密度が低い場合はテリトリーを主張する必要が低く、囀りの頻度が下がるために、本種のように人目につき難い種ではさらに生息の確認が困難である。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.102. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* (Bechstein)

【選定理由】

主に標高およそ 1,000m 以上の山地で局地的に繁殖するキツツキで、生息数はごく少ない。生態に不明な部分が多いが、愛知県の調査では、繁殖期を含め、現在まで継続した観察記録があるのは段戸裏谷のみで、茶臼山では 2000 年以降の記録が希となっている。

【形態】

全長 28cm。上面は黒色で背から翼にかけて白斑があり、下面は淡黄白色で腹と下尾筒は淡い赤色。側胸と脇には、黒褐色の縦斑がある。雄は頭頂が赤く、雌は黒い。体は、類似種のアカゲラよりもひと回り大きい。



長野県, 2016年5月22日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

標高およそ 1,000m 程度以上の原生林や二次林に周年生息しているようであるが、非繁殖期に低山へ移動する個体もある。

【国内の分布】

留鳥として生息するが、4 亜種に分けられ、北海道には亜種エゾオオアカゲラ *D. l. subcirris*、本州北中部には亜種オオアカゲラ *D. l. Stejnegeri*、本州西部、四国、九州には亜種ナミエオオアカゲラ *D. l. namiyei*、奄美大島に亜種オーストンオオアカゲラ *D. l. owstoni* が分布するとされている。

【世界の分布】

小アジア、コーカサス、ヨーロッパ西部からバイカル湖を経てロシア沿海地方、サハリン、朝鮮半島、中国、台湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では標高およそ 1,000m 以上の原生林や、落葉広葉樹が主で針広混交の二次林などで繁殖し、周年同じ環境に生息するものも多い。ただし、繁殖期と思われる 6 月初旬に 500m 程度の標高でも複数の確認記録があるので、繁殖環境については不明な部分がある。非繁殖期には低山に移動する個体もあるが、平地までは降りず、通常は標高 300m 程度以上の場所で越冬する。キョツ、キョツ、キョツ、ケレレなどと鳴くが、他のアカゲラやアオゲラ、イカルなどもよく似た声を出すので、声だけでの識別は困難と思われる。ドラミングのリズムや音でのアカゲラやアオゲラとの識別も、実際には困難であろうと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

毎年継続した繁殖期の観察記録があるのは段戸裏谷のみであるが、面の木原生林や茶臼山の他、標高 500m 程度の二次林でも繁殖期の記録がある。繁殖は局地的であり、一年を通して県内の生息数は極めて少ない。原生林や良好な二次林の価値が一般にはほとんど評価されていないため、生息適地が減少している。

【保全上の留意点】

現在県内に残る原生林や二次林の環境は僅かであり、積極的に保全されるべきである。

【特記事項】

中部地方では通常標高 1,000m 程度以上で繁殖する種であるが、岡山県や広島県では 200m 以下の標高でも繁殖しており、電柱が木であった頃には本種が穿った電柱の穴でブツポウソウが繁殖していた。本州北中部には亜種オオアカゲラ、西部には亜種ナミエオオアカゲラが分布していることから、中国地方と中部地方の繁殖標高の差は、亜種の違いであることが推測される。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.115. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ハヤブサ *Falco peregrinus* Tunstall

【選定理由】

現在県内で繁殖期に生息しているのは、多めに見積もっても10ペア以下である。繁殖期に成鳥の記録が多くなったのは1990年頃からで、名古屋の市中心部では2000年の繁殖期に1ペアの生息が確認されているが、県内では1995年以前の営巣記録は残されていない。繁殖期の確認数は増えているが、これまで見逃していた可能性も否定できない。ただし、越冬期の生息数に増加傾向は見られないので、さらなる調査が必要である。

【形態】

雄は全長38～44.5cmで翼開長84～104cm、雌は全長46～51cmで翼開長111～120cm。成鳥では、頭部、上面、尾羽は黒味の強い青灰色で、下面は白く胸から腹、脇、脛にかけて細かい横斑がある。頬には髭状の黒い斑があり、目の周辺に黄色の縁取りがある。幼鳥では、頭部、上面、尾羽が暗褐色で各羽に淡褐色の羽縁があり、下面には明瞭な縦斑がある。飛行時は、翼先端が尖って見え、浅くて早い羽ばたきと滑翔を交えながら直線的に飛ぶことが多い。



愛知県碧南市, 2008年4月28日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

山地から平野部、沿岸部や島嶼まで県内のほぼ全域で確認されているが、山地での繁殖はごく限られている。近年は平野部の都市周辺で、繁殖期の確認が目立つようになっている。

【国内の分布】

留鳥として北海道から九州の山地や平地、海岸などに生息するが、冬鳥として沿岸部や平野部に飛来するものも少なくない。

【世界の分布】

南極圏を除き広く世界中に分布する。亜種の分類は、17～19亜種に分けられている。

【生息地の環境／生態的特性】

崖や高いビル、煙突などに営巣する。県内の繁殖期は概ね4月から6月と思われるが、ほぼ周年ペアでいる例もある。通常飛びながら空中で鳥類を捕獲しており、繁殖期の獲物は小型の鳥類であることが大半であるが、非繁殖期にはカモやキジなど大型の鳥類も捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では繁殖期に、2009年には4～5ペア程度、現在では10ペア程度以下の生息が確認されている。以前の営巣地が消失した例もあり、繁殖の増加傾向は調査の努力量増加によるものもある。

【保全上の留意点】

本種の獲物として、最も一般的で多いのはシギ・チドリやカモなどの水鳥である。県内から水鳥の生息環境が激減しており、水辺環境の復元が求められる。

【特記事項】

沿岸部に生息する個体では水鳥の捕食例も多いが、飛ぶことの少ないクイナ類の捕食例も少なくない。2017年の春、県内では数例の記録があるだけのシロハラクイナの捕食も確認されている。本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種及び国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.128-129. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

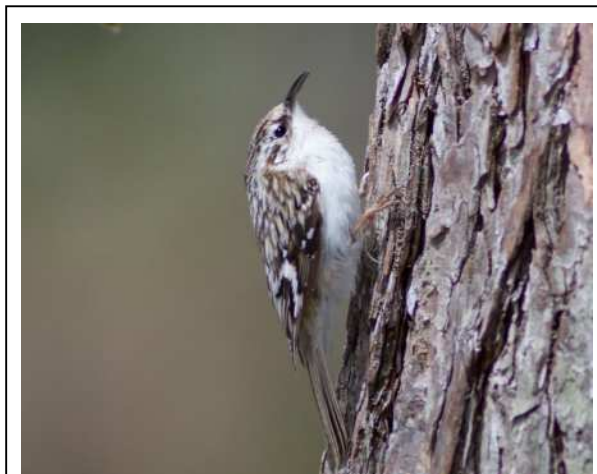
キバシリ *Certhia familiaris* Linnaeus

【選定理由】

県内の繁殖地として段戸裏谷の原生林が知られているが、ここでの繁殖数は 2 ペア程度と推測されている。近年標高 700m 程度の別の複数の山でも、繁殖期に繁殖行動の確認例がある。また繁殖行動の確認までには至らないものの、繁殖期と思われる季節に標高 500m 余りの場所で複数の確認例もある。段戸裏谷以外の場所では継続した確認記録がなく、一過性の現象である可能性も否定できないが、いずれにしても県内における本種の生息数や繁殖個体数は極めて少ないものと思われる。

【形態】

全長 14cm。上面は黄褐色に汚白色と黒色の縦斑があり、下面は白い。眉斑は細く白く、嘴は細く下に湾曲し、尾は長くくさび型。



長野県, 2011 年 5 月 2 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

標高 1,000m 程度の原生林に周年生息するが、標高 700m 程度の山でも繁殖活動が観察されている。標高 500m 程度の場所でも繁殖期の観察記録がある。

【国内の分布】

北海道、本州、四国に分布するが、本州中部以南や四国では主に亜高山帯に生息する。

【世界の分布】

ヨーロッパからロシア南部、沿海州から日本にかけて分布し、主に留鳥であるが、北方で繁殖するものの中には、冬期南へ移動するものもいる。亜種キタキバシリ *C. f. daurica* は南千島と北海道に、亜種キバシリ *C. f. japonica* は本州以南に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

本州では主に亜高山帯の針葉樹林に生息し、北海道では平野部でも見られる。県内で周年生息が確認されている段戸裏谷の原生林では、1975 年にリョウブの樹洞で営巣が確認された。樹の幹に垂直に止まり、幹を回りながら登る習性がある。ピーピョピョ、ツリリ・・・と囀り、地鳴きはツーリリリッ、シリリッと聞こえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の安定した生息地としては段戸裏谷の原生林が知られるのみで、周年生息し繁殖も確認されているが、生息数は多くて 2 番い程度と考えられる。冬期もあまり移動しないと考えられるが、非繁殖期には希に村積山や六所山などでも記録がある。種本来の生息環境が亜高山帯針葉樹林ということなので、標高の低い愛知県では地球温暖化や開発により生息できる環境は容易に喪失する。

【保全上の留意点】

原生林や亜高山帯針葉樹林に近い環境は、本種に限らず県内で絶滅の危機にある多くの種の生息環境でもある。県内に残るこうした環境を保全し、道路の整備や開発を行う場合は環境に及ぼす影響を十分に考慮するべきである。また、近年こうした環境への入山者が増えていることから、必要に応じて立入制限等の措置を行ない、自然環境を保全することも必要である。

【特記事項】

本来の生息環境は亜高山帯針葉樹林とされているが、東三河にある標高 700m 程度の山でも繁殖行動の確認が 2 例あり、西三河にある標高 500m 程度の場所でも繁殖期の生息記録が複数ある。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.231. 文一総合出版, 東京.

（高橋伸夫）

カワガラス *Cinclus pallasii* Temminck

【選定理由】

河川の上中流部で繁殖するが、近年は中流部での生息が激減しており、上流部でも繁殖個体数が半減している。また、河川により、あるいはその支流の系統によって繁殖個体が激減、あるいは消滅している地域が多くなっている。愛知県鳥類生息調査地点での繁殖期の確認数は、閩苺では現在1980年代の50～30%程度に減少し、県民の森では2000年代に激減して2013年以降記録がない。岩屋堂でも2004年以降に激減して、繁殖期の確認がなくなっている。

【形態】

全長 21～23cm。全身が黒褐色でずんぐりした体形。脚は黒褐色で前面が銀色。幼羽は、前頸から腹にかけて汚白色の斑がある。成鳥の虹彩は茶色。



愛知県豊田市, 2011年3月26日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張東部丘陵や半島および平野部を除く県内全域の、山間部の河川に生息する。繁殖は河川の上中流部に限られるが、上流部でも標高1,000m近い場所では繁殖期の記録がない。

【国内の分布】

九州以北と屋久島に生息し繁殖する。周年同じ地域に生息し、季節による長距離の移動はしないとされている。

【世界の分布】

アフガニスタン、トルキスタンからヒマラヤ、インドシナ北部から中国、台湾、朝鮮半島、ウスリー、サハリン、千島、カムチャツカに分布し2～4亜種に分けられる。

【生息地の環境／生態的特性】

山間部の河川や溪流に周年生息して繁殖する。なわばり性で、季節移動は少ない。水中を羽搏いて泳いだり、水底を歩いたりして水棲昆虫、甲殻類、魚類等を捕食する。溪流周辺の大きな岩の隙間や砂防ダムの穴、滝の裏側、橋脚と橋桁の間などにコケを使って球形の巣を作る。ビツ、ビツと鳴き、チーチージョイジョイなどと囀る。繁殖は他の小鳥類よりかなり早く、1月からディスプレイや巣作りの繁殖行動を始め、4月にはヒナが巣立ちを終える。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては県内の山間部を流れる河川の上中流部で普通に生息していたが、現在は平野部に近い中流部では激減、山間部でも生息数が半減している。河川やその支流の系統の中には比較的生息数の減少が軽微な地域も認められるが、県内全域では生息数が激減、あるいは消滅している地域がその大半を占めている。これまで県内山間部の全域で実施されてきた砂防ダムの建設や河川改修、およびその上にある道路の建設などを含め、工事によるシルト等の流入、コンクリートやアスファルト等による水質の悪化など、餌となる水棲生物を含む生物の生息環境全体の劣化が考えられる。

【保全上の留意点】

現在生息している地域の自然環境を保全することが第一である。

【特記事項】

愛知県鳥類生息調査地点で標高1,000m程度に位置する茶白山や段戸裏谷では、生息の記録はあるものの繁殖期の記録がない。繁殖の初期が厳冬期であり、凍結や積雪で生息できないものと推測される。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.240. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

コジュリン *Emberiza yessoensis* (Swinhoe)

【選定理由】

日本を含む極東の一部で局地的に繁殖し、世界的にみても生息数の少ない種である。県内における繁殖記録はないが、一時は繁殖も可能な環境が存在していた。冬鳥として沿岸部の干拓地や埋立地のヨシ原、平野部や丘陵地にある草地やヨシ原に生息しているが、かつての県内には広い面積のヨシ原や草地が沿岸部の各所に存在しており、標識調査の捕獲によって生息が確認される例も少なくなかった。近年はこうした環境の消失が顕著で、県内で越冬が可能な場所は大きく減少している。

【形態】

全長 14.5cm。雄の夏羽は頭部全体と上胸が黒色、雌は頭部が暗褐色で汚白色の眉斑と顎線がある。背は赤褐色で淡褐色と黒色の縦斑があり、胸は淡い褐色で腹は白い。腰は赤褐色。嘴はまっすぐで、色は夏羽で黒く冬羽では肉色。



愛知県西尾市, 2002年3月17日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に伊勢・三河湾沿岸の干拓地や埋立地、平野部や丘陵地の草地やヨシ原に生息する。

【国内の分布】

本州中部以北の内陸や沿岸、および九州で繁殖するが局地的で、本州中部以南の沿岸部や平野部で越冬する。

【世界の分布】

中国北東部、ウスリー、南千島、日本で繁殖し、北方のものは冬期に移動して朝鮮半島南部、日本、中国南東部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

越冬期に見られる県内の生息環境は、ヨシ原やヨシ類を含む疎らな草原であることが多い。数羽の群れで生息し、昆虫や草の種子などを採餌する。ヨシ原に生息する近縁種にオオジュリンがあるが、オオジュリンがジュイーと鳴くのとは異なり、チッ、チッと細い声で鳴く。ヨシ原や草原の中に潜って生活するので姿を見ることは難しいが、その声で存在を知ることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前のような広いヨシ原や草原が少なくなったことで、標識調査のように捕獲して確認されることはなくなっている。県内で以前にどの程度の数が生息していたのか正確には不明であるが、過去に伊勢・三河湾沿岸の干拓地や埋立地、内陸に存在していたヨシ原や草原の各所で確認されていたことと比較すれば、近年越冬が確認される場所はごく限られており、その面積もかなり狭くなっている。生息環境減少の要因は、埋め立てなど旧来の開発行為が進行したこと以外にも、太陽光パネルや風力発電の設置など、新しい開発行為が始まったことなども大きく影響している。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地に残されている遊休地に、過去に広く存在していた湿地の環境を復元することで、絶滅の危機にある野鳥を呼び戻す努力が必要である。

【特記事項】

国内には本種より希で、世界的には分布の広いシベリアジュリンという近縁種があるが、県内の2001年以降の記録をみると、本種とシベリアジュリンは、全て同じ年にほぼ同じ場所で確認されている。生息できる環境が狭まり、限られた場所に集合していることが推測される。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.374. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

オシドリ *Aix galericulata* (Linnaeus)

【選定理由】

県内での繁殖や、繁殖期の生息記録は少数確認されており、数年間継続して繁殖した例はあるが、安定した繁殖地はない。近年繁殖期の確認例は減少傾向にあり、愛知県では繁殖個体群が準絶滅危惧と評価された。越冬期に数百羽の大群が見られる機会は少なくなっているが、小群の越冬が可能な河川や池沼は各所に残されているので、越冬個体群はリスト外と評価された。

【形態】

全長 45cm。繁殖羽の雄は嘴が赤く頭と頬から頸および三列風切は栗色、脇は黄褐色で眉斑は太く長い白色。胸と背および体の後部は紫色に白線がある。雌は全身淡黒褐色で胸と腹は丸みのある淡色斑で覆われ、眼の周りとは後方に細い白線がある。雄の若鳥や非繁殖羽は雌に似るが、嘴は赤く先端だけが白い。雌の嘴も先端は白いが、色は褐色である。



愛知県豊田市, 2005年1月22日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬鳥として県内全域の河川や山地、丘陵地、平地の湖沼などに飛来し、西三河および東三河の山間部で繁殖する。

【国内の分布】

主に冬鳥として全国に飛来するが、北海道や本州では繁殖しており、九州や沖縄でもごく少数の繁殖記録がある。

【世界の分布】

ロシアの南東部から中国東部・朝鮮半島・日本・台湾に分布し、冬期は主にその南部および南西部に移動して越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

大木の樹洞や橋のトラスなどに営巣し、ヒナは孵化するとすぐに地上に飛び降りる。冬期は比較的広い河川や池沼で越冬し、時には海上で見られることもある。開けた水面に出ることも多いが、水面に張り出した樹木の下で生活することを好む。主に植物食で水草などを食べるが、ドングリも好んで食べる。水辺から離れた尾根で採餌することもあれば、潜水して水底の餌を採ることもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の繁殖環境は社寺にある大木の樹洞や橋のトラスなどであるが、繁殖減少の要因として樹洞では繁殖に適した状態の期間が短いこと、人工構造物では繁殖の条件を全て満たし難いことなどが推測される。越冬期には100羽を超す群れを見ることが少なくなっているが、要因として周囲を林に囲まれた広い池や淵の環境や、人の立ち入らない水辺が減少していることがあげられる。

【保全上の留意点】

県内における橋梁での繁殖例は1例のみであり、条件の良い樹洞を有する大木も減少している。今後は自然樹洞の代替として巣箱の設置など、積極的な保護対策も必要と思われる。越冬期の生息数も減少しており、林等で遮蔽された河川の淵やため池など、越冬環境の保全も必要である。

【特記事項】

本種の営巣に適した大きさの樹洞は、ブッポウソウやオオコノハズク、ムササビなど多くの野生生物に営巣場所やねぐらとして利用されるが、社寺林をはじめ樹洞ができる程の大木は減少しており、樹洞の状態もそれぞれの種の営巣に適する期間は長くない。自然樹洞が少なくなっている現代では、本種以外の種を含めた野生生物の保護対策としても、巣箱の設置は効果的である。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, pp.66-67. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

クログアモ *Melanitta americana* (Swainson)

【選定理由】

2013年の冬まで、船で渥美半島の遠州灘沖へ出た外海沖で200羽から350羽程度の確認例があるが、三河湾内では多くても10羽程度と推測された。1970年代には田原市（旧田原町）の三河湾側だけで1,000羽を超える越冬群が見られ、1973年7月に白谷海岸で199羽の越冬群の記録もある。また、冬期には太平洋沿岸や、伊勢湾沿岸の知多半島の内海から師崎にかけての海上でも普通に見られた。最近ではほぼ毎年、渥美半島周辺の太平洋あるいは三河湾で80羽程度の群れが確認され、他の場所でも少数羽が確認されていることから、県内全体で100羽程度が越冬しているものと推測されるが、県内周辺での越冬数は1970年代の1/10以下に減少しているものと推測される。

【形態】

全長44～54cm、翼開長79～90cm。雄は、全身が黒色で、上嘴の基部に黄色のこぶ状の突起がある。雌は、全身が暗褐色で頬と喉が淡灰色で、嘴は黒色。



【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に太平洋沿岸や三河湾に生息するが、近年三河湾内の生息数は僅かである。

【国内の分布】

北海道では繁殖が確認されており、冬期は全国の海域に生息する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部、アラスカ西部、ハドソン湾の一部、ニューファンドランド島、アイスランドで繁殖し、ヨーロッパ沿岸、アフリカ北西部沿岸、カムチャッカから中国にかけての沿岸、北アメリカ西海岸および東海岸で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

冬期に遠州灘や三河湾の沖合に生息し、汐川干潟や豊川河口、矢作川河口など、三河湾深部でも観察記録がある。潜水採餌をし、貝類や甲殻類を捕食するとされ、1973年に田原市の旧田原町沿岸で越冬個体を捕獲し調査したところ、ムラサキガイを数多く摂食していた（武田芳男、私信）。また、ここの越冬個体群は、岸に上がって休息していることが多かった。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年冬期は主に遠州灘沖で生息し、希に群れで三河湾に飛来することもあるが、群れが湾内に留まることはないようである。その他にも、1羽から数羽が湾内沿岸部の各所で見られることがある。現在陸地から確認できる範囲で越冬している数は、合計で100羽程度ではないかと推測される。

【保全上の留意点】

外海での減少について要因は不明であるが、内湾での減少には餌となる生物の減少が最大の要因と考えられ、餌となる貝類や甲殻類が生息できる、環境の改善が求められる。

【特記事項】

愛知県が報告している「伊勢・三河湾貧酸素情報」では、渥美半島の北側に位置する三河湾は慢性的な貧酸素状態が発生しており、海流の状態などによっては溶存酸素飽和度が、貝類・底生魚類が生存困難な30%や、全ての底生生物が生存困難な10%という状態も発生している。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.77. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

カワアイサ *Mergus merganser* Linnaeus

【選定理由】

2010年頃まで、県内の分布は尾張地域の木曾川に集中しており、特に1980年代後半には100羽を超える記録もあるが、県内の他の地域では1年に1羽が見られるかどうかといった珍鳥でもあった。その後尾張地域での生息数が減少し、それまで飛来が希であった三河地域の矢作川水系や豊川水系、天竜川水系、および三河湾の沿岸部などでも観察されるようになってはいるが、県内全域の総個体数にはほとんど増加傾向がみられない。

【形態】

全長58～72cm、翼開長86～102cm。雄は、頭部が緑光沢のある黒色で、後頭にふくらみがあり、嘴は赤色で細長く先端がかぎ状にまがる。上頸から腹にかけては白色でサーモンピンク色を帯びる。背は黒色で、肩羽、雨覆、次列風切は白色で初列風切は暗灰色。雌は、頭部が茶色で後頭に冠羽があり、喉から胸にかけて白色で上面は灰色。



静岡県, 2015年1月5日, 浅井利明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

現在は冬期に県内の河川や湖沼に生息し、希に三河湾の沿岸部で記録されることもある。

【国内の分布】

北海道に周年生息し繁殖するほか、本州、四国、九州では冬期に河川や湖沼に生息する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部及び北アメリカ大陸の亜寒帯と温帯の一部で繁殖し、ヨーロッパ、中近東、インド東部、ミャンマー、中国南部、北アメリカ南部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

比較的広い瀬や淵のある河川やダム、広い池沼を好んで越冬するようであるが、最近は河口や海岸などで1～数羽の記録もある。巧みに潜水して魚類を捕食するが、比較的浅い水辺で顔を水につけ、速く泳ぎながら魚を追うこともある。県内での繁殖はないと思われるが、繁殖期およびその直後と思われる季節に、河川の上流や中流域で複数の個体が確認されることも少なくない。

【現在の生息状況／減少の要因】

以前は木曾川に集中していたが、近年は県内全域の河川やダム、大きめの溜池などに冬鳥として生息するようになり、少数であるが河口や海岸、島などでも観察されるようになってきている。新しく分布した地域ではほぼ毎年10羽程度以上が飛来しているのは豊田市、岡崎市、豊根村、豊川市の4箇所と思われるが、ダムの2箇所は同一シーズンでも個体数が安定しない。平野部の河川2箇所では、近年毎年比較的安定した飛来が確認されている。ただし県内の生息総数は、木曾川周辺で最多であった頃と比較して多くなってはいないようである。尾張の平野部から県内全域の山地や海まで、広く分散した要因は不明である。

【保全上の留意点】

河川や池沼など水辺環境を保全し、安定して越冬できる環境の整備に努める必要がある。

【特記事項】

新しく越冬が始まった岡崎市と豊川市の河川は瀬と淵のある河川である。扶桑町から岐阜県各務原市あたりの木曾川に似た環境ではあっても、川幅が広く中洲も存在する木曾川に比べると川幅はかなり狭いので、警戒心の強い本種にとって安定した生息環境とは言い難い。

【関連文献】

黒田長久, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.82. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

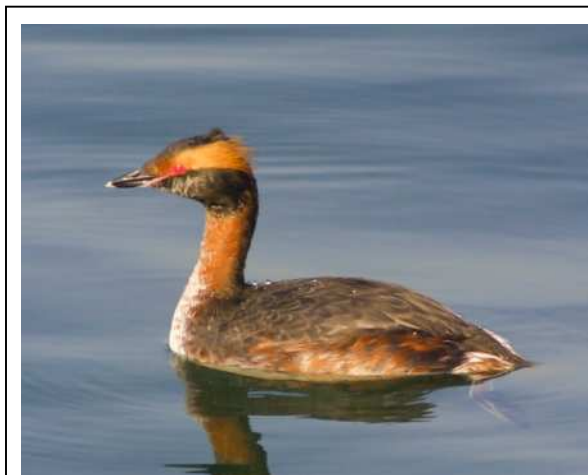
ミミカイツブリ *Podiceps auritus* (Linnaeus)

【選定理由】

外洋にも生息するが、それを含めても県内の生息数は 0～10 羽程度である。外洋以外では伊勢・三河湾や河川の下流、沿岸にある淡水の池や水路などに生息するが、県内全域で確認されない年もある。近年は特に淡水の池や水路への飛来がなくなり、その環境が悪化あるいは消失していることから、県内の越冬個体群は準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約 33cm。雌雄同色で、夏羽では頭や顔が黒く眼の前から後頭にかけて金栗色の飾り羽があり、頸・胸・脇は赤褐色。冬羽では頭から背が黒く顔から胸は白、脇は白黒の斑がある。嘴は真直ぐに見える。



愛知県西尾市, 2003 年 3 月 23 日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島の太平洋沿岸や伊勢・三河湾の沿岸、大きな河川の下流域や河口、平地や丘陵地の池沼などに飛来する。

【国内の分布】

九州以北の海上や内湾、河川の河口、内水面などに飛来して越冬する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸や北アメリカ大陸の高緯度地域で広く繁殖し、冬期は北半球の中高緯度にある沿岸部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内の生息地は外洋、湾内および河川の下流域から河口、沿岸部から内陸の内水面などであり、生息環境の選択には塩水・淡水の区別はないようである。通常は 1 羽、多くても 5 羽以内で、通常は水面に浮いている姿を見ることが大半である。小魚など小型の水棲生物を捕食していると思われる、頻繁に潜水する姿を見ることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

外洋に安定した生息地はないと思われるが、外洋以外で最も確認例が多いのは木曾川下流域から河口の周辺である。その中でも、内湾や池沼および他の河川の確認例が減少する中で、愛知県鳥類生息調査地でもある「木曾川葛木」だけが 2015 年度から 2018 年度まで継続して毎冬 1 羽あるいは 5 羽の生息が確認されている。外洋と「木曾川葛木」以外の地域から大きく減少している要因として、淡水の池沼や水路では周辺を含む環境の悪化が、内湾については餌生物の減少が考えられる。

【保全上の留意点】

近年、本種をはじめ伊勢・三河湾に生息する水鳥が減少している要因が、餌資源の減少であることは容易に推測できる。渥美半島の北側に位置する三河湾は、慢性的な貧酸素状態にあることが報告されている。また、伊勢・三河湾の奥では下水道が整備され、終末処理場の排水から窒素、リンなどの栄養塩類が必要以上に除去されているために、貧栄養状態であることが指摘されている。河川からの流入水量が減少していることを含め、豊かな伊勢・三河湾を回復するための努力を急ぐ必要がある。

【特記事項】

繁殖分布が南に隣接する近縁のハジロカイツブリも、越冬期の分布はほぼ同じであるが、県内の生息数は圧倒的に多い。太平洋側での確認数は、本種の 500 から 1,000 倍程度である。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.89. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* Pallas

【選定理由】

11月から5月頃まで、主に渥美半島の太平洋沿岸、知多半島の先端周辺、三河湾の島嶼などの岩場の多い海岸に生息する。愛知県鳥類生息調査では、伊良湖岬周辺の「古山」調査地で毎年150羽から300羽以上が記録されていたが、最近では100羽程度に減少しており、遠州灘の他の部分でも減少傾向が見られる。知多半島の先端部周辺や西尾市の旧幡豆町、田原市などの三河湾沿岸部では、以前から少数の越冬個体が認められていたが、近年三河湾の島嶼周辺で、毎年100羽程度が越冬していることが確認された。三河湾の島嶼では、これまでほとんど定期的な鳥類調査が行われてこなかったが、1986年の2月にも100羽前後の生息が記録されており、島嶼周辺の岩礁などにも大きな環境変化が見られないことから、当時と同じ程度の本種が継続して越冬していたものと思われる。

【形態】

全長63～73cm、翼開長91～102cm。全身が緑色光沢を帯びた黒色で、体形、特に嘴と頸が細い。夏羽は、顔の裸出部が赤く、頭頂と後頭の2ヶ所に房状の冠羽があり脚の付け根に白斑が出る。冬羽は、顔の裸出部が黒く、冠羽は目立たず脚の付け根の白斑はない。幼羽は、冬羽に似るが、全身が黒褐色で光沢がない。



愛知県西尾市, 2015年4月16日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期に太平洋沿岸、知多半島先端部周辺や三河湾の島嶼周辺および三河湾の東部や南部の沿岸で越冬する。

【国内の分布】

北海道や岩手県、大分県の沿岸で繁殖し周年生息するが、冬は九州以北で越冬する。

【世界の分布】

千島列島、カムチャツカ、サハリンから北アメリカの太平洋岸にかけて分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

自然の岩礁が発達した海岸を好み、潜水して主に魚類を捕食する。岩礁の上で群れになって休息するが、警戒心が非常に強く、船や人が近付くと直ぐに飛び去ってしまう。しかし、若い個体が単独で採餌している場合には、比較的警戒心が弱いこともある。

【現在の生息状況／減少の要因】

遠州灘の伊良湖岬周辺や旧赤羽根町、高松一色などの岩礁周辺で見られることが多く、次いで三河湾内の島嶼に多く生息する。減少の要因は不明であるが、渥美半島の岩礁では釣りなどで人の接近が多い場所があり、こうした場所は警戒心の強い本種には安定した生息地とはいえない。

【保全上の留意点】

特別な保全対策は不要と思われるが、何気ない岩礁にもその環境に依存して生息する生物が存在することを、訪れた人に知ってもらうことは必要と思われる。

【特記事項】

三河湾の島嶼部分では、鳥類について1年を通しての定期的な調査がなされていなかったが、近年定期調査を実施したところ、島嶼の周辺には遠州灘に近い数の本種やウミウが越冬していることが確認された。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.148. 平凡社, 東京.
吉井 正, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.44. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

カラシラサギ *Egretta eulophotes* (Swinhoe)

【選定理由】

分布が東アジアに限られており、世界的な希少種である。主に日本海の島や九州以南でごく少数が見られるが、県内には1995年頃からほぼ毎年のように飛来するようになった。飛来数は年に1～数羽であり、飛来は4月から9月までの間に限られている。世界的にも希少な種であり、国内でも愛知県は飛来の頻度が高いことから、国の指定と同じ準絶滅危惧と評価された。

【形態】

全長約65cm。雌雄同色、全身白色でコサギに似るが、夏羽では嘴が黄橙色。目先は青緑色で、後頭の冠羽は房状。脚は黒く趾は黄色であるが、コサギのように足首から先の全てが黄色ではない。冬羽や幼鳥は嘴が黒くコサギに似るが、黄色味を帯びている脚と嘴の太さや色などが微妙に異なる。



愛知県西尾市, 2006年4月29日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

庄内川河口、境川河口、矢作川河口周辺、一色干潟周辺、汐川干潟、伊川津干潟などで記録があり、一色干潟周辺の記録が最も多い。

【国内の分布】

ほぼ全国で確認されているが極めて少なく、日本海の島や西日本以外では希である。

【世界の分布】

朝鮮半島と中国南東沿岸の一部で繁殖し、東南アジアの島や沿岸部で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の沿岸部にある干潟に飛来し、周辺に塩水や汽水の水路、浅い池沼が存在する環境を好む。干潟や水中を歩き回ったり、飛んだりして魚や甲殻類などを捕食する。消波ブロックの上や水辺の灌木などで、他のサギ類に混じって休息することが多い。県内には4月から9月に飛来するが、4月・5月に飛来したものは滞在期間が短く、6月以降に飛来したもののほうが長く滞在する傾向がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

2000年以前は何年かに1羽の飛来であったがその後は隔年に1羽程度、2013年～2018年は毎年確認されている。近年は地球の温暖化により、南方に分布する種が本来の分布域より北で確認される例が数多く報告されている。世界的に、あるいは国内における生息数が少ない種では、県単位では若干の増加傾向が認められても、その種と生息環境を保全することには重要な意味がある。

【保全上の留意点】

1980年代半ばまでの愛知県は、シギ・チドリをはじめとする多くの種類の水鳥が生息しており、国内屈指の水鳥王国であった。愛知県では、それまでに伊勢・三河湾に存在していた広大な干潟の大半で埋立てが進んでいたが、僅かに残された干潟と、周辺には水田が中心で水路や湿地の多い干拓地が存在していた。その上に埋立て途中で湿地状態の環境が多くあったことで、水鳥の生息には最適の環境が広がっていた。現在の愛知県に残された干潟を保全することは当然であるが、周辺の水路や池沼、湿地など、後背湿地の環境復元の重要性にも目を向けるべきである。

【特記事項】

冬羽や幼鳥で似ている種としてコサギが挙げられるが、夏羽ではアマサギの冬羽や幼羽、チュウサギなども似ている。クロサギの白色型もよく似ているが、愛知県で白色型の記録はない。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.175. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)

クイナ *Rallus aquaticus* Linnaeus

【選定理由】

愛知県鳥類生息調査の結果をみると、1970年代から徐々に生息数が減り、2010年以降はそれ以前の約半数になっている。県内の埋立地や干拓地に存在していたヨシ原はその大半が消失しており、平野部や丘陵地などの池沼からも本種の生息環境であるヨシ原が減少している。

【形態】

全長 28～29cm、翼開長 38～45cm。成鳥は、頭頂、後頸から体上面は暗いオリーブ色で黒色の縦斑がある。顔、喉、胸は青灰色で、腹、脇は黒色地に白色の横斑がある。嘴は長めで赤く、冬羽では上嘴が黒っぽい。幼鳥では、顔に褐色味が強い。



愛知県豊橋市, 2007年10月18日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に沿岸部から内陸の平野部、丘陵地、山麓などの湿地に冬鳥として飛来する。

【国内の分布】

北海道と本州北部で繁殖し、本州、四国、九州、南西諸島では冬期に生息する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸の温帯域で繁殖し4亜種に分けられる。北方のものは南下し、冬期には中国南部、東南アジアなどに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

冬鳥として、秋は8月下旬頃から飛来して、春は5月中旬頃までには飛去する。生息場所は伊勢・三河湾沿岸にある干潟の河口付近、埋立地や干拓地の池沼や水路、湿田、河川下流部の河川敷、平野や標高の低い丘陵地、山麓などにある池沼のヨシ原や湿地に生息する。単独または数羽で生息し、昆虫、甲殻類、軟体動物、小魚などの他、植物の実や種子なども食べる。柔らかい湿地や水中の泥の上を、長い脚指を活かして素早く歩く。僅かな量のヨシの中でも、一旦逃げ込むと姿を見つけるのは困難である。鳴き声はヒクイナよりも鋭い声でキョッ、キョッ、キョッ、あるいはクイーッ、クイーッ、クイーッあるいはキューイー、キューイー、キューイー、などと、単調なリズムで鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県鳥類生息調査地点で、過去に記録があり2010年度以降記録がなくなっている調査地として、「鶉の山」「鍋田」「平針」「木曾川玉ノ井」「矢作川河口」があげられる。過去に生息数の多かった「鍋田」は乾燥化が進み、同じく「平針」は都市化が進んでいる。それ以降も記録がある調査地点は「汐川河口」「平和公園」「東大演習林」「木曾川葛木」の4箇所のみである。県内全域にあった本種の生息環境も、同様にヨシ原面積が激減しており、特に東日本大震災の後は、本種の生息環境が格好のソーラー発電設置場所となって消滅している。

【保全上の留意点】

県内の干拓地や埋立地に存在する遊休地に、かつての県内に存在していた良好な湿地環境を再生するべきである。

【特記事項】

県内では繁殖記録が1例あり、1975年6月に犬山市の水田で巣卵が発見されている。その他、豊橋市石巻町や矢作川河川敷などでも繁殖期と思われる季節の観察例はあるが、その数は極めて少なく、巣卵やヒナなどの観察例がないことから、今回は越冬個体群として評価された。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.106. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus)

【選定理由】

沿岸部から丘陵地、標高の高い山地の湿地にも生息するが、本来県内で最も数多く生息していたのは沿岸部や河川下流部の湿地である。荒地や干拓地に存在していたヨシ原などの湿地が減少し、同時に沿岸の浅い海に土砂を投入する埋立てが県内全域で行われた。この埋立地に一時的できた水たまりや湿地のヨシ原にも数多く生息していたが、近年こうした環境の大半が消失したことで、最も生息数の多かった沿岸部や河川下流部から本種が減少している。

【形態】

全長 21～23cm、翼開長 37cm。成鳥は、頭部から腹にかけて赤褐色、上面は一律な暗緑褐色で、下尾筒は黒色地に白色の横斑がある。嘴は黒く脚と目は赤色。幼鳥は、全体的に羽色が淡く、喉から腹にかけては白っぽい。



愛知県安城市, 2011年8月26日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に平野部の水辺に生息し繁殖するが、丘陵地や山間部の湿地でも記録があり、近年は越冬期の記録も少なくない。

【国内の分布】

国内には2亜種が分布し、亜種ヒクイナ *P. f. erythrothorax* は、北海道、本州、四国、九州に主に夏期に生息し繁殖するが、一部は本州中部以南では越冬する。南西諸島には亜種リュウキュウヒクイナ *P. f. phaeopyga* が周年生息する。

【世界の分布】

インドから東南アジア、中国、朝鮮半島にかけて分布し4亜種に分けられる。北方のものは冬期に南下する。

【生息地の環境／生態的特性】

沿岸部から山地までの水田や水路、河川や池沼などで周囲にヨシ原のある湿地に生息する。繁殖期は4月から10月頃で、イネ科の株の中などに営巣する。水生昆虫や軟体動物、水生植物の若葉などを採食する。繁殖期にはキョツ、キョツ、キョツ、キョ、キョ、キョ、キョ…と次第にテンポが速くなる声で鳴く。夜明けや雨上がりに鳴くことが多いが、繁殖前期は昼夜を問わず鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

沿岸部や河川下流部周辺での生息数は大きく減少しているが、都市化されていない内陸や丘陵地などの池沼には少数ながら生息している。また、本来生息していた場所が開発されて工業団地や住宅団地ができた場所では、そこに造られた遊水池や水路にヨシ原ができれば、こうした環境でも繁殖するが、本種の存在に配慮がされない場合はそのまま消失している。

【保全上の留意点】

干拓地や埋立地の遊休部分には、積極的に湿地の環境を再生するべきである。水田を含む淡水湿地を保全して、水辺の環境回復に努めることも重要である。開発された部分に作られた遊水池や水路の水辺環境は、その価値が理解されていなければ容易に消失する環境でもある。

【特記事項】

古典文学の中で「水鶏（くひな）たたく」というのは本種の声で、戸を叩く音として描かれている。遠い昔から、身近な夏の風物詩として親しまれていたことが分かる。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.106. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ヤマシギ *Scolopax rusticola* Linnaeus

【選定理由】

10月初旬頃から越冬のために飛来して、5月中旬頃に繁殖地へ飛去する。山地から丘陵地、平野部の農地や河川敷、沿岸部の干拓地や埋立地まで広く生息するが、生息を継続させるためにはその生態や生息環境を熟知して適当な配慮を継続しなければならない。夜行性であるため生息の確認が困難な種であるが、生息数の少ない種でありながら狩猟鳥獣に指定されている。

【形態】

全長 33～35cm、翼開長 56～60cm。額は灰色で後頭に太い黒褐色の横帯が4本あり、背面は赤褐色に黒色や灰白色の複雑な斑がある。下面は淡灰褐色で黒褐色の横斑がある。尾羽は黒褐色で赤褐色の横斑があり、先端部は灰色。雄は、雌に比べて尾羽が長く嘴が短い。



静岡県, 2018年1月27日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

10月から5月まで、県内の山地から丘陵地、平野部、沿岸部まで広く生息するが、生息密度は低い。

【国内の分布】

北海道から本州中部、伊豆諸島で繁殖し、冬期は、本州、四国、九州、沖縄に生息する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸北部、中部で繁殖し、冬期は南下するものがある。

【生息地の環境／生態的特性】

山地から丘陵地、平野部、沿岸部までの開けた場所にある農耕地や緑地で、周辺に繁った林などのある環境を好む。樹木や繁みの多い都市公園や河川敷、工業地帯のグリーンベルトなどにも生息するが生息密度は低い。通常単独でいることが多いが、環境の良い場所では数羽が生息することもある。夕方から夜間に餌場へ飛来し、主にミミズなどの小動物を好んで捕食する。チキッ、チキッ、あるいはブーブー、などと飛びながら鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

山地から丘陵地、平野部が本来の生息地と考えられるが、近年は沿岸部の干拓地や埋立地に作られた新しい環境に生息するものもいる。本来の生息地では開発や道路建設、農業形態の変化等により生息可能な環境が減少している。沿岸部にできている新しい環境は、人手によって攪乱が続いている場所であり、他の用途への転用や、植生が安定して人手による攪乱が減少した場合には、生息が不可能となる不安定な環境でもある。

【保全上の留意点】

生息数が少ないうえに夜行性で、生態の把握が困難な種ではあるが、県内にはかなり詳細な観察がされている地域もある。生息に不可欠な条件等は明らかにされているので、沿岸部に工場等を有する企業等が環境保全を実施する場合には、こうした知見が参考にされるべきである。

【特記事項】

新しく造成された沿岸部の埋立地に緑地を作る場合、植物を移植する前に施肥をしてミミズが多く湧いた場所に飛来する例が多い。こうした環境には本種だけでなく、多くの野生生物が生息することができる。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.138. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)

ミュビシギ *Calidris alba* (Pallas)

【選定理由】

以前からシギ・チドリの生息環境は干潟ということで、広い海に面した砂浜に生息するシギ・チドリは調査の対象ではなかった。かつて渥美半島の太平洋に面した海岸や、伊勢湾に面した西ノ浜の砂浜などには、30羽～50羽の群が幾つも普通に見られた種である。こうした砂浜はサーフィンや釣りなどで多くの人が利用するようになり、安定して生息できる砂浜は減少している。

【形態】

全長 20～21cm、翼開長 40～45cm。夏羽は、頭部、上面、胸は赤褐色で黒色の軸斑があり、下面は白色。冬羽は、頭部、上面、胸は様な淡灰色で下面は白色。幼羽は、上面に黒色の軸斑があり白黒の格子柄に見える。嘴と脚は黒色で、後趾がなく趾は3本。



愛知県西尾市, 2009年9月27日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

太平洋沿岸や三河湾の島嶼などで越冬し、秋の渡りの季節には伊勢・三河湾の干潟などにも飛来する。

【国内の分布】

春秋の渡りで北海道から沖縄までの全国に渡来し、本州中部以南では越冬する。

【世界の分布】

シベリア中部、北アメリカ北部、グリーンランドで繁殖し、冬期は、オーストラリア、東南アジア、中近東、アフリカ、南北アメリカに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

越冬する環境は、広い海に面した砂浜で、寄せる波に追われ、引く波を追いかけながらせわしなく走り回り、ヨコエビなどの甲殻類などを捕食する。伊勢湾岸の砂浜では、観光化の進んだ愛知県側の知多半島では数が少なく、三重県側では生息数が多い。三重県内の沿岸各所に生息しているが、津市の2箇所だけでもほぼ毎年220羽以上が観察される（三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015）。春は4～5月、秋は8～10月に渡り、この時期は河口の干潟にも少数が飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

冬期は、主に豊橋市から田原市の太平洋（遠州灘）に面した沿岸部と、渥美半島先端で伊勢湾に面した田原市西ノ浜の砂浜で数十羽の群れが越冬しており、伊勢湾に面した知多半島沿岸や渥美半島の三河湾に面した小中山や伊川津の砂浜、および三河湾の島嶼でも1～10羽程度が越冬する。減少の要因として、砂浜への人の立ち入り増加と、特に太平洋沿岸では砂浜の後退が考えられる。

【保全上の留意点】

主な生息地が波のある海に面した広い砂浜であるため、レジャーにも適した環境である。愛知県の海岸は特にレジャー人口が多いことも特徴である。両者が共存するための雰囲気作りも、これからの自然保護には必要なことと思われる。

【特記事項】

近年の調査により、砂浜の少ない三河湾の島嶼にある岩礁で少数が越冬しており、春の渡りを前にした時期には20羽を超える個体が岩礁で採餌していることが観察されている。

【引用文献】

三重県農林水産部みどり共生推進課, 2015. 三重県レッドデータブック 2015～三重県の絶滅の恐れのある野生生物～, p.66. 三重県, 津市.

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.124. 世界文化社, 東京.

（高橋伸夫）

ミサゴ *Pandion haliaetus* (Linnaeus)

【選定理由】

伊勢・三河湾沿岸の干潟を中心に、主として冬期に生息する。本来県内の生息数が多い種ではなく、沿岸部で見られることが大半であったが、1990年頃から内陸で見られることが多くなり、2000年頃からは生息数が増加している。県内における繁殖は、2013年に内陸で確認されたものが最初である。その後内陸の各所でも繁殖期に確認されていたが、繁殖はしていなかった。ごく最近になって最初に確認された場所を含め内陸の数ヶ所で繁殖が確認されているが、安定しているとはいえない状態であることから、愛知県では繁殖個体群を準絶滅危惧、越冬個体群はリスト外と評価された。

【形態】

雄は全長 56～60cm、雌は全長 57.5～61.5cm。背と翼上面が暗褐色、頭部から腹にかけての下面は白色で、目先から頸側を経て後頸にいたる太くて暗褐色の帯がある。胸に黒色と暗褐色の縦斑からなる帯があることが多い。雄は雌に比べて胸の帯が淡く、幼羽は雨覆の羽縁が明瞭。他のタカ類に比べて翼が長く、飛行時は尾が短く見える。



愛知県西尾市, 2015年10月18日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に冬期に伊勢・三河湾沿岸に生息するのが大半であるが、内陸でも見られることが多くなり、ごく少数が内陸で繁殖している。

【国内の分布】

九州以北で繁殖し周年生息するが、北海道では夏鳥で、本州中部以西では冬期に多く見られる。

【世界の分布】

広く世界に分布し、主に北半球で繁殖して冬期に南半球まで渡るものもいるが、東南アジアやオーストラリアに分布するものは、留鳥として繁殖している。

【生息地の環境／生態的特性】

県内で最もよく見られるのは干潟や河川の下流から河口、沿岸部にある池沼や水路で、こうした場所の獲物は主にボラである。内陸の河川やため池、ダム湖などでよく見られるようになった時期と、移入種のブラックバス釣りが盛んになった時期とは概ね一致している。水面の上空を飛び、停空飛行の後に急降下して水中に飛び込み魚を獲る。営巣は主に水辺近くの樹木や崖、送電線の鉄塔などで、県外では海岸や島嶼で繁殖する例も多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年は干潟や河口を中心に1980年代の数倍が生息しており、沿岸部だけでなく、山地を含む県内全域の水辺でも見られる機会が増えている。繁殖期に沿岸部周辺で見られるものは若鳥が多く繁殖はしていないが、最近内陸では数ペアの繁殖が確認されている。1970年代までは農薬やPCBなどによる影響で、世界的な減少が問題となっていたが、2000年以降はその危機を脱しつつある。

【保全上の留意点】

県内での繁殖が安定するまでは、準絶滅危惧として観察を継続する必要がある。

【特記事項】

1970年代から本種の繁殖について調査されているが、三重県では伊勢湾内の島嶼で繁殖の記録があるものの、愛知県では沿岸部における繁殖は確認されず、2013年に山奥で繁殖が確認された。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.49. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ツミ *Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel)

【選定理由】

県内では1980年代に東三河の山地で繁殖が確認されており、その後も三河地方で繁殖期に数例の確認記録がある。1990年代に名古屋市内で繁殖が確認され、2010年代半ばまでは名古屋市内の何ヶ所かで繁殖が確認されていたが、この繁殖個体群はその生息環境の違いなどから、本来県内の山地で繁殖していたものとはかなり異なることで、関東の都市部で繁殖していた個体群の系統ではないかと推測された。しかし、現在この都市型の個体群が、名古屋市内や周辺の都市部で生息や繁殖を継続しているという報告はない。

【形態】

全長は雄が25～27.5cm、雌が28.5～31.5cm、翼開長51.5～62cmの雌雄二型。雄は頭部から背と翼上面にかけて暗青灰色、下面は白く胸から脇にかけて淡橙色で、目は暗紅色。雌は上面に暗褐色味を帯び、下面は白く胸から脇、脛にかけて暗褐色の細かい横斑があり、目は黄色く細い眉斑がある。幼鳥は雌に似るが、胸に縦斑があり脇の横斑は太くて粗い。飛行時は、他のタカ類に比べて頭が大きめで翼が短かめに見える。



愛知県名古屋市, 2010年7月8日, 浅井利明 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では夏鳥や旅鳥として飛来し、過去に山地や平地で繁殖が確認されている。冬期は大半が南へ渡るが、越冬期の確認記録も少ない。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州で繁殖し、南西諸島に周年生息するものは、別亜種リュウキュウツミ *A. g. iwasakii* である。

【世界の分布】

中央シベリア南部からモンゴル北部、中国東北部、朝鮮、アムール地方、ウスリー地方、サハラで繁殖し、冬期は中国東南部、台湾、東南アジアなどに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地や山間部の混交林や、平野部の都市公園等に生息して繁殖する。主に小型の鳥類を捕食して、アカマツやヒノキなどで営巣することが多い。都市部での獲物は、スズメなど小鳥の巣立ちビナと思われる。県内では一年を通じて記録があるが、越冬期はその大半が南へ渡るものと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内で繁殖が確認されているのは、山地と都市部の数ヶ所である。山地での繁殖期の記録は、ごく少数で確認が難しく、最近では都市部での繁殖も報告されていないが、現在も渡りの季節にはある程度の個体数が観察されている。都市部の繁殖個体が増加や定着ができなかった要因として、カラス類やオオタカなど、天敵の繁殖分布も都市部に進出して拡大していることが推測される。

【保全上の留意点】

現在山地で繁殖していると思われる個体群を調査することは必要であり、都市部で繁殖が継続できなかった要因等についても、写真撮影者などの影響を含め、改めて調べてみる必要がある。

【特記事項】

国内では1980年代半ば以降、関東の都市近郊を中心に繁殖記録の報告が相次いだ。1991年以降は横ばいで推移した後、1990年代後半からは減少傾向にあるとされている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.70-71. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

オオタカ *Accipiter gentilis* (Linnaeus)

【選定理由】

近年は平野部や都市部への進出例が多く確認されるようになったが、いずれも周辺には広大な農地や河川敷など餌場の存在が不可欠である。平野部における営巣場所は猛禽の繁殖には極めて不安定で脆弱であり、容易に消滅するおそれがある。

【形態】

全長は雄が47～52.5cm、雌が53.5～59cm、翼開長106～131cm。成鳥は頭部から背と翼上面にかけて暗青灰色で、眉斑や下面は白色で、胸や腹に細かい横斑がある。幼鳥は上面が褐色で下面が淡黄褐色。胸から腹にかけて縦斑がある。脚は黄色で、尾に太く明瞭な横帯がある。他のタカ類に比べて尾が長めで翼は短かめに見える。



愛知県額田郡幸田町, 2019年3月23日, 石川均 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

繁殖期に山地から山麓、丘陵地、平野部の緑地から河川敷まで広く分布するが、山地で姿を見られる頻度は、平地や丘陵地、山麓に比較するとかなり低い。非繁殖期は平野部の河川や池沼、沿岸部の水辺などで生息するものが増える。

【国内の分布】

北海道と本州に周年生息して繁殖し、四国、九州では主に冬期に生息する。

【世界の分布】

ユーラシア大陸と北アメリカ北部に広く分布し、7～10亜種に分けられ北方のものは冬期に南へ移動する。

【生息地の環境／生態的特性】

本来は山地のアカマツでの営巣が普通であったが、松枯れにより現在ではスギや広葉樹に営巣することも普通になっている。獲物の大半は鳥類で、水に飛び込んで水鳥を襲うことも少なくない。繁殖は耕地や林のある里山環境が理想と思われるが、近年は平地の公園や林で繁殖する例も多くなった。県内では、雄は非繁殖期もテリトリーの中に留まるようである。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年は山地で繁殖する個体は減少傾向で、山麓から平地で繁殖する個体が増加している。2000年頃から県内の山地や丘陵地で、繁殖期にノスリが見られるようになり、次第に繁殖するものが増えてきたが、本種の巣でノスリが見られる例は、その早い時期から確認されている。

【保全上の留意点】

生息数が増えたということで、国内希少野生動物種から除外されたが、県内では山地の生息数が減少傾向にあり、平地や丘陵地でも、周辺の開発による生息環境の悪化や、営巣環境の問題などで、一旦進出した場所から消滅している例もみられることから、今後も継続した観察が必要である。

【特記事項】

本来県内に生息していた本種は警戒心が強く、巣に接近しただけで警戒されて、営巣の放棄につながることもあったが、2000年頃から増加した個体には、人に対する警戒心が弱いものや、全く警戒心のないものが多くなった。人に対して警戒心が弱い、あるいは警戒心のない個体は関東地方に多く、県内における本種の分布拡大に何らかの関係があるものと推測される。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.74-75. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

フクロウ *Strix uralensis* Pallas

【選定理由】

標高 1,000m を超える山地から山麓、丘陵地から平野部まで繁殖が可能な種である。本来の営巣環境は樹洞であるが、樹洞のある老齢木は歴史のある社寺林の周辺、あるいは比較的若齢木でも樹洞ができる樹種に限られる。過去にはコンクリートの電柱（中心部が空のパイプ状である）や、焼却炉の煙突などに飛び込む事例が多発し、上部に蓋や網が設置されるようになった。地上や、さらにはスカイラインの路肩にある排水桝で営巣する例までみられ、巣箱の設置が急がれた。巣箱架けと共に自然樹洞を含む繁殖調査の結果、巣箱の効果が高いことが実証されている。しかし毎年の管理も必要で、これを全県、全国に普及することは容易でない。農林業の衰退により餌場環境が悪化しているうえに、本来本種の繁殖成功率は安定せず、天敵であるハシブトガラスも増加している。

【形態】

全長は雄が 48cm、雌が 58.5cm。頭部から上面は褐色で、後頸から背にかけて暗褐色の縦斑があり肩羽と雨覆の先端に白斑がある。下面は淡褐色で胸に褐色の縦斑があり、顔盤は暗褐色の斑で縁どられる。羽角はなく、虹彩は暗色、尾は長めで濃褐色の太い横縞がある。



愛知県豊田市, 2018年5月2日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

標高 1,000m を超える山地から山麓、丘陵地から平野まで広く生息して繁殖する。

【国内の分布】

九州以北に周年生息する。国内では、亜種エゾフクロウ *S. u. japonica* 亜種フクロウ *S. u. hondoensis*、亜種モミヤマフクロウ *S. u. momiyamae*、亜種キュウシュウフクロウ *S. u. fuscescens* の 4 亜種に分けられる。

【世界の分布】

ヨーロッパ北部および東部からオホーツク海西岸、アルタイ地方、モンゴル北部、中国北部および東部、サハリン、朝鮮半島に生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

古い社寺林の周囲に農地や竹林などが広がる里山を好むが、繁殖している環境は多様である。繁殖の早いものは 3 月上旬に産卵を始め、4 月下旬には巣立ちするが、標高や気象等の条件により巣立ちが 5 月中旬以降の場合も少なくない。小型哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、昆虫類などを捕食し、雄はホウホウ、ゴロスケホウホウ、雌はワンワンワンなどと鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内の山地や丘陵地に広く分布しているが、里山環境以外では生息密度が低い。繁殖期以外は平野部や沿岸部でも見られるが、近年は繁殖地から離れた場所で観察される頻度が低くなっている。

【保全上の留意点】

農林業を振興することで地域文化を保全し、社寺林などを含む健全な里山環境を回復するべきである。老齢木の保存と共に巣箱架けなども積極的に実施して、樹洞に依存して生息してきた生態系の回復を図るべきである。

【特記事項】

1991 年以降、西三河を中心に本種用巣箱の設置に取り組んでおり、成果が確認されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, pp.94-95. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

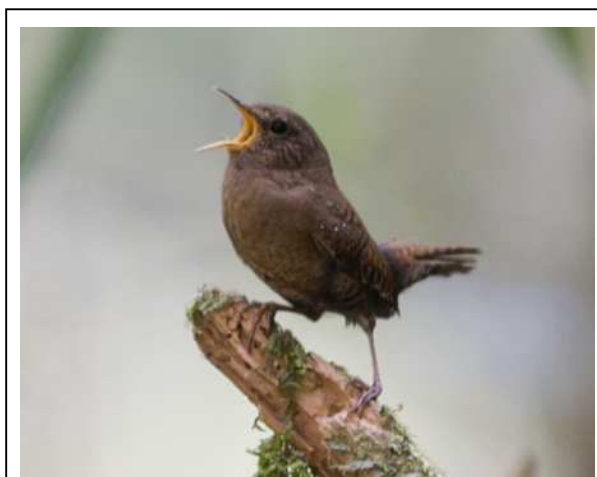
ミソサザイ *Troglodytes troglodytes* (Linnaeus)

【選定理由】

県内では標高の高い山地にある、比較的暗い谷や沢で繁殖する。県内周辺の観察記録に、愛知県鳥類生息調査の結果を合わせてみると、近年の県内における繁殖期の生息数は減少傾向にあり、特に標高 800m 以下で繁殖する個体群の減少が顕著である。平野部周辺や半島にある愛知県の調査地では、越冬期の確認記録が数十年前から全くなっている。尾張地域や渥美半島など、繁殖地が存在する山塊から隔たれた調査地での記録がなくなっていることから、愛知県をはじめ中部地方全体で繁殖する本種の数は、ここ数十年の間に大きく減少していることが推測される。

【形態】

全長 10.5cm。体の上面は濃褐色で、黒褐色の横斑がある。下面は灰褐色で褐色の横斑があり、下尾筒には白斑がある。眉斑はバフ色で細い。



愛知県北設楽郡設楽町, 2009年5月1日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河や西三河にある山地の、主に標高 600m 程度以上の場所で繁殖する。冬期もその山塊で生息するものが多いが、丘陵地や平野部、半島部で越冬する個体もいる。

【国内の分布】

大隅諸島以北に周年生息し繁殖するが、冬期に暖地へ移動するものもいる。

【世界の分布】

ヨーロッパ、アフリカ北部、中東、中央アジア、ロシア極東南部、サハリン、千島、カムチャツカ、朝鮮半島、台湾、北アメリカで繁殖し、北方のものは冬期に南下する。

【生息地の環境／生態的特性】

繁殖期におよそ 600m 以上の標高にある谷や沢などに生息し、主に溪流沿いの地上にコケなどを使って営巣する。繁殖期や繁殖前期にはツイリリリチャヒヒチリリ・・・など複雑でよく通る大きな声で囀る。地鳴きはウグイスより高く小さな声で、チョッ、チョッと聞こえる。越冬期も繁殖地の山塊で生息するものが多いとされるが、以前は尾張東部丘陵の麓や木曾川下流、知多半島や渥美半島の沿岸部など、繁殖地のある山塊から遠く離れた場所でも越冬期には普通に生息が確認されていたが、近年こうした場所での記録は希となっている。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖期の段戸裏谷では、1980年代以降明らかに生息数が減少している。越冬地である岩屋堂でも、以前は越冬期に複数羽の記録があるが、2000年以降は1羽を超える記録がなくなっている。明らかな減少の要因は不明であるが、地球温暖化や人工林の未整備、開発や観光地化などによる環境変化が考えられる。

【保全上の留意点】

標高が高く林業生産に不向きな人工林は、伐採等で一時的に環境が悪くなっても、落葉広葉樹林や針広混交林など本来の森林環境に復元することが望ましい。

【特記事項】

昔から、秋冬は人間社会のごく身近に存在していた種である。当時の隙間だらけの民家の中を、藪の一部であるかのように通過することが普通であり、古事記や日本書記の時代から人間に親しまれてきた小鳥である。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.232. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

コルリ *Luscinia cyane* (Pallas)

【選定理由】

夏期に山地の落葉広葉樹林に飛来して生息するが、繁殖地は標高の高い山地にある原生林や二次林に限定されるため、県内における繁殖環境は限られている。段戸裏谷では原生林の環境が変化して本種の生息数に増加傾向がみられるが、県内の二次林は必ずしも良好に保全されていない。

【形態】

全長 14cm。雄は、頭頂から上尾筒にかけて上面が一様な暗青色で、喉から下尾筒にかけて下面は白色、額は明るい青色で、目先から側胸にかけて黒色部がある。雌は全体がオリーブ褐色で、腰から尾にかけて青色味があるものが多い。脚は長めで肉色。



石川県, 2001年5月5日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、東三河北東部や西三河北東部にある標高 700m 程度以上の原生林や二次林に飛来して繁殖する。春秋の渡りの季節には、半島部や平野部なども通過する。

【国内の分布】

夏期に北海道や本州中部以北に飛来して繁殖する。

【世界の分布】

シベリア南部からアムール、サハリン、中国東北部、朝鮮半島で繁殖し、冬期はインドのアッサムから東南アジアに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

県内では標高 700m 程度以上にある原生林や二次林に飛来し、地上の物陰に広葉樹の枯枝や枯葉などでわん形の巣を作って繁殖する。繁殖期は藪の中や低木の樹冠の下などで、チツ、チツ、チツ・・・と次第に早くなる前奏のあとに、ヒン、カラララ・・・とか、チュカチュカチュカなどと大きな声で囀る。ヒン、カラララ・・・と鳴く部分はコマドリ *Erithacus akahige* に似ているが、前奏のチツ、チツ、チツ・・・を加えることや、チュカチュカチュカという囀りを混ぜることで、コマドリの囀りとの識別が容易になる。地上をホッピングしながら昆虫を捕食するが、灌木の実なども食べる。春の渡りは4月下旬から5月中旬、秋は9月から10月であるが、秋は鳴かないので記録が少ない。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖地は、県内東部の標高 700m 以上にある原生林や二次林である。野鳥の生息数は長い周期で増減を繰り返しているようで実態は不明であるが、同様の環境で繁殖する在来種の大半で減少が著しい。減少の要因は観光開発と道路建設、およびそれに伴う人や車の増加と考えられる。

【保全上の留意点】

標高が高く林業生産に適さない地形や場所にある人工林については、伐採を実施して本来の針広混交林や落葉広葉樹林に復元するべきである。

【特記事項】

県内で唯一生息数が増えている段戸裏谷をはじめ県内にある標高 1,000m 程度の山の大半では、2014年頃から下草のスズタケに花が咲き、2019年現在林床は全て枯れ果てている。ウグイス *Cettia diphone* や外来種のソウシチョウ *Leiothrix lutea* には大きな減少傾向がみられるが、他の山を含め本種の数には、他種のように急激な減少傾向はみられていない。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.266. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

コサメビタキ *Muscicapa dauurica* Pallas

【選定理由】

県内の落葉広葉樹林に飛来して繁殖するが、近年繁殖期の生息数が減少しており、繁殖分布にも縮小傾向がみられる。囀りや地鳴きの確認が困難なこともあるが、近縁で繁殖環境や生態がよく似ているキビタキの生息数は増加して、分布域も著しく拡大している。両種の差には、どのような要因が関係しているのか疑問である。春秋の渡りでも以前のような数が見られず、全国的にも漸減傾向にあることが推測される。

【形態】

全長 13cm。上面は灰褐色で、雨覆と風切は褐色味が強く羽縁が淡黄褐色。胸と脇は淡い灰褐色で下胸から腹にかけては白っぽい。眼の周辺に白い縁取りがあり、眼先は白色で褐色の顎線がある。嘴は黒色で下嘴の基部は橙黄色。脚は黒色。



愛知県豊田市, 2017年4月22日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

夏期に、標高およそ 100m 以上の丘陵地や山地に飛来して繁殖する。渡りの季節には渡りコースの山塊や半島だけでなく、河川敷や都市部の公園などでも見られる。

【国内の分布】

夏鳥として飛来し、九州以北の低山で繁殖する。

【世界の分布】

インド、ヒマラヤ、バイカル湖周辺からアムール、ウスリー、中国東北部、サハリン、日本で繁殖し、冬期はインドから中国南部、東南アジアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

夏期に丘陵地や山地の落葉広葉樹林に飛来して繁殖する。巣は樹木の横枝に蘚苔類や樹皮、クモの糸などを使って皿形に作り、表面にウメノキゴケを貼り付けて木のコブのようにみせる。餌は主に昆虫やクモなどで、飛翔する昆虫を捕食することも多い。ツィーチリリチョコピリリなど細く複雑な声で囀り、地鳴きは、ツイ、ツイと聞こえる。

【現在の生息状況／減少の要因】

標高 1,000m 以上の茶臼山や段戸裏谷から、瀬戸市や岡崎市の山麓まで繁殖期の記録があるが、生息数は多くない。1970年代までは岩屋堂でも営巣が確認されていたが、近年は繁殖期の記録がなくなっている。また、段戸裏谷でも 1980年代以降緩やかに減少し、近年繁殖期の確認記録はかなり少なくなっている。

【保全上の留意点】

地球温暖化により、日本を繁殖分布の南限とする種の繁殖数減少が指摘されているが、比較的標高の低い疎林にも繁殖する本種では、落葉広葉樹の疎林が減少していることが減少の要因と推測される。衰退している県内の農林業を振興することが必要で、山に手が入ることにより里山の林の照葉樹林化やジャングル化を防ぐことも大切であると思われる。

【特記事項】

日本では夏鳥とされているが、越冬期である 2000年12月から2001年1月には安城市の公園で1羽が、1993年1月にも西尾市の公園で生息している1羽が確認されている。

【関連文献】

五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸, 2014. 新訂 日本の鳥 550 山野の鳥, p.291. 文一総合出版, 東京.

(高橋伸夫)

ダイゼン *Pluvialis squatarola* の越冬群

【選定理由】

愛知県鳥類生息調査の結果では、毎年 200 羽以上の越冬が確認されていた調査地は庄内川河口と汐川河口のみであるが、庄内川河口では 1996 年 3 月、汐川河口では 1998 年 2 月を最後に 200 羽以上の記録が無くなった。2010 年以降の記録は庄内川河口で 100 羽程度以下、汐川河口では 50 羽程度以下にまで減少したことで、県内全域で越冬する全ての個体群が、愛知県の地域個体群と評価された。

【形態】

全長 27～31cm、翼開長 71～83cm。夏羽は、頭頂から後頸にかけて白色で黒色の斑が散在し、肩羽と雨覆および三列風切は黒褐色で白色の斑が数多くあり、顔から前頸、胸、腹にかけては黒色で、額から眉、側胸にかけて幅広い白色帯がある。冬羽は、頭および上面が褐色で白色の羽縁があり、顔から胸にかけては淡褐色で腹は白い。幼羽は冬羽に似るが、上面の羽縁および三列風切の白斑が明瞭。腰は白色で、尾羽に細い黒色の横帯が、脇に大きな黒色斑があり飛翔時の識別点となる。



愛知県西尾市, 2019 年 2 月 23 日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

冬期および春と秋の渡り時期に伊勢湾、三河湾沿岸の干潟および島嶼に生息する。

【国内の分布】

春と秋の渡り時期に渡来し、本州中部以南で越冬する。

【世界の分布】

ユーラシア北部から北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ、インド、東南アジア、オーストラリア、南北アメリカの海岸で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

伊勢・三河湾沿岸部に残る干潟で越冬するが、干潟の中でも砂地の環境を好む。内陸へ飛来することはきわめて希で、主に干潟のゴカイ類、甲殻類、二枚貝などを捕食する。ピューイ、ピューイと澄んだ声で鳴く。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では藤前・庄内川河口、矢作川河口・一色干潟、三河湾の島嶼、汐川干潟、福江湾・伊川津干潟周辺で越冬するが、最も多い藤前・庄内川河口で 100 羽程度以下、他は全て 30～50 羽程度である。減少の要因は埋め立てによる干潟面積の減少と環境悪化、近年は県内全域で下水道が完備した結果、湾内に流入する水には河川の流量減少によりケイ素が、終末処理場から出る水には窒素やリンなどの栄養塩類が減少しており、湾内が貧栄養化して生物全体が減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

工業排水や家庭排水、開発現場排水の中から化学物質や重金属、シルトなどを除去することは最も重要な排水管理である。しかし、本来河川から流入していた生物由来の有機物やそれらが分解されてできた栄養塩類、本来の河川流量であれば伏流水などで多量に供給されていたケイ素などの物質が少なくなれば、海や干潟の生態系は大きく崩れ、内湾に依存する水鳥は生息できなくなる。

【特記事項】

近年三河湾の島嶼での生息が確認され、その数も春先には 30～50 羽となるが、島には砂地が少ない。島では干潟でなく、潮の引いた岩場を中心に採餌をしているようである。

（高橋伸夫）

サシバ *Butastur indicus* の渡り群

【選定理由】

1972年秋、国内でタカの群れが渡りをする姿やその方向が、科学的な視点で再発見された場所が伊良湖岬であり、国内でタカの渡りの定点調査が始められたのも伊良湖岬である。その後国内各所で本格的な調査が始まり、現在では広大なネットワークとなっている。春の渡り調査を含め、近年は人工衛星を使った調査にまで発展して、渡りの実態は大きく解明されている。県内には豊橋～渥美半島～伊良湖岬コースの他に、豊川・岡崎～西三河南部～知多半島中南部のコースがあり、尾張地方にも小規模で幅の広いコースがあると思われるが、他のタカ類や小鳥類なども多く通過する三河地方の2コースを渡るサシバの渡り群が、愛知県の地域個体群と評価された。

【形態】

全長47～51cm、翼開長102.5～115cm。翼は長くてやや細い。成鳥は、頭から背にかけて赤みのある褐色で、腹に茶褐色の横斑、喉の中央に明瞭な縦線が1本あり、目は黄色。雄成鳥は、頭部に灰色味が強い。幼鳥は、上面に赤味がなく胸から腹にかけて縦斑、汚白色の太い眉斑があり、目は暗褐色。



愛知県西尾市, 2017年9月26日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

丘陵地や山地に飛来して繁殖するが、近年丘陵地での繁殖はなくなった。

【国内の分布】

国内では、北海道を除く全国で繁殖し、南西諸島では少数が越冬する。

【世界の分布】

アムール南部、ウスリー地方、中国東北部、朝鮮半島北部、および日本で繁殖し、南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、マルク諸島、ニューギニアなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

秋の渡りでは季節風が強い日は山を吹き上がる上昇気流を利用して山伝いに移動し、風が弱い日には、地表が温められてできる上昇気流を利用して移動する。渥美半島には山塊が続いており、西三河南東部にも山塊が続いているが、近年は渡りの季節に強い季節風が吹く日数が減少している。渥美半島コースでは多少雨が降っても、夕方近くでも渡りの移動が見られるのに対し、西三河南部を通り知多半島を経由するコースでは、空が曇ったり、晴天でも午後になると渡りの移動が止まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

伊良湖岬では、1980年代まで秋の渡りで15,000～18,000羽が記録されたが、2013年以降は5,000羽に満たなくなっている。国内の生息数が減少していることの他に、強い季節風の吹く日数が減少したことで、調査地点の真上を通らない個体が計測されなくなっている可能性も考えられている。

【保全上の留意点】

繁殖地の生息環境を保全すること、渡りのコース上に風力発電などの障害物を設置しないようにするべきである。

【特記事項】

平野部を渡る西三河南部コースでは、晴天の朝は宮崎海岸から知多半島へ、地表の温まる8時頃になると平野部を西方向へ、さらには知多湾を迂回する西北西方向へとコースを変えることが多い。

【関連文献】

伊良湖岬の渡り鳥を記録する会, 2000. 伊良湖岬のタカの渡り. タカの渡り 2000, pp.36-46. タカの渡り全国集会 in 信州実行委員会, 長野.

(高橋伸夫)

【国リストの種】

「国リスト」の種について、対象種が愛知県では絶滅危惧種（準絶滅危惧種、情報不足種を含む）と判断されなかった理由を以下に記述した。

1. ツクシガモ *Tadorna tadorna* (Linnaeus)
カモ目 カモ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
【越冬】九州地方を主な越冬地とする種であり、当県では以前より希な旅鳥、あるいは冬鳥とされていたが、国内でも生息数は比較的安定しており、県内への飛来数にも増加傾向がみられることから、県内では絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
2. チュウサギ *Egretta intermedia* (Wagler)
ペリカン目 サギ科 (国：準絶滅危惧)
【繁殖】繁殖期の生息数がある程度多く安定していることから、県内では絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
【通過】渡りの季節に確認される数もある程度多いことから、県内では絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
3. ケリ *Vanellus cinereus* (Blyth)
チドリ目 チドリ科 (国：情報不足)
【繁殖】本来の繁殖地である干拓地などの広大な農地では、農業形態の変化による乾燥化などにより、繁殖個体数に著しい減少傾向がみられるが、現在も県内平野部に広く分布していることから、現時点では絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
【越冬】冬季の生息数にも減少傾向はみられるが、県内平野部に広く分布していることから、現時点では絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
4. ハイタカ *Accipiter nisus* (Linnaeus)
タカ目 タカ科 (国：準絶滅危惧)
【越冬】越冬期の生息数は年により変動があるものの、長期的にみれば明確な減少傾向は認められない。県内では繁殖期の生息が確認されていないことで、越冬や移動の個体群については、現時点で絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
5. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* (Raffles)
スズメ目 サンショウクイ科 (国：絶滅危惧Ⅱ類)
【繁殖】愛知県鳥類生息調査の結果では、過去には生息数が少なかったが、2000年頃より繁殖期の記録が増加して安定していることから、絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。
【通過】通過個体群についても、2003年頃から増加して安定していることから、絶滅の危機に瀕しているとは評価されなかった。

(1.~5. 高橋伸夫)